

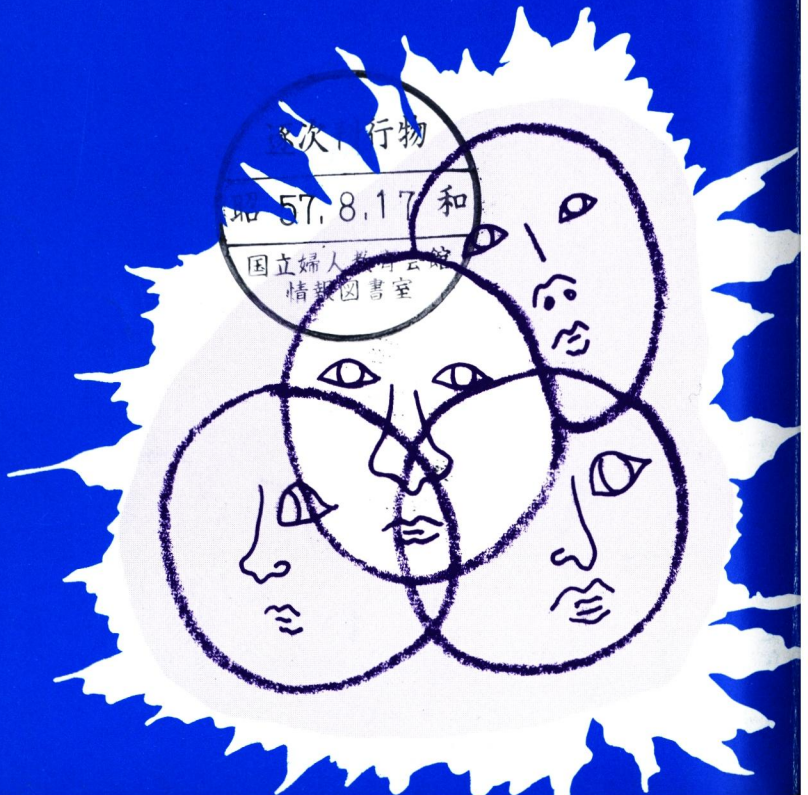
# 新しい家庭科

# ウイ

ウ

イ

6月号



## くらしを創る

### 青木やよひ

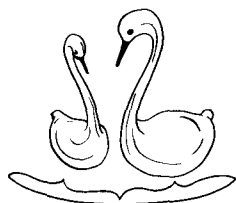
私たちがヨガをはじめて、今年でちょうど10年になる。有機農法の玄米と野菜中心の食事はその少しあとだったが、それでももうかなりの歳月が経っている。

当時は「なんと風変わりな」という目付きで見られたものだったが、いまは大部分ちがってきた。食品添加物の恐ろしさや健康の不安が、人々の間にひろまったせいだろう。しかしそれでも、私たちが主義主張のために、貧しい食事や苦業に耐えているように思っておられる方がまだ結構多い。

私の実感から言うと、ヨガとは、毎日一度自分の体と出会うことなのである。そして、「あ、きょうは右足のふくらはぎがかたいぞ」とかいう具合に、まず内なる自然である体の声を聞き分ける。同時に掲げた両腕を通して天の精気をみずからの中にとりこみ、心身のしこりをはぐすわけである。

有機農法の野菜も無添加の食物も、その方がずっとおいしくて、体が喜んで受け入れるからであって、けっして主義主張のためではない。夕食のおかず、庭で育てた野菜をとってきて四季折々に楽しむのは、むしろ無上のぜいたくだと思っている。

「自然ほど偉大な書物はない」といったのはたしかゲーテだったと思うが、くらしを創るとは、要するに私たちが、科学技術文明のために見えなくされている自然を発見し、その知恵をどれだけ日常性の中にとりもどせるかということではないのだろうか。



巻頭言 <くらしを創る>

青木やよひ

\* 共に生きる

生きとし生けるもの……………	樋田 昶	2
私の友人たちのこと……………	深尾 勝子	6
地域社会の再生のために……………	塚崎 直樹	10
学校の再生を一渦の中で……………	仲野 暢子	14
子供とオトナ……………	右田 久仁	18

\* 新しい家庭科を創るために

小学校では	「風のように」を中心に……………	名取 弘文	22
中学校では	共学の食物学習 II ……………	吉田 泰江	29
高等学校では	性と女性解放 (2) ……………	寺島 紘子	34
大学では	エコロジカルな家庭科……………	吉田 紘子	41

\* 発言

学習の主人公たち	共修の家庭科を学んだ男子高校生、卒業を前に 「さよなら、家庭科」……………	西成高校男子生徒	52
明日の家庭科教師たち	私が受けた家庭科、私がしたい家庭科……………	真道 佳子	54
親も言いたい	学校へいつ行けるの……………	金井 律子	58
市民として	「盲導犬はいや」……………	北村 小夜	60
教師のつぶやき	教師をやめた日……………	武田 秀夫	62

\* 連載

counselling 入門 (現場から)	共感的理解……………	児玉すみ子	47
視 点	人間存在としての「自立」……………	長谷川 孝	50
We の読書室	子どもたちへのまなざし……………	横山 雅子	66
テレビ残像	ドラマの描くもの、描かないもの……………	野村 康子	67
銀輪のうた	こわれた身体……………	栗原 実抄	68
K子さんちのね子たち	チー子の大病 (1) ……………	さとうけいこ	69
丙十舞雅里バラード	(3) ……………	門野 晴子	70
波	共に生きる……………	半田たつ子	71

We 武蔵野の会発足記・小田亜佐子 63 / Weになんでも言おう なんでも聞こう 64 /  
 こんにちは / 61 / わたくしからあなたに ワイド版 73 / アンテナ 77 / 十字路 78 /

“We” EDITOR'S NOTE 80

表紙 馬場洋子

## 生きとし生けるもの



共に生きる

榎田 劭

草木はほんとうに正直である。春の光を受けて、その喜びを全身で表現しているかのようだ。寒風にさらされ、きびしい冬をひたすら耐えて過ごした野山の草木は春を待ちわびていたのであろう。緑は日毎にあざやかさを加え、つぼみも一斉にふくらみはじめる。

彼らの喜びに応じて、私も畑に足を向ける機会が増す。わが家の庭の狭い菜園も、まさに春である。わずか六坪ばかりのものであり、土の見えるところすべてが野菜・野草のすみかになっているだけで、菜園などといえば聞こえがよすぎる空間である。

その狭い空間に、多種多様な植物たちが生を主張している。私の播いたもの、移植したものだけでも十指に余る。山東白菜、白菜、キャベツ、ケール、かぶら、大根、にんじん、セロリ、パセリ、三つ葉、ふだん草、水菜、サラダ菜などなど。そして、エンドウ豆も小さなかわいらしいツルを出し、天にのび上がろうとしている。仕事の手を休めて、彼らの個性的な主張を聞くことは実にたのしい。播いたもの、移植したものの以外にも、ヨモギ、ハコベ、タンポポ、

ハルジオン、カラスのエンドウ、フキ、ヤブジラミなどの食べられる野草が畑の間や庭の片隅に育っている。気をつけて見なければ見落とすにちがいない、ひっそりとした状態で生きている。ひっそりとしたというよりは、たくましく生きているというべきであろう。狭いわが家の庭の土にも、数えあげれば三十種を下らぬ食べられる植物が生えているのであるから、実に豊かなことである。食べられぬ草、食べられるにもかかわらず、そのことに気付かぬ草を加えれば、その種類はどの位の数になることだろうか。数えきれぬほどであることはたしかである。多種共生こそ自然の姿なのである。

この豊かな世界は土に依って成立している。土はすばらしい。しかし、土とひとことで片付けることはできない。地上に見える世界が多種多様の豊かな世界であるように、地下にも豊かな世界があるからである。地下に豊かな世界があつて、はじめて、地上に豊かな世界をつくり出すことができるのである。肥沃な土壌には多種多様な無数の生き物が住んでいる。ミミズやモグラなどだけでなく、カビ、細菌類と数を上げると、一グラムの土壌にも数百万とも、数千万ともいわれる生物が生きている。

三年前より、造成荒地を畑に変える努力をはじめているが、土のすばらしさを実感させられることは多い。入手したての造成荒地には雑草も育たぬのである。牧草のクローバーは豆科の植物で土地を肥沃にするに聞いてその種を播いたが、結果は惨憺たるものであった。ほとんど芽が出ない上に出土したもの、そのほとんどが消えてしまった。かろうじて育ったクローバーはあらかじめ馬糞や山土をばらまいておいた区画に限られていた。根は地上に置かれた馬糞や山土の直下をほうように伸びるだけで、その下の荒地には全く伸びていない。あたり前のことなのだが、土によつて植物は生かされているのである。そのような荒地にも、セイダカアワダチ草やススキのように荒々しい草が生え、根を伸ばし、土を変える。畑に変えるべく、馬糞堆肥を鋤き込み努力を重ねたが、私たちの意図的努力には限界があり、なかなかまとまらず土になつてくれそうにはない。二年目にやつと雑草が一面に生い繁つてくれるようになったが、土の色は白っぽくヤセ地のままである。作物などとはとてもという状態であり、ネズミの尻尾のようなサツマ芋が少々という有様であった。三年目の昨年やつと、カボチャやピーナツなどの収穫がたのしめるようになった。その収量はわずかで人には言えぬほどではあったが、土の色も心なしに黒っぽくなつてきたように思われる。

土の色が少し黒っぽさを加えたときには、土も柔らかくなつてゐるものだ。三年前には一畝鉤を入ると腕に疲れを感じるほどに土は重かった。現在も農地に比べるとやはり固く重い、鉤に疲れることは少なくなつた。私が農作業にいくらか馴れてきたことを割り引いても、土質の変化が大きくはたらいっていることはたしかなことだ。仕事が楽になり、作業ははかどる。

白っぽい色の荒地には住んでいなかった小さい生き物たちが住みつくようになり、土の色も変わりはじめたのである。多種無数の目には見えぬ小さな生き物たちが私の作業を励まし、助けてくれるよううでたのしくなつてくる。生き物の住まぬ荒地に鉤を入れる孤独な作業とちがつて、柔わらかく変わりつつある土にはまだ貧相な生物相とはいえ、小さい仲間たちが声援を送ってくれるかのようだ。この声援・助力を感謝しながら、堆肥を畑に入れてやる。堆肥は彼らのエサであり、彼らの住み心地よい土に変える力をもっている。堆肥をもらつて、彼らも喜んでるにちがいないと感ずるからである。そして、その結果、土は肥沃となり、肥沃な土に元気な植物が育つようになると、より豊かな世界が実現するのだと夢をみる。

ここに共生の世界がある。孤独よりは孤独でない方が幸せであり、無理がない。生物は元来、孤独には生きられない運命にある。植物・動物・微生物、そのいずれもがそれぞれの生活の仕方、相互に依存しつつ、自立的個性的な「生」を主張している。そこには、食いつ、食われつ、影響し、影響されつつ、生活は重なっている。それぞれの生物種はその生存の場にふさわしい生き方を定め、生きる可能性をひらいてきたのである。生きられる可能性の大きい場を得て繁栄すると、その生物の排泄物が毒性をもち、自らを抑制したり、天敵がふえたり、エサが乏しくなつたりといったさまざまな理由で専制支配の繁栄は許されないことになっている。これは生物界の平等で民主的な掟とも言えよう。

この掟によつて自然界はバランスを保っているのである。利己的専制支配の許されぬバランスの中で、多種無数の生命がその「生」

を真剣に追求し、生きる場を得ている。いかなる生物も生活の仕方は本質的に保守的である。それは永い種の歴史の中でこのバランスで維持される自然環境と適応してきたからである。地球の歴史に天変地異がなかったわけではないが、一時的局地的なものであった。そして悠久の自然とも言われるように生物界を支配する地球の気象条件は、日周・年周のリズムはあるが激変することとはなかった。少なくとも、通常ゆっくり変化するものである。この悠久の中で適応し、バランスをとる限り、生物界に安定があり、共生の世界が実現することになる。

人間も地上に生きる生物の一種であり、この掟から免れるわけにはいかない。しかし、この「繁栄」する社会の現実はどうであろうか。どうもこの掟を忘れ、横暴を極めていように見える。急激に繁栄し、モノ豊かな社会が実現し、生活形態の変わること自体が生命の保守性と矛盾している。この急激な繁栄は他の生きとし生けるあらゆる生命界との共生を忘れた横暴の結果である。

もともと、人類文明と誇ってきたものには大なり小なりその横暴はつきまといっている。知恵の実を食ってエデンの楽園を追放される話は、寓話としてそのことを教えている。事実、人類は文明によって共生の原理に外れる道をえらんだのだ。メソポタミア、エジプトの繁栄した古代文明の没落も、略奪農業による緑地の砂漠化といわれている。栄枯盛衰の文明史のほとんどすべては、その繁栄を支えた共生否定の横暴にあったといつてよいだろう。しかし、現代の横暴は質量ともに並はずれている。

現代のモノ豊かな社会は石油・地下金属資源の乱消費の上でできあがっている。使えばなくなる物資によって成り立つ文明が、一人占めの利己主義と資源枯渇の近い将来と、それ以後のことを考えぬ目先きに流れる利那主義とによっていることは、ここではくわしくふれることはしない(拙著『共生の時代』―樹心社刊を参照下さい)。しかし、現代文明を貫く利那的利己主義が共生否定の横暴を極点にまで押し上げていることは指摘しておきたい。そして、その報いとして、生存の危機に直面しているのである。

昨年度に、ガンは脳卒中を追い抜いて死亡率の第一位となった。ガンが生命を特徴づける自己複製の原理からの逸脱、つまり、生命情報を司どるDNAの損傷に伴う細胞の異常増殖であることはよく知られている。ガンの増加は、それ自体深刻なことであるが、同じ原因がひきおこす遺伝情報の破損、つまり遺伝障害をも拡大しているだろうと予測されることにおいても深刻である。いずれにしても、生命の危機である。

この危機は何故だろうか。石油文明が生み出した新化学物質と細胞がなじめないからである。医薬品、農薬、食品添加物などが複合汚染的に作用する原因物質と見做されている。一つ一つの発ガン作用をあげることはしないが、これらの使用にも流れる共生否定の考え方は注目しておいてよい。自分のことと目先のことしか考えぬ横暴が貫かれていることは容易にわかるだろう。

たとえば、食品添加物中の合成保存料を考えてみよう。ものが腐るといふことは、微生物がそのものをエサとして食い、殖えるということである。人間にとっての食糧は彼らにとっても食糧である。

同じ食べ物を人間と微生物たちととり合う宿命にある。どちらも生きるために、真剣に食べ物に接近することは当然である。しかし、それを食べることで、できぬように毒性物質を添加し、微生物を近づけぬようにするなどは共生のルールに反している。卑劣な一人占めではなからうか。微生物も生きられぬほどの毒性物質を加えて、ご馳走だと喜び食べる人間はあさましいですすことが出来るだろうか。この利己主義は目先きのことしか考えていないが故に罰せられるにちがいない。食べるときの舌先きに御馳走と感じることはできません、この毒入りの食品は胃腸に入つて、どんな作用をするのだろうか。この毒物が発ガン物質であつたり肝臓毒であつたりするだろう。しかし、それだけだろうか。

自分のことしか考えぬ人間は腸の中が共生世界であることを忘れがちである。腸の中も、多種無数の微生物のすむ世界であり、共生のバランスが成り立っている。多種無数の微生物の中には私たちにとつてなくてはならぬ知られざるビタミンを分泌するものもあるだろう。また、発ガン物質を分泌するものもあるだろう。良悪さまざまな影響を及ぼし合いながら、人間が生きるのにも、微生物が寄生するのにも、結果として都合のよいバランスが成り立っているから、人類はその生存を許されてきたのである。ところが、このバランスの世界に、合成保存料が投入されればどんなことになるだろう。バランスの崩れが危険な結果をもたらさぬという保証はあるだろうか。バランスの崩れが病氣であるという事実注目するとき、この危険の意味は容易に理解されるだろう。

これは食品添加物の危険の一面にすぎぬ。その作用はさまざまな方面にみられるにちがいない。医薬品、とくに抗生物質もその効果

のあり方を考えれば、共生の原理の否定であり、それらの危険性は同様に考えうるものだ。農薬も自然界の共生によるバランスを傷つける殺伐たる考えによつて利用され、その結果は人間自身にとつても農薬中毒のおそれとつながっている。共生の原理を否定する横暴の報いの例は数えあげればきりが無い。国民総病人時代といわれる状況。子供たちが虚弱となり骨折がちであつたり、風邪をひきやすくなつたり、アレルギー性諸疾患に悩む現実。これらは全て同根と思う。

生命の危機、生存の危機をのりこえるためには、それをもたらした原因を問い、時代のあり方を改めねばなるまいと思う。このまま進めば、ガン死時代、飢えの時代は避けられぬであらう。もし、それを避けたいと願うならば、共生の原理によつて生きる時代をつくり出さねばならない。もともと、生きるということは、共生するということなのだ。

共生のためには、利己的利他的な浅い知恵や食欲によつては無理である。多種無数の生き物たちとのバランスを大切にすることであり、横暴を排し、つましく生きる以外にない。生きるために必要な物質は元来、それほど多くはない。衣食住の全てにある「必要の錯覚」から目覚めることである。

共生する自然は豊かであり、恵み深い。四季折々の緑は私たちに生存の可能性を保証している。そこに依つて生きるとき、幸せも実現するものだ。野山や庭の緑がそう教えてくれている。今日も野草摘みに出ようと思う。

## 私の友人たちのこと

深尾 勝子

昨年暮、私は'82年用の手帳を二冊買った。一冊は私自身のために、もう一冊は東京・国立市の矢川団地で重度の身体障害を持つ三井絹子さん（37）と暮らしている俊明さん（35）に送るために。

年の暮れに、翌年の手帳を俊明さんに送るのはこれが二度目だった。国際障害者年の前年の'80年に北海道新聞家庭面で「'81国際障害者年に向けて」という年間連載企画を行い、その第五部「地域に生きる」の取材で俊明さん、絹子さんとじっくり語り合って以来のことだ。私が、現状を変えてゆく小さな努力として「俊明さんの手帳」を提案したのだ。

年が明けて、俊明さんから年賀状が届いた。はがきには一人娘の美樹ちゃん（3）が描いた家族の似顔絵が印刷されており、その横に「手帳届きました。ちょうど、送って、とさいそくしようと思っていたところでした」と書かれていた。美樹ちゃんの描いた絹子さんの顔が、絹子さんの最も安定した姿勢——横たわった状態の顔だったのにも、思わず笑いが誘われた。

私が俊明さんと絹子さんを訪ねた時、二人は十数年にわたって、重度の障害者が地域で生きるための闘いを粘り強く続けながらも、心理的には「八方ふさがり」と言っている状態にあった。

俊明さんは「ボクはいつもキヌにしばらくられている。ときどきたま

らなくなる」と言い、「もし、交通事故かなにかでキヌが死んだら、なんて考えることがある。そうなったら、一度、毎朝、ネクタイをしめて、アタッシュケースなんかを下げて会社に出勤して、帰りに同僚とちよつと一パイ飲んで帰るといった「普通の男」たちがやっているような生活をしてみたい」とも言った。

ネクタイをしめて——というのは俊明さん一流の皮肉をこめた冗談だが、俊明さんが語りたかったのは、重度障害者の絹子さんの「ふつうの人間」のように地域で暮らし、子供を産み育てたいという願いを実現するために、自分自身は「ふつうの人間」のように生きられないでいる。もし、俊明さんが、自分自身の生き方を追求しようとすれば、絹子さんは施設に入り、ただ生かされているだけの人生を送らなければならない。そんな二人の間のせめぎ合いの苦しさだった。

「八方ふさがり」は、俊明さんも絹子さんも、共に、どんなに重い障害を持つ人も、決して施設に「収容」させてはならない。健常者と一緒に地域で生きるべきだ、と固く信じているところから始まっている。障害者が地域で暮らすには、そのハンディを補うための人手がいる。だが、公的なヘルパーの派遣は、週に一日か二日程度だ。二十四時間、全面介護が必要な絹子さんのところには、美樹ちゃんが産まれてから「特例として」（国立市福祉事務所）、週三日、一



日二時間四五分、ホームヘルパーが派遣されている。しかし、残りの一週一六時間は、俊明さんか、俊明さんと絹子さんが集めたボランティアの人手でまかなわなくてはならない。

十年前、俊明さんと絹子さんが一緒に暮らし始めた時、俊明さんはサラリーマンだった。だが、一年半もたたないうちに会社を辞めざるを得なくなった。仕事と家事・介護の両方をするとうとう遅刻、欠勤が多くなる。時間外も出来ない。目いっぱい、手いっぱい使えない社員を会社は喜ばないし、俊明さんだけでなく絹子さんもくたびれてしまっていた。

美樹ちゃんが生まれてから、俊明さんは周囲の「大の男が仕事もしないで生活保護で暮らしているなんて……」という目に耐え切れず、また、俊明さん自身も仕事を持ちたくて、無農薬野菜の配達を始めた。絹子さんと美樹ちゃんをライトバンの助手席に乗せて、早朝から深夜まで都内を走り回った。こんな無理が続くはずもなく、五カ月後には三人と一緒に高熱を出して寝込んでしまった。「働けないのだ」と俊明さんは身に沁みて悟った。

俊明さんと絹子さんの「障害者を施設に収容させてはならない」という強い確信、決意を支える障害福祉対策は、具体的な施策も、それを支える理念も、あまりにも貧困だ。それが、二人を抜き差しならない依存関係に追い込んでいる。私は二人を「絹子さんは「俊明中毒」、俊明さんは「絹子中毒」だ」と言った。

俊明さんでは家の中では絹子さんと美樹ちゃんの食事、排せつ、着がえ、入浴、家計のやりくり、外部との対応、応接。外出時には、

食事や排せつなど身の回りの世話に加えて車の運転、イスの後押しのほか、口がきけない絹子さんの指文字を読んで絹子さんの意見や話の代弁もしなくてはならない。「キヌは、美樹は」と俊明さんの心と体はいつもフル回転だ。

時たま、みかねた周囲の人が俊明さんに、半日とか一日の自分自身のための時間を作ってくれることがある。だが、俊明さんは外出してもすぐに帰ってきてしまう。「キヌがどうしているかと思うと気になって落ち着かない。ああもしたい、こうもしたい」と普段思っていることはたくさんあるのに、つい足が家に向いてしまう」と言う。必要なのは、こまぎれの時間なのではなく、絹子さんが俊明さんをあてにしくても生きてゆける「条件」と「理念」なのだ。

二人の関係を「美しい」と見る人がいる。俊明さんを「聖人君子」扱いする人もいる。もし、二人の関係を「美しい」とするならば、すべての人間関係がそうであるように「美しい」だけだし、俊明さんは「聖人君子」などでは決してない。俊明さんは、絹子さんを一人の女として愛し、絹子さんも含めた他の人間に対して、やさしく誠実でありたい、と願っているだけだ。

私たちは二人を特別視することなく、「ふつうの人間」として「ふつうに生きる」条件を保障しなくてはならない。また、二人も「闘う絹子さん」と「絹子さんの支援者である俊明さん」という出会い時以来の関係をぬぐい切ってしまうなくてはならない。俊明さんと絹子さんがそれぞれの闘いの主体となり、共闘者とならなくてはならない。

私の提案「俊明さんの手帳」には、俊明さんが日々の暮らしに忙

殺されることなく、闘いの主体者としての自分をしっかりとつかみ切ってほしい、そんな願いがこめられている。

国立市には、やはり「地域に生きる」の取材で親しくなったジュンペイこと新井純子さん(30)とエイタこと新井栄治さん(31)の重度身障者同士のカップルと、その子供たち、友君(5)、康君(3)がいる。

このカップルはお互いを「ジュンペイ」「エイタ」と呼び合って、子供たちにも、お父さん、お母さんとは呼ばせない。「ぼくたちのような重度の障害者が地域で暮らし、子供を産み育ててゆくためには、既成の親子、夫婦、家庭にとらわれてはやっていけない。男も、女も、子供も自立し、自分自身と、生活の場を開き、他人とつながっていかなくては」と栄治さんは言う。

取材当時、純子さんは和光大学の五年目四年生で卒論を執筆中、栄治さんは家事、三歳と一歳の子供の育児の大部分をやりながら、映画評の執筆と子供のころからシナリオ風に書きためてきた日記の映画化の構想をねっていた。

純子さんも栄治さんも車イスを使うのでベランダが玄関がわり。そのベランダの戸の開け立てが激しい。手を使えない純子さんがテープに吹き込んだ卒論を文字に直す作業をしている友だち、「近くまで来たから」と掃除や夕食の仕たくをしながらおしゃべりをしてゆく友だち、純子さんの子供の「あずけ合い」仲間が来る。栄治さんが撮影したハッパを、現像し、出来映えを批評しに来る友人もいる。

純子さんも栄治さんも、ひとりひとりの友だちと実にていねいに

つき合う。二人がそれぞれに置かれている状況、したいと思っていること、考えていること、子供たちをどう見ているか、子供とどうつき合っているのか、などをきちんと話す。二人は、お互いに、いつも、こうしたことについて話し合っているが、だからと言って、一方が二人を代表するとか、他方の代弁をすることはしない。それぞれが、それぞれに友だちとつき合う。「ジュンペイはジュンペイ。エイタはエイタ」なのだ。

二人の自分自身と他人に対する誠実さには頭が下がる。自分たちの障害を見ずえ、それが自分自身と他人に対してどういう意味を持つか、をいつも感じ取り、考えている。これは子供たちに対しても例外とはならない。だから、子供を叱る時に「お前たち健常者なんだぞ」という言葉も出てくる。一瞬一瞬と、一日一日を精魂をかためて生きている二人だ。

自立して、自らを開き、他人とつながる——文字でなら、たった一行で書ける。だが、この言葉を「生きる」には、たいへんな努力がいる。しかも、健常者なら、到達目標にしても生きてゆけるこのことが、純子さんと栄治さんにとっては、地域で生きてゆくうえの欠かせない条件なのだ。

私には、俊明さんと絹子さんがつき当たっている壁、純子さんと栄治さんが苦闘しながら手さぐりしている生き方のどちらも、障害者固有の問題とは思えない。私たち健常者が、目を見開いてしっかりと見すえていない壁を、やさしさという名の下であいまいにしている人間とのかかわりを、生存をかけて明らかにしてくれているのだ、と思う。

私たちがとり込まれ、生き難いと感じつつ維持してきた家庭、いわゆる「家庭責任」、性別役割分担——これらを打ちこわさない限り、つまり、二人を取り巻く状況が、価値観が変わらない限り、絹子さんがほんとうの意味で地域に生きた、ということにはならないし、俊明さんと絹子さんの両方がそれぞれの生をまっとうすることもない。

純子さんと栄治さん、二人の子供たち、彼を取り巻いている友人たちが手さぐりしているのは、人間の営みのとらえ返しだ、と言っていると思う。男と女が生活を共にし、子供を産み育てる、という営みが、いまは、家庭という枠内で「家事や育児をすること」にわい少化され類型化されている。それだけではない。「家事や育児をすること」そのものが人間の営みの目的であるかのように錯覚されている。

人間の営みの目的は、ひとりひとりの人間の生存を保障し、自己実現をはかることである。それを忘れ、「家事や育児をすること」そのものを目的化することによって、障害者を始めとするさまざまな「家事や育児の出来ない人」「家事や育児に失敗した人」への差別が生まれ、男と女の、あるいは親と子の悲劇も産み出される。

男女の性による役割分担がどんなに非人間であるがなかなか認識されないのも、「家事や育児をすること」を目的化して、それをいかに能率的に効果的にやるか、ということが重視され、ありのままに人間を見つめ、その人間の生をまっとうさせることが人間の営みの目的だ、という基本が私たちの考え方から抜け落ちてしまっているからではないのか。

私の頼もしい友人たちは、昨夏、相ついで札幌の私の家を訪れ、滞在していた。まず、五月の中旬に純子さんと栄治さんとその子供たちが障害を持つ友人たち四人と共にやってきた。続いて、八月末に俊明さんと絹子さんが美樹ちゃんを連れてやってきた。

空路やってきた純子さんと提愛子さんは、障害者が幼児を連れて飛行機に乗る、という「かつてないこと」を、やりとげながらやって来た。日航では会議を開き、「前例としない」として認めたという。俊明さんたちはライトバンに寝具を積み、北海道の観光案内書を二冊も買ってやってきた。二週間かけて全道を回るはずだったが、結局、寝具も案内書も使わずじまいだった。

二組の訪問者たちは、それぞれのやり方で、くつろぎ、楽しみ、学び、ここでもまた障害者差別と闘って帰っていった。彼らが札幌滞在を心から喜んでくれたのはもちろんうれしかったが、なによりうれしかったのは、私の友人たちと友だちになってくれたことだ。

婦人労働、障害児の統合教育、食品公害と農業問題、反原発、保育問題など、さまざまな課題に取り組んでいる女たちが、彼らと語り、食べ、一緒に遊ぶなかで、自分自身を改めてみつめ直し、闘いの目的を再確認し、闘い続けるエネルギーを得た。

四月の始め、新井栄治さんから手紙がきた。「冬の間にジュンペイが三回もカゼをひき、頭のわるい僕はカゼもうつらず、その分てんてこまいの生活が続きました」と近況が書かれ、末尾に「映画づくり、エンジン開始しました」とあった。栄治さんが車イスに取り付けた特製のカメラを回している姿が目に見え、そのうち、栄治さんの目がとらえた「人間の営み」を見せてもらうことが出来る。

(北海道新聞記者)

## 地域社会の再生のために



共に生きる

塚崎 直樹

私は数年前、「医学としての水俣病」という映画を見たことがある。三部作になっていて、非常に長時間にわたる映画だった。私はその中のあるシーンに、衝撃的な印象を受けた。映画そのものは、水俣病を医学的に、できるだけ客観的に映像化しておこうとするものであって、私が衝撃を受けたシーンは、映画の目的から言えば、むしろ副産物的なものにすぎなかったのかも知れない。だからなお一層、直接的な衝撃を受けた。

一つのシーンは、水俣病が発見されたころの漁村の風景で、流木の本ぎれを釘で打ちつけて作ったとも思えるような、漁師の家々の間を、子供たちが走りぬけていく光景だった。子供たちの服装はまずしく、誰もが素足で、すさまじい勢いで、走りぬけていく。

もう一つのシーンは、現在の胎児性水俣病の患者の家庭の光景である。被害者の患者は色あざやかなバッチワークの布団をかけられたコタツに入って、両方から家族に支えられて、カラーテレビを見ている。畳はま新しく、そぼのガラス戸の木のサンの色も新しい。患者はテレビを見ながら、どこか空虚な笑いを浮かべ、身体をゆっ

くり動かしている。

私は映画を見ている時、この別々のシーンが、そのままつながって見えて、そこに象徴的に表現されていることに、衝撃を受けた。

そのことを分析してみるなら、それは、戦後の経済の高度成長過程が、我々に何をもたらし、逆に何を奪っていったのかということだろう。

あのボロボロの家は新しくなり、まずしい服もきれいなものになった、何もない家には電化製品が並んでいる。しかし、あの健康な子供はどこへ行ったのか。

もし、この一見、富にかこまれてくらしているかに見える、我々の生活が、「いのち」と引きかえに得られたものだとしたら、それは本当に、富と呼べるようなものなのだろうか。胎児性の水俣病の患者は、そのことを問いかけていた。

\* \* \*

精神障害者が地域で生きていこうとする時、家族や周囲の人々の援助が、大きな役割をはたすことは言うまでもない。そして、そうした人々を持っていない障害者が、新しく地域の中に出ていこうと

したら、それらの援助者の存在を、容易に他のもので置きかえることはできないことに気付く。では、どのようにして、家族から見捨てられ、地域から排除された人々に、もう一度、身近な援助者を作り出していくのが、問題になってくる。

私は二年前に、精神病院を退院して地域で一人でくらししている精神障害者を中心として、一ヶ月に一度、夕食会を開くことにした。土曜日の夕方、何人かの患者が、食事の材料を買ってきて、誰か一人のアパートで、それを調理して、焼き焼やなべ物、バーベキューを作って食べる。入院中の患者も参加しているので、アルコールを沢山飲むわけにはいかないが、コップ一杯ぐらいのビールも出してみる。アパートで一人ぐらしの人にとって、仲間が沢山やってきて一緒に食事をするのは楽しいものだ。人数を考えに入れて買って来たはずなのに、モヤシだとか、ネギだとか、一つの材料がやたらとあまってしまったりするのも、笑いの種になる。「おまえさんの部屋は掃除があまりしてないぞ」とか、「ヌードのポスターぐらいはっておけよ」とか、ワイワイ、ガヤガヤやっている。

入院している患者にとって、地域で一人でくらししている人の生活ぶりを、具体的に見るということとは、励ましにもなるし、自分の将来を考える時の手だてにもなる。一人ぐらしの人たちは、お互いのアパートを見ることによって、自分のくらしぶりを反省したり、友人の生活を参考にしたりできる。一カ月に一度というのは、わずかな出会いの機会にすぎないけれど、そこで作られた仲間は、突然の風邪だとか、小遣いを使い果たしてしまった時の助け合いなどに力を発揮するだろうし、何よりも、自分と同じようにくらししている人を知ることが、大きな精神的支えになる。

自分たちで料理を作ること、また、一人ぐらしで外食ばかりしている人には、自炊を考えてみる機会になる。入院している人にとって、食事はいつも一方的に与えられるだけのものだし、自分で買い出しに行ったり、料理したりしてみると、食べるものの感覚も変わってくるだろう。

こうして、食事は色々な目的や可能性を含んで続けられていくようになった。

ところが半年もしないうちに、この食事は行きづまってしまった。それは会場が確保できなくなってしまったからだ。ある人のアパートは共同炊事であったため、料理準備や後片づけをワイワイやりながらやっている、管理人がやってきて、「もっと静かにやって下さいね。そうでなければ出て行ってもらいますよ」と、露骨に苦情を言った。別の人のアパートでやった時も、管理人が数日後にやってきて、同じようなことを言った。それに、一人ぐらしの人のアパートの部屋は狭すぎた。多い時には十人以上の人間が集まるのだから、四畳半一間の部屋では、ちゃんや皿を並べるだけでも大変だ。飯台代わりのホームコタツ一台では間に合わず、わざわざ数人離れた他のメンバーのアパートから、タクシーに乗せてホームコタツを運んだりしたこともある。

結局、何回目かに、会場が得られなくなってしまった。食事は、参加者からとても楽しみにされていた。ある人はこれを「パーティー」と呼んでいたぐらいだ。それくらい、病院にいるにしろ、地域でくらししているにしろ、精神障害者にとって、自由に集まって話をしたり、食事をしたりするという機会が、与えられていないということだろう。しかたがないので、会場が見つからなくなってからは、

私の家を会場として使うようになった。

ところが私の家は台所も狭く、集団で炊事をするのには向いていないし、なによりも、互いのアパートを訪問し合つて、仲間作りをはかるという目的が、達成しにくくなつてしまつた。

食事はその後もずっと毎月一回続けられている。食事が近づくと、「今度は何を作ろうか?」と聞いて回つたり、仕事の帰りにスーパーマーケットをのぞいて、旬の魚や野菜を確認して歩くのも私の楽しみになっている。しかし、食事が始まつた時の、不思議な混乱のようなものがなくなつて、良くも悪くも、おとなしくて、家庭的になつてしまつたのが残念である。

食事は会場が私の家に移つてから、参加者も少し増えて、多い時には十五人ぐらになることもある。使える部屋は六畳一間で、家具も置いてあるので、きわめて狭い。参加希望者があつても、スペースの関係で断らなければならないこともある。時には、部屋にすわりきれず、隣の台所にわかれなければならないことになる。

特別な話題がなくても、いつものメンバーが集まると、なんとなく楽しくなってくる。私の子供などは、「今日は食事会だよ」と言ううと、「万才!」とさけんで、はしゃぎ出すくらいだ。すっかり私の家庭の中に、食事会はとけこんでいる。

しかし、食事会をしていて、いつも考えることは、なぜ私の家ですら開けないのか、開けなくなつてしまつたのかということだ。

\* \* \*

私は精神科医というのは、多少軽薄さの影があつた方が良いと思う。それぞれの患者の苦悩があまりにも重すぎるからだ。まづ正面

から受けとめるだけでは、受けとめきれないことがある。茶化したリ、軽薄にふるまつたりすることで、私たちが耐えられる苦しみにはおのずと限界があることを、それとなく示してみたりする。

ある時、私は精神障害者のためのディスコ大会というのを考えた。思いつきと言へば、思いつきだ。健康な若者なら、三千円ぐらい払つて、ディスコに踊りに行くことぐらいたまにはある。激しいリズムにのつて、踊っていると、何もかも忘れて、汗を流すことができる。もし、精神障害者と呼ばれている人たちが、周囲に気を使うことなく踊れたら、きつと解放的な気分を味わえるだろう。彼らには、三千円は大金だ。せいぜい五百円ぐらいで、なんとかならないだろうか。

私は何人かの友人とディスコ大会を計画した。一昨年の暮れだった。しかし、なかなか会場が見つからなかった。大きな音を出してもよい会場は値段が高すぎ、安い所はどこも音楽はだめということだった。色々会場は思いつくの、どこも駄目だということがわかつた時、私はなんと自由になる空間が少ないことかと思つた。

結局、大学の施設のうち、学生が自主管理的に使用している講堂を、使わせてもらうことになつて、昨年四月に三百人近くの人が集まつて、ディスコ大会を行つた。しかし、そこを継続的に使用するには、色々な障害があつた。ディスコ大会は楽しかつたけれど、他方で自由になる空間のないことも、強く心に残つた。

\* \* \*

東京でも大阪でも、少し高いビルにのぼれば、ずい分沢山の建物が見える。それは、沢山あるもんだという感じしか与えないかも知

れない。私は、食事会やディスコ大会のことがあってから、そうした光景に、沢山あるけれども、自由になる空間が、本当はほんとないのだと感ずるようになった。

私たちはずい分多くの富に囲まれている。第三世界と呼ばれているような国々の人々から見れば、日本の社会は富の洪水の中にあるように見えるかも知れない。しかし、それらは本当に多くの人々に開かれているのだろうか。そして、それらは本当の富なのだろうか。

私は一軒の家に住んでいるけれど、本当に狭い家だ。家族以外の人に来てもらって、ゆっくりしゃべろうとしたら、せいぜい五、六人の人にしか集まってももらえない。つまり私の家は開かれていないし、多くの人に開いていこうにも、おのずと限界がある。言ってみれば、家はあっても、それは数人の人の利用できるものにすぎない。考えてみると、家だけではない。私たちの所有しているもののほとんどが、数人の人が利用できる程度のものにすぎない。自動車にしろ、電化製品にしろ、種々の家具にしろだ。つまり、ほとんどの物は、家族数人のためのものでしかない。

ここで私は、最初に書いた水俣病の映画のシーンにもどってしまふ。私たちは何を得て、何を失ったのかと。そして、私たちは富を得たとしても、それ以上に、それにしぼられてしまっているのではないかと。数人でしか使用できないものを得て、それを富だと思ってしまうているけれど、それは本当の富なのかと。

\* \* \*

「共に生きる」ということを大切にしようとするなら、多くの人と共に生きていくために、役に立つ富を私たちは持つようにしなければ

ばならない。自分の快適な生活のために、自動車や家を手に入れようと、ローンに追われて働く人は沢山いる。日本中の人間がほとんどそうだと言ってもよい。しかし、それは「共に生きる」ということにとつて、どのような利益をもたらしているだろうか。そして、「共に生きる」ようにする人々が、具体的に覚えてくるだろうか。

日本が戦後作り出した富は莫大なものだ。もしこれを、「共に生きる」という原理を生かすために使っていれば、現在の日本はもっと違った光景を示しているだろう。おそらく個人個人の使える富は、もっとわずかで、見かけはもっと貧しく見えるだろう。しかし、現在の私たちよりもっと、肉体的な自由を得られていたのではないだろうか。

私たちはすでに生産された富に包まれているから、「共に生きる」富に、すべてを転換することは不可能だ。そして、私たち一人ひとりが、「共に生きる」相手を見出していないなら、その相手がいつの間にか国家にすり変わってしまうだろう。

「共に生きる」相手は見つけ出すものだし、作り出すものだと思う。自分自身や、数人の家族、すべての背後にあって何より確かに見える国家。それらの他に、「共に生きる」相手と、「共に生きる」空間と富を作り出さない限り、莫大な富は遠からず、私たち自身を押しつぶしてしまふだろう。

(精神科医)

## 学校の再生を―渦の中で

Hさんへの手紙

仲野 暢子

Hさん、ご丁寧なお見舞のお手紙ありがとうございます。私の

怪我を案じ、荒れた学校のことをわがことに憂えてくださる多くの  
方の友情に接し、「このまま一人でおちこんでいる場合ではない」  
と元気づけられています。まだ嵐のさ中で、みなさんの疑問に答える  
ことは、とてもできませんが、せめて辛い体験から学んだことを  
断片的にでもお話して、一緒に考えていただけたらと思います。

いま「校内暴力」ときくと、「教師側の暴力や管理体制こそ問題  
だ。彼らはその中で自己をせい一杯主張しようとしているんだ」と  
遠くから解説したり、また自分の子に被害が及びそうなら、「あの  
ツッパリどもの親はどういう育て方をしてるんだ！ 学校はしっか  
りしてほしい。手に負えない子は警察へ渡せばいいのに、事なかれ  
主義で、体面上事件を隠しているのでは？」と近くから非難したり、  
の両極に分かれがちです。でも目の前で自分や他人の心身を傷つけ  
ていく子どもたちにかかわっている私にとっては、それだけではす  
まないのです。

事実の一端を話してみます。

十月〇日 授業中抜け出した自称番長グループ（各クラスの寄り合  
い、以下BGと書きます）七人が、非常階段で喫煙、みつかるど、

教室のドアを蹴破る。

翌日 一・二校時の間の休みに玄関の傘立てにあった教師と生徒の  
傘十数本ずつをへし折って壊す（BG）。

同月〇日 一時限数学。水を飲むとか便所といって出歩く。新卒の  
男教師が声をはり上げて教えているが、教室の後では弱い子を誘  
って馬跳びが始まり、止めに行った教師に頭突き（BG）。

同月〇日 男便所のドアを壊し、便器の間の陶製の目隠しを四枚と  
も叩き落とす（BG）。

翌日 下駄箱で下級生の上履を燃やす、体育館の内錠を下ろし、マ  
ット上で喫煙（BG）。

同月〇日 授業を抜け出し、三階会議室の机・椅子を校庭へ投げ出  
す（BG）。

同月〇日 シチューの皿を中身ごと廊下へ放り出す。当番が片付け  
中、BG五人が大量の皿スプーンなど窓から投げ落とす。

十一月〇日 掃除用具箱に、ごく小さく、体力のない男子を押しこ  
み、外からまわしたり蹴とばしたり……。扉のすき間から放尿し  
てその子にかける（BG四人プラスアルファ三人）。

同月〇日 下級生に喫煙現場を見られ、因縁をつけて撲り蹴る。

同月〇日 音楽の時間、立ち歩きを注意した女教師の髪の毛を「カ  
ツラだろう」と言ってみる（BG一人）。他の子は配膳台の布



をかぶせる（アルファ一人）。

同月〇日 美術室から持ち出した小さな石膏をストーブで赤熱し、側にいた男子の頬に押しつける（アルファ一人）。

同月〇日 体育で留守の教室を荒らし、高価なベンやシャープを盗む（B G 一人）。

同月〇日 授業中いじめられっ子の女子にカバンを投げつけ、教師に言いつけたといって蹴る。女便所に押し入る（B G）。

いったい教師は何をしているんだとお思いでしょう。担任は自分の空きには騒がしい授業の教室や廊下で見張り、休み時間はバトル。放課後は本人の指導、保護者の呼び出し、家庭訪問、落書き消しに壊れたところを修理。学習の遅れた子にプリントを作っては、即座に紙ヒョーキに化け、居残り勉強がイタズラの元になったり――要するに教師の力量不足といえ、それまでなのですが――。

給食は配るときから不足する。他人の皿に何か入れたり頭からかけていないか。牛乳ビンを持ち出して道で叩き割っていないか、他の教室へ邪魔に行かないかと追い回す。

特別な子だけの戦力なら、これほど混乱しないでしょう。彼らが何度呼び出されても、次からはバれないようにするだけ――見張りを立て、一般の子を脅して口を封じ、「現行犯じゃない。証拠があるか」と聞き直る。外部での盗みや暴力で警察へ行ってくる度に悪智恵がつき、親や被害者の前で、シラを切り通せば、親も従ってしまふ――となれば、他の生徒たちが少しづつ収まらなくなります。去年まで桜の美しい、掃除の行きとどいた穏やかだった学校が、僅

かの間に、唾だらけ、落書きだらけの穴ボコ校舎になってしましました。近隣の大規模暴力校の生徒たちともB Gは横のつながりを持つていて、「うちはおクレてる。このくらいじゃ、まだつかまらない」と自分勝手に計算しているフシもありました。

あれに比べれば、自分たちも授業中にアメぐらい、ガムぐらいというプラスアルファ族が増えます。中には弱い子にセンペイを買いにやらせ、見つかつて没収されると、「おまえがドジなせいで損した。弁償しろ」といびる子も出てくるのです。男子も女子も立ち騒ぐ授業が増え、本やノートを出さない、持ってこない子が珍しくなると、少数のまじめ人間は、「ぶりっ子」扱いされるのがいやさに、低い方へそります。そして楽な方へ馴染んでいきます。

一人々々の本心をそつと聞くと、「勉強しなくちゃ」とか、「仕事をサボるのはよくない」というわりには、他人のせいにしたがり、全体の力学はマイナスに働きました。「いいこと言ってたって、オレの盗まれた金とり返してくれないじゃないか」「先生に従うより、彼らに当たらず障らずで多少ついていた方がトクかも……」という気持もあったのかもしれませんが。

以前には女子がしっかりして……ということもできたのですが、こんどはダメでした。日ごろ直接的な差別は受けていないせいか、悪い方で「男子並平等」を目指すようです。服装や下級生いじめで目立ちたがるけれど、意見や仕事は「みんなと同じ」でけっこうという無気力享楽派が多くて、なかなか育てられませんでした。「何でもすぐクビをつつこんで干渉する」と反発していた子たちも、万引きの詫びに一軒々々つき合ったりするうちに、少しづつ心は開いてはきたのですが――。そういうえば、B Gだって、とことんつき合

えば、ある種の親近感は生まれるのです。

B Gに話をもどすと、彼らは表立って外部とわたり合う力はないため、ボーイスカウトとか、ブラスバンド部とか近隣校のごく普通の生徒が小人数で歩いているところを襲ったり、幼稚で恥ずかしい暴力事件を起こして、その都度警察に行きました。中でも「生命知らずのバカ」と仲間うちでいわれているYは、縁日でテキ屋の手伝いをしたのが縁で、サラ金のとり立ての手先をさせられ、何か感覚が違ってきて、仲間うちからは「人間じゃねえよ」と尊敬され、一般生徒からは「なにすっかわかんねえ」と恐がられていました。

私の怪我は暮の期末テストでした。きちんと受けるよう、彼らを含めてクラスで十分約束したし、みんな一応守っていたのに、Y一人だけ席を替り、大声でわめいていました。側へ行って「別室で受けよう」と囁いたら、「なにに、てめえがいなきや静かにしてやらあ、あつちい行けよ」で始まって、椅子を振り下ろしたり、蹴ったり、何分かもみ合ったのです。生徒たちは、いつもの空騒ぎだと思っただけで、又テスト中なのでほとんど顔も上げない。B Gの他のメンバーでさえ、「まさかホントにやるとは思わなかった」と言い、本人も、後日「べつに恨みじゃなくて、引っこみつかなくなった」と言います。私のよみが甘かったとしか言いようがありません。でも、退きなくなかったのです。

身体の打撲は二、三日で治りましたが、親指関節は三ヶ月経った今も痛みます。一週間の謹慎、そのあと母親の勤める豆腐屋さんで四、五日働かせてもらいました。私は学習プリントを届けたり、し

やべつたりに通いましたが、人相が柔和になって「これからちゃんとやる」と言った瞬間は本気だったろうと思います。

でも、B G仲間の待つ学校へ来ると、元の雰囲気は二日くらいでもどってしまふのです。今度は下級生を「オレんちの弟の悪口言ったこと、三千円あげるから許してくれって言ったのに寄越さねえじゃねえか」と追い回し、迎えに来たその子の母親の目の前でナイフをチラつかせ暴力をふるったのです。その後Yの親の非常識な対応や、本人も他にいろいろあつて、少年院へ行く羽目になりました。かなり近づいているつもりでいて、結局通じることのできなかった自分に腹立たしくてやり切れない気持をわかつていただけるでしょうか。四月早々赤城まで面会に行きます。

B Gの他のメンバーも、家庭との連絡は担任を通して毎度しました。度重なると、「すみません。いつもいい聞かせてるんですけど……」「家ではいい子なんですが、学校へ行くと……。友達から離してもらえませんか」「うちの子はつき合いで何でもするだけなのに、身体が大きいから目立って、ボスだと思われてるんです」「『なんでもオレたちのせいにする』とある先生に不信感を持ってるようです」「外へは出さないようにしてます」「着る物も、いつも言ってるです」

実は夕食前は行先を知らない。夕食を家で食べない子もいる。夜はお風呂だとか、塾だ、友達から電話があつたという口実でねり歩く。親の知らないダボズボンやガクランを貸し借り、売買していらします。エナメル靴やヤクザズボン、ラジカセなど、買い与えない

物が次々あっても監督できないでいるのです。

臨時父母会を日曜日や夜開きました。全体の大騒ぎに驚き、BGに悪罵を浴びせられて、ただなす術もなく、義理で来ていた人も多かったようです。父親の参加がほとんどなかった——自営の人や、週休二日の人もいたけど、要請しても、なんか母親に任せておいた感じです。

教師に力量と熱意がなくてはこの波を乗り切れないことは確かです。でも、個人の技量のせいにはしたり、担任の非だけを他人事のようには批判している学校は立ち直っていないようです。管理者が、とり纏いを捨てて、全職員が子どもと真剣に向かい合わなければ。

ただ、それが一斉に管理強化、抑圧になる危険も多分にあります。生徒が暴力を起こさず、おとなしくなることですべて解決とはいかないでしょう。彼らは実利にさとく、力や権力の強制の前には大変弱いからです。BGの特徴は、増長の一語につきます。もし数をたのみ、力をたのんで横車を通るなら、だれでもその味は忘れられないのではないでしょう。政治をみればわかります。

BGは心の弱い子たちです。体制に刃向うなどと大それたことはできず、一緒に悪事の限りを尽くしながら、いつも不安で淋しくてたまらないのです。まるで麻薬みたいな、お互い一緒にいて、外界を拒否し、自分たちをそのまま受け入れる場所だけを求めていると思います。

一般の子も同じ傾向はもっています。自分の意見を説明、説得な

どは面倒がり、一緒にの行動も、共同というよりはたまたま一致したという感じがよくします。他人に無関心で、時に接触すれば、感覚的に敵か味方に分けてしまう。彼らの頭の中の世間は大変偏っている、テレビ番組、コマーシャル、マンガ、友達の情報だけで自足している。だから、ティーンさまさまの商業主義の前に、餌食としてハダカで放り出されているのと同じだと思うのです。

異なる世代、グループ間の交流が非常に難しくなってきましたね。利口な子はただ冷ややかに見、そうでない子はやたら逆らうことを目的とする。それに心情的共感をよせる場合もあります。

大きくいえば、私たちの社会全体の最小限の共通項として、「生命と労働を愛する」ことを実現するために、子どもたち、父母たちと同じ土俵で徹底的に話さなければならぬでしょう。

恥をしのんでわが子の万引きを知らせ、他の多勢の仲間と一緒に目を覚まさそうと提案してくれた父親がいました。BGによる連続リンチを隠していなかった息子にショックを受け、被害者の両親たちが子どもと何度も会合をもったのも一年間の最後になってからでした。「学校に協力」ではなくて、お互いに子どもを「どう育てるか」で一致点を見出す努力は、厳しいけど絶対必要だと思っています。母親に下請けに出すことなく、父親も家庭生活、子育ての主体にならなければならないことを強く主張したいと思います。

主人公たる子どもの主体性を育てるために、残された一年間を使ってみましょう。またご報告しますね。

さようなら。

## 子供とオトナ

共に生きる

右田 久仁

### ▽共稼ぎ・共働き

都営アパートと公営団地ばかりのわが街にも春は必ず来てくれる。土いじりの好きな住人の丹精でわずかな地面に種々様々の草木が花をつけるころになると、町会も団地自治会も役員の改選でひと揺れをする。他人のためになど舌を出すのもイヤという人種が増えて、当番制の役員はおろか、掃除・消毒薬散布などの順番も、気持よくは回らない。こうした雑用を、管理費で一切他人まかせに出来る

マンションや〇〇コープを買って移り棲む若夫婦が最近、続々と現れた。かつて、テレビ、冷蔵庫、ステレオ、クーラーと買わんかなの風潮に煽られ、我も我もという時代があったが、ひと通り流行の器具がそろった昨今は、それらを収納する住宅を買うのが最大の関心事であるらしい。PTAなどで久しぶりに顔を合わせると「おかわらない?」、に対して「まだここ(都営アパート)にいるのよ」と、まるで卑下しているかのように応じるのだという。

先日地域の幼年教育研究会に出て、講師から面白いことを聞いた。共稼ぎと共働きは違うのだと。「経済的な理由だけで妻もゼニを稼ぐのが共稼ぎ、夫婦それぞれが自分の望む仕事をやり通したいと願い、多少の困難を覚悟で働くのは共働きというのだ」と。

### ▽子供を預ける

その集会で「産休明け保育」の分科会は超満員、若い母親と保育

者の熱気で、抱かれている赤ん坊はまっかな頬をしていた。途中で部屋に入った折も折、「保育ママさんにも当たり外れがあつて……」と発言者の言葉が耳に入り、思わず身を縮めた。家庭福祉員制度も、発足以来既に二三年、高度成長で各区に共同保育施設が整ったところには、都の方針として先細りにするらしいと聞いたが、子供の数が減少する一方の現在、0歳保育に限っては、建物を作るより数倍も安上がりなこの制度を見直そうという動きがある。

しかし各区に委管されてから雲泥の差がついた制度そのものを洗い直さない限り、身分保証もなく、個人の責任ばかり重いこの仕事は、到底ひとには勤められない。このところ、公の息のかかった0歳保育所は定員割れが甚しく、存続が危ぶまれる施設さえあるのに、すぐ近くの民間ベビーホテルは満員だという。ご多分に洩れず、私も年度がわりの見通しが難しい。

最大の原因は受託時間にある。国会でベビーホテル対策として時間延長の予算はとつても、現場の動きは頑として進まない。授乳(保育)時間の認められている職場など、公務員を除けばひと握りにすぎないから、妊娠するのが気がねで、第二子を持つのをためらっている母親を、私は何人も知っている。子供が病気の時、休みにくいのは想像以上で、看護婦を配置していることを謳ったベビーホテルでは、少々のカゼや熱、下痢位なら預かってくれるから、これ

が保育時間に次いで親の望むところとなる。

個人の家で、個人の保育理念で行う家庭的保育と、複数で知恵を出し合って行く共同保育と、どちらを選ぶかは親の考えだ。「当たり外れ」などと言われても、身を縮めるより他ない。おこがましいが、こちらも親を選ばせてもらわなければわが身の安全が保てないのだから――。

Weの創刊号で、日本では女性の職場進出率が思ったほど伸びていないのを知って、意外だった。この地域の場合から察するところ、パートや臨時は数に入らないのだろう。子供を保育園へ入れるには、母親も正規に働いていないと不利なので、入園前に無理をして一時就職する。さて入園すると、保育時間延長はなかなか認めてもらえないから、又パートの仕事をつけるのだと聞いた。公と名のつく保育施設の現実離れた規則の数々は、女性の職場進出を阻み、企業側にとっては正規の職員よりパート要員として安上がりの雇用を増やす格好の言いわけになる。キャリアウーマンとか女性の自立とか、活字として目に入る割には、男は仕事、女は家事育児という安心コースを望む男女は、まだまだ多いのだろう。

それにしてはお粗末な子育てが多すぎはしないだろうか。専業主婦であっても、夫や子供の朝食も作らない母親が意外に多いと聞く。人生設計の大きな関所として、子供を持つこと、仕事を続けて社会とかかわること、他人に子育てを託すことに、男も女ももっと真剣な選択をしてほしい。

#### ▽地域の子育て令音

つい先ごろ、近所のキリッとした若い母親とバス停で会った。看護婦さんを教える立場にある人で、利滂そうな彼女の二人のムスコ

は、最近驚くほど背がのび、いつも遊び仲間をリードして身軽に走り回っている。バスに乗り込むとどちらからともなく最近表沙汰になった地元中学の非行問題が話題になり、気にかかっていた、親子の近所づきあいの実状を聞いて愕然とした。

いわゆる「下町の人情」を子育てには何よりのものと、憧れさえ持ってここへ移り住んだのに、この八年間というものの失望の連続だったと彼女は言う。幼い兄弟を置いて共働きをしていれば、予定外の出来ごとで帰りがおくれることもある。保育園へのお迎えなどは論外で、うす暗くなった戸外にいるはずの子供に伝言を頼もうにも、頼めるような間柄になるのに三年もかかったのだと言う。

「うちに上がって待ってれば」と声をかけてくれる人はおろか「家が汚れるから上がらないで」と追い返すと聞いて私は耳を疑った。子供会でハイキングをしようかと提案すれば、「もしケガでもしたら責任とってくれますか」と、すぐ誰かが言い出すし、気の合う同志で集まれば、徐け者にしたとひがむという。地域ぐるみの子育てなんて所詮夢なのかとあきらめきれない彼女の一家は、近くおつれあいの田舎へ引越すときいて私は彼女に詫びたいような気がした。中学で問題を起こした少年が同じ屋根の下に居ようと、その子が日ごろどんなに淋しかろうと自分たちとは関係ない話なのであり、隣が買えばわが家もマンション――の親たちにとっては、他人の子が起こした騒動で学校へ臨時、召集されるなどまっぴらなのだろう。片や教育ママにとっては、まさに迷惑千万、高校入試に不利になると気をもみ、次の子を地域外の中学にやるために奔走する。「問題のない」地域に住む友人のところには、五人も寄留を頼みに来たという。

人間関係が年々稀薄になるらしいのは、何も子育てに限ったことではないが、このコンクリートの積み重ね住宅へ移って、互いの音や匂いが遮られるまでは、お互いに手応えをたしかめ合って生きていた気がする。くしゃみや咳ばらままで筒ぬけの長屋で、どん底の食糧難の中で、三人も五人もの子育てをするには、「ひとさまに迷惑をかけないような人間にしたい」などときれいごとを言う親はいなかった。良くも悪くも、援けあい、かばい合い、絡み合ってしか生きられなかった。お互いの子に手をかけ言葉もかけて、街中知らない子供はいない位四季折々に交流があった。

近隣に十年おくれて、私は父のいない子を持った。当時のこととて未婚の母は罪悪視された。しかし下町独特の判官びいきとでもいうのか、倅は近所の子供たちのペットになり、どこの子かわからないようにして育った。泣けば誰かに背負われ、銭湯が開けば連れて行かれ、どこかで食事をする。夕方は縁台で近所総出の夕涼み、どこかのおじさんと、自転車で花火を買いに行く、学校のない日にはお姉ちゃんたちが女の子の服を着せて連れ出す、お兄ちゃんの肩車で草野球の応援に行く。

それでも「転んだ時は手を貸さないでほしい」「人にツバをかけたり、体の悪い人をからかったりした時だけは、すかさず往復ビンタをやってほしい」という私の願ひだけは、皆守ってくれて、子育ての不安はなかった。近所に非行など起こり得なかった。貸本屋をしていたわが家にはいつも子供が溢れ、倅はガキ大将として近所の鼻つまみになる程いたずらをして回り、隣のおじさんの言い方を借りれば、「金魚の糞みてえにぶるさがつて（多勢連れ立って）」銭湯へ行っては「しもをよく洗ってから入るんだぞ」と教えられた。

その金魚のふんは、いまだに仲よく夏祭りの御輿をかつぎ、祝酒で破目を外している。

昨年十二月半ばまで名人級の畳を作っていた隣のおじさんは、悪性のすい臓ガンで半月もたたず不帰の人となった。せめて輸血でもと病院に詰めていた倅は、「嫁サン」を一番先に見せたかった人を失い、通夜・葬儀とおじさんに寄り添い、喪中のように年を越した。「ボクねエ大きくなったら発明するヒトになるヨ。隣のおじちゃんが年とらない発明する」は、おじさんの仕事場に入り浸って育った倅の五歳語録である。おじさんに愛された子供たちは今働き盛りとなり、子連れで葬儀に参列した。おじさんの仕事場には三十数年子供の訪問客が絶えず、このごろのドライでうるさい子供たちの質問にも、江戸っ子の職人ことばで面倒がらずに答えていた。

子育てには今も昔もないような気がする。過ぎ去ったから「いい時代」だったのでなく、本気で子供とつき合うオトナの肚が子供には読めるのだと思う。

#### ▽受託児の親たち

子供を預けたいという電話をもらうと、私は御夫婦でお出で下さい、と答える。夫の協力がいいかげんだとうまういかないのを何度も経験したからだ。「預かってくれれば仕事さがそうかなー」と思っ

て——」という方は固く辞退申しあげる。議員や町会の役員にムリヤリねじこまれた話には、何度か泣かされた。死にたいほど辛い思いもした。

幼稚園のセンセイがいた。私のブライバシーなど念頭になく、家中を見て回った。当時流行の哺乳瓶消毒液と器具を持ち込み、煮沸消毒を最良とする私がそれを拒むと、こと毎に消毒々と宣うた。

汗かきだからと沐浴を要求する。たまりかねて私は言った。

「あなた幼稚園でいろんな子供と体をくっつけるでしょ。私の数十倍もバイ菌がつくことになりませんか。ご自分を消毒して、消毒した都バスでお迎えに来るわけじゃなし。それに、あなたの子供だけ沐浴させて両手がふさがっている時、他の子がお乳吐いたら、どうしましょう。私なりに汗の処置はしてますよ」。

彼女は預ける先を二度変えた。どこも気に入らず、勤めをやめてしまった。病院の無菌室に入れて専属の看護人をつけない限り、彼女の不安は解消されない。

自分の雇った子守りバアさんのように思い違いをする母親が時々ある。他の子の親に会っても挨拶出来ない人がある。土曜日の午後迎えに来ると、二日間を赤ん坊と過ごすことを考えただけでうんざりし、月曜日の朝は、私に子供を託したあとの解放感を予想するだけで晴々するという親もいた。台風が来ようと、熱が出ようと、家へ連れて帰って気をもむより安心だからと迎えに来ない母親もいた。数え切れないほど腹を立てた。赤ん坊がふびんで泣けてくることもあった。しかし子供の成長は日々、目に見える。巣立った子供たちの来訪が、今の私の生き甲斐かもしれないと思うことがある。

すばらしい母親とも出逢った。今、第三子を預かっている小学校教師は、家にテレビを置かず、夫共々毎晩本を読んでやり、散歩に連れ出し、子供との約束を守り、子供の話をよく聞いている。いつも身ぎれいで、忘れ物をしたことがない。心打たれるのは連絡帳の記載で、家庭での子供と家族のかかわりが手にとるようにわかり、成長記録としてもすばらしい。更に食卓の豊かなこと。家庭菜園の収穫も含めて実に数多くの材料を小まめに使っている。パンや菓子作

り子供と楽しみ、ちつともおっくうでないというからうれしい。

男ばかり三人目の子供を四十歳で出産し、毎年仕事もふやしながら元氣になった母親（元教師）。フタゴを預かって、私と親子のように氣の合う小学校教師。心やさしく芯の強い未婚の母、地域の保育問題に本氣で取り組んでいる夫婦、他人のことを本氣で考えられる得難い人々である。その上、ひとり暮らしの私をいつも氣遣ってくれてありがたい。

共働き大いに結構、ある家族にとっては共稼ぎもいい。しかし、他人に子供を託して妻が働くには、夫も家事を分担し、保育の労力を半分引き受けるのが当然と思うが、実状はそんなものではない。働く親の子供は当然預かるべき、子供はいい環境で保育されるべき、保育者は親の立場も察するべき、と権利を主張する前に、自分たちは子供とどうかかわって行くのか、覚悟をきめてから子供を生んでほしい。

0歳の子供とばかりつき合っていると、七、八ヶ月ごろには、親と私を区別して対応するから面白い。おしめの交換や着替えのとき、親だと面白がつて逃げるが、私の時はじつとしてている。一歳ごろになると、ハナを拭くなど氣に入らないことをされると、平氣で親の顔や頭を叩いて泣きわめく子がいるが私にはだまって拭かせる。オトナが本氣かふざけているかは、0歳児でさえ見ぬいていると思う。

#### ▽結び

他人の子供を預かるようになってから、初めて気付いたことがたくさんある。教えられたことが山ほどある。預かるのは赤ん坊ではなく親ぐるみなのだと、娘のように愛している教師に、きのう言われた。

（家庭福祉員）

— 小学校では — 名取 弘文 —

「風のように」を中心に

生活時間調べ

これは教科書にも出ているし、家族の関係を考えるためにも面白い教材である。そこで、家族全員の時間調べを一日、自分の生活時間は一週間調べることにした。「ウッヘー、そんなにやるのかア」とブツブツの声が出る。

それでも、次週にノートを見ると、カラフルにカラーマーカーや蛍光ペンを使って表を描いてきている。ノートをもとに、次のような問題を出す。

- 一、自分の生活時間はだいたい同じだろうか。
  - 二、家族の時間帯は合っているだろうか。
  - 三、生活時間を正しくするにはどうしたらよいだろうか。
- 子どもの自己分析をノートに書かせると、次のようなものが出て来た。

一、え、うそ、そんな問題ひどい。まあ……だいたいあつて（んじやないかなあ）「帰ってからすぐピアノの練習と勉強は少しき

つい。つい遊んでしまう」

二、「あつてる」と思う

三、すいみんの時間を計算してみたら、八時間と三〇分ねている。このくらいねていれればいいと思うけど、ときどき、学校で勉強しているときねむくなるから、ねる前の一時間「ねる用意」のところをなるべく早くすればいいと思った。

こんな意見をもとに話をしてみたのだけれども、どうしてもぼくの方の「こうあるべき」と、子どもたちの現実はいく違っているように、うまく行かない。「なるべく団らんを」と言うのと「せんせーのうちはどう」と子どもは切り返してくるのである。時間帯を調べてみるという自己確認だけで十分なのかもしれない、腰くだけで終わってしまった。

「風のように」を出そう

学級通信という表現の方法があるなら、家庭科通信があつてもいいのではないか。こう考えて、ぼくは家庭科通信「風のように」を出すことにした。春風に吹かれるのもいい気持ちだし、潮風も恋風もいい。いつも風のように自由にいたいという訳である。一応、週刊の予定。出したかったら毎日でもいいし、飽きたら二週に一度でもいい。なにしろ、「風」なのだから気ままにやろう。内容も、授業のお知らせ、子どもたちの反応、感想、ぼくの考え、時事問題、演劇教室のお誘い、集会のお知らせなどいろいろである。知人の塚越敏雄さんは、学級通信に「アトム」「わんぱく学級」「海のように」



と名付けて、毎号『エミール』の引用文を載せ、映画「泥の河」の批評を書いたり、民芸について書いたりしている。彼の学級通信のいいところを吸収してしまおうと考えたのである（塚越さんの学級通信は、申し込めば送ってくれます。自宅鎌倉市腰越四の二の十一）。

#### 風のように 六月三日

五年生は、袋をつくっています。米ぬか袋を四枚。つづけて、手さげ袋を作っています。米ぬか袋は、中に米ぬかを入れて、水にしたして、食品を洗うのに使います。

油污れがよく落ちますよ。合成洗剤を平気で使っているおかあさん。米ぬか袋で食器を洗います。せんたくは、せつけてやりましょう。

六年生は、エプロンの次に「生活時間」をやっています。規律ある生活をすごそうということなのですが、子どもたちの生活の時間を大きく乱しているのは、テレビが一番です。そうだろうと思うのですが、調べてみて驚いたのは、テレビを二台三台と持っている家が多いことです。子どもに「どうして二台もあるの」と聞くと「子ども用と大人用」、「二階と一階」、「お兄ちゃんと僕」とすまして答えてきます。テレビを二台も三台も買っておいて、「ウチの子はテレビばかり見ている」とか、「親子の断絶が」などとシタリ顔で大人が言うのはどういうことだろうと思いました。

子どもの生活を乱しているのは、第二には、塾です。「進学教室で夜まで」という子どもがいます。へえええと思いま

した。これも子どもが望んでいるからか、大人の勝手なのか。どうなっているのかなあ。

ついでに調べたら、父親というのは、子どもと一緒に飯をくったりしないのですね。朝早く出かけて、夜おそく帰って来て、日曜日はゴロネ。これも大変ですね。

しかし、こういう時代にあつて、「家」とは何でしょうね。恐れずに書いてしまうと、「家」としての態を成していない家かなりあるんでしょね。それなのに相変わらず教科書は、「家族」「父母十子」が普通の家族となっていて、「食事やだんらんを、家族みんなでできるようにするためには、どんなことに気をつけたらよいだろう」となっているのです。それにノックつて、ばくも「規則正しい生活をするにはどうしたら良いか」と子どもに問うのであります。すると、子どもも、「一人一人が気をつける」「自分の仕事を早くすませよう」「家族で協力して家事をする」と答えてきます。ホントかいな。個人的に解決しようと思つても片付かない問題になっているのではないかと思うのです。あるクラスでは二人の女の子が「ムリ」と言つて頑張っていました。ムリの根拠を聞いてみると、「お父さんとかが遅くなる」「お兄ちゃんとか姉がジュクとかでどうしてもだめ」「私はバレーで」「生活を合わせるとしたら、お父さんが会社の用を早く切りあげなきゃいけないし、私たち三人がおそくまで待つてなければいけないからムリ」「人間だから、そんなに規則正しくはできない」などと言っていました。

何人かのノートを見ていたら、「おとうさんが早く帰つてきて、学校が早く終わればいい」「お父さんが酒を飲まなければ

いい」などというのもありましたよ。

一二日に竹田人形座が村岡小学校で公演します。校内にはり出されていたポスターには「日本一の人形劇」とありました。これホントですよ。係りの神田さんにきいたら、「父母が来て見てもいいよ」と言っていました。見た方がいいですよ。

#### 風のように 六月十二日

六月四日が虫歯予防の日ということで、新聞などにも歯みがきの話が出ています。その中に、歯みがき剤を使わない歯みがきの利点として、

①食事のあと居間のソファで新聞やテレビを見ながらでも出来る。

②口の中の感覚をマヒさせるハッカの味がないから、歯のすき間や歯並びの悪い所に、ブラシの毛先が十分当たっているかどうかを確かめながらみがける。

③歯みがき剤を使うと、スツとする感覚にだまされ、十分きれいになつていないのにすすいでしまいがち。

というようなことがあげられていました。

机の中に一本歯ブラシを入れておけばいいってわけです。まだ、持って来っていない人は学校に一本持って来ておきましょう。

。五〇〇番粉石けん 三キロ入り 七六〇円

。二〇〇番食器洗液 二九〇円

。石けん歯みがき 二四〇円

家庭科室でまとめて買いました。欲しい方は代金をそえて申し込んで下さい。

映画へよみがえれ びわ湖

父母向け上映会 入場無料

七月七日 二時三〇分——三時

家庭科室 おさそいあわせの上 お越し下さい。

この「風のように」のいいところは、その日の様子によって「花のように」にしても「雨のように」にしても平気なところである。PTAの役員とトラブルを起こした時は「嵐のように」になったりするのである。

文章の方は飾ることなく話しかけるように書くので、昼休みや放課後、夜自宅でもいつでもガリ切りをすることが出来る。ところが印刷の方は、配る数が多いので大変である。一番多い時は十三クラス、それに職員室の分、知人に手渡す分を入れると、一度に七五〇枚も刷ることになる。手間も大変だけれども、印刷紙も大変である。そこで、印刷室に置き放しになっている余り紙、印刷ミスで捨ててある紙を集めたり、学期始めに集まるダンボール紙を業者に売ったり、宴会のビールの空きビンを酒屋に持って行って代金を受け取ったりして紙を買ったりすることにした。

そんな風にして出した家庭科通信のウケは意外とよく、子どもも喜んで読んでいるし、父母も読んでいるようである。ある母親からは「家庭科の授業、子どもも楽しみにしているようです。私も『風のように』を読ませていただき、いろいろ勉強になります。この前

講習会で刺子の花ぶぎんを習ってきました。先生の台ぶぎにしても、教材にしてもと思って、子どもに持たせました」と手紙をくれた。

刺子の花ぶぎんを見ると、幾何学模様がとても美しい。そして、やさしさにあふれている。うれしくなって、子どもに見せると、「やろうよ、それ」と言う。「それじゃ、やろう」ということになって、予定を変更して「刺子の花ぶぎん」を作る。

### 刺子の花ぶぎん

一、持ってくる物

① さいほう道具

② 赤・緑・黒のもめん糸

二、作り方

① デザインをする

② さらしを切り、布を二重にし、まわりを二重にする

③ しつけをする（一本どり）

④ チャコで線を引く

⑤ 糸は二本どり、玉結び。ぬい初めは布と布の間から

ノートにデザインをさせる。基本形は、布のタテとヨコに四等分で線を引き、斜線を引くやり方である。それを元にして幾つかの形を書くことができる。小さなものを二つ三つ書いて、気に入った形を、次にはノートいっぱい書く。これも考えてみると当然のことながら、線がまっすぐに引けない子や、四等分に出来ない子どももいた。算数の図形の勉強をしてもなかなか身には付かないのである。その子どもたちには、翌日の昼休みに家庭科室にコンパスを

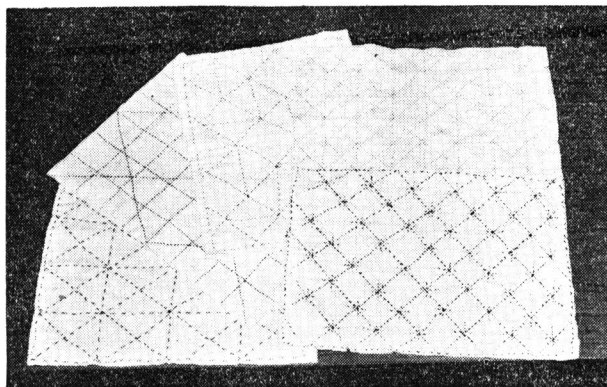
持ってきて四等分の仕方を教える。

さらしの布は、ぼくが買いに行くことになった。職員室で赤ちゃんを産んだばかりの先生に刺子をするよと話すと、おしめ用に買ったさらしが余っているという。シメシメとそれをもらい受けることにする。ついでに、その先生に足りない分も買ってきて来てくれなにかと頼むと、さすがは母親、特売の店を知っていて安く手に入れてくれた。

さらしを五〇センチに切って一人一人に渡す。裁縫道具は学校のものを使う。（菓子の空箱に針やにぎり鉋みが入っている）。布のまわりを中に折りこむのにアイロンを使う子どももいる。マチ針を打っている子どももいる。設計図を見て、チャコで線を引くのだけだ、線が曲がったり、対角線がズレてしまったり、やり直し、またやり直しという子どももいる。手ぬいは久しぶりだけれども、五年生の最初の米ぬか袋とチマキの袋を縫った時に比べると、格段の進歩である。針に糸が通らないとペソをかく子どももない。でも、布を両手で持ってスイスイと針を運ぶほどうまくはなく、本当にさしこという感じである。そうして、四時間、出来上がったのが、次頁写真の作品である。

もちろん、これは良く出来た作品の方に入りますが、そんなに下手なのはありませんでした。男の子の中には、魚が好きだからと魚のデザインをしたり、気球のデザインをした者もいました。

作品を見ながら、縫っていた時の子どもの様子を思い浮かべて、ぼくはまたうれしくなりました。完成させる物がはつきりわかっていること、自分が作りたいということ、それが子どもを夢中にするのである。米ぬか袋を作っている時には、中に米ぬかを入れる



使った糸 左から赤、黒、赤、水色、緑

のだから縫い目が細かくなくてはいけないことが当然理解できる。花ぶぎんの時には、自分のデザインどおりに見事に完成させたいから上手にまっすぐ、細かく縫いたい。そう思うから熱心にやるのだ。裁縫の導入に、木綿布に縫い目の印刷されたもので、なみ縫い、半返し縫いなどの運針の練習をすることがある。あれは、練習だけで終わってしまうものであって、その作業がどこに行くためのものであるかはっきりしない。それでは子どもは喜ばない。このことは家庭科の授業ではいつも見えることである。

それは、今日の学校教育全体がつまらないものになってしまっている原因の一つでもある。分数×分数の計算をしても、それを習うことの意義はわからない。社会科で歴史を習い、昔の人はどんな生活をしていたかを聞いても、それが今生きている自分にとってどういう意味があるのかは、わからない。意義のわからないこ

とを延々と学ばなくてはならないのは苦痛である。

それが家庭科にはない。やっていることの意味がはっきり見えているのである。しかも、頭の中にある完成品（自分で想像した）に一つ一つの縫い目は添っているのである。自分が手を抜けばいい加減なものになってしまいうし、自分がていねいにやればていねいに出来上がる。しかも、ここには、大げさに言えば、人類の歴史がある。植物から繊維を取ること、植物を育てること、綿が入って来たこと、布を織ること、縫い合わせることを、針を発明したこと、……何千年の歴史があるのだし、それを子どもは生まれてから十年余りで駆け足で学び取って来たのである。モノとの出会い、そしてモノを使いこなせるまでに育って来たこと。これは感動的である。こういう感動をいつも共有したいものである。

#### 「せんとく」——合成洗剤問題に置き換える

五年生の教科書には、「衣類の清潔」で、下着の着方、せんとくが出てくる。この単元は中身を入れ換えて「石けんと合成洗剤」とした。横浜の米屋さんから『よみがえれ琵琶湖』のフィルムを借りて、映写する。琵琶湖のある所を地図帳で確かめ、琵琶湖の水がどこを流れて大阪湾に注ぐかを調べる。琵琶湖の水がどうして汚れたのか。汚れた結果、どんな生物が増えたのか。琵琶湖の水をきれいにするために滋賀県の人たちはどうしているかを映画を見たあとでノートに書き、話し合う。琵琶湖だけでなく、東京の水道水になる多摩川、神奈川の自分たちの水道水になる相模川、相模湖の水も汚れていることを説明する。そして、合成洗剤が水を汚すだけでなく、魚や貝にも害を与え、それが人間にもどってくることを、土にも悪く、

植物を通して人体に入ってくることを、動物の体に入り、サルにも奇型が増えていることなどを説明する。

授業の終わりに、教室の水槽で飼っているメダカがどうなるか、合成洗剤を入れてみようと言うと、子どもは真顔で反対する。実験でメダカを殺すなという声が出たので、これは止めた。次時までに、自分の家では、洗濯や食器洗いに何を使っているかを調べることにし、合成洗剤と石けんの値段調べをしていくことにする。

第二次。合成洗剤と石けんの比較をする。表示を調べてから、見てどうか、触ってどうか、水道水での溶け方、温水での溶け方、リトマス紙でアルカリ性か中性かを調べる。そして、一回当たりの使用料を計算する。この中で、合成洗剤には洗剤の他に香料やら螢光剤が入っていること、中性洗剤というけれど実際は弱アルカリ性であること、一回当たりの値段は石けんの方が安いことがわかって来る。

第三次は、木綿の布にティッシュ・ペーパーで口紅を塗り、その布を四つに切り、一枚は水洗いだけ、一枚は石けん水で、もう一枚は合成洗剤溶液で洗ってみた（五分間もみ洗い、すすぎは三分間）。布を乾かしてから、四枚を合わせて、どれがよく落ちているかを比べる。これは、子どももびっくりしていたが、石けんが一番であった。

ところが教科書には、合成洗剤の方が汚れを落とす、値段も安いとなっている。子どもには納得できないことである。教科書会社にお問い合わせようと、手紙を書き出す子どももいる。

ここまで学習で理解できたのに、相変わらず自分の家では合成洗剤を使っていると子どもは言う。親に言ってもわかってもらえない

と言うのである。そこで、「風のように」に書いたように家庭科室で洗濯用粉石けん、台所用の石けん液、歯みがきを売ることにした。それと、「実際にせんたくをしよう！分けるところから、畳むところまで」という宿題を出すことにした。その時に、石けんを使わせようと考えたのである。

この両面作戦はうまく行ったようで、地域の雑貨屋さんと栗屋さんから、「石けんと言って買ってくる母親が増えた」「母親に付いて来て、合成洗剤を買おうとする」と注意する子どもが多い」と話が伝わって来た。子どもの方は、洗濯の宿題をやって、意外と大変だということがわかったようだし、授業としては成功した方かなと、少し満足である。

六年生の方では、「日常着の手入れ」が教科書に出てくる。内容を少し換えて「衣類の品質表示」と繊維について調べることにする。教室の一番前にいた子どもの服についていた「表示」を黒板に書いて、どんなことが示されているかをノートに書かせる。一つも読み取れない子どももいれば、全部知っている子どももいる。一通り、答えが出たところで、スーパードからもらって来た品質表示のパンプレットを配る。「なるほど、そうなのか」と感心した声があがる。

その次に、繊維について調べた。品質表示調べに出ていた木綿、毛、ポリエステルについては皆が知っているが、絹やナイロンについては知らない子どもの方が多いようだ。四年の理科で飼育した蚕のことが絹糸に結びつかないようだ。近代日本の富国強兵策、資本主義体制を支えて来たのが養蚕であり、貿易の中心が絹であったこと、製糸工場で女の人はきつい仕事をさせられていたことを話し、

戦争中に代用品としてナイロンが作られたことなどを話すと、子どもは「野むぎ峠を見た」「おじいちゃんに聞いた」などとしやべり出す。布見本を回して触わらせて、各々の繊維の特色と、どんな衣類に適しているかをノートにまとめさせる。

続けて、「アイロンのかけ方」に入る。教科書の説明に「アイロンをかけている最中に電話が鳴ったり、人が来た時は必ずプラグを抜くこと」「朝とか出かける前にはアイロンかけはしない」の二項目を付け加える。ちょっと立話のつもりが長くなって衣類を焦がしたり、出かけてからアイロンのことが気になって困ったことがよくあるからである。

アイロンに続けて、洗濯機の扱い方、冷蔵庫の扱い方にもふれる。この辺は雑誌『暮しの手帳』と自分の失敗が下敷きになる。「冷蔵庫信仰」とぼくは名付けているのだけれど、冷蔵庫の中に入れておけば食べ物永久に腐らないと思っている人が時々いるものである。これは電気冷蔵庫が始めた時に少年期を過ごしたぼくたちの世代に多いらしい。それと冷蔵庫に入れておけばいいやと思うので、ついつい余分に買い物をしてしまう。特に野菜とビールが多い。野菜は下の方のプラスチックのボックスに入っていて、ドアを開けた時にじかに見えないからで、ビールは沢山並んでいる方がリッチな気分になるからであろうか。そして、結局は腐らせてしまったり、飲みすぎてしまったりする。こういう失敗話を子どもは喜ぶ。が、それだけでは教師としてカッコがつかないので、「そうそう、これはこのクラスにだけ教えてあげるけど、大事な書類やハンコを入れておくといいよ。火事の時に冷蔵庫は燃えないから」と結ぶ。もちろん、全部のクラスに話しているのだけだ。

教科書にはないけれども、電気器具で故障が一番多いと聞いているので、ついでだからと、プラグの修理もすることにした。プラグ一組、コード二メートル、ドライバー、ニッパーを持って来るように言うと、プラグはどこで売っているのかと聞く子どもが多い。特に女の子は知らないようである。電気器具は中学で技術科で教えていること、家庭の中でも父親まかせであるからだろうか。

プラグの結線の仕方を黒板に書いて説明し、作業を始めるが、電線のビニールをむくの芯も切り落としてしまったり、左右の長さが合わなかったり、芯が長くなりすぎたり短かったりと大騒ぎである。ようやく、揃えて中のネジを締めて、フタを締めて、ちゃんと付いたかどうかと、カセットレコーダーのコードに片方を絡ぎ、片方をコンセントに差し込むと、バシユ！とショートしてしまふ。カミナリに会ったような顔を子どもはしている。フタをあけてみると、左右の芯が接触していたり、一緒に束ねてあったりする。やり直しをさせて、うまく行った子どもは大喜びであるが、ブレーカーが下りること数回である。それでも、出来上がった補助コード得意気を持って、「先生、自分で作った方が安上がりだね」と言っている。ゲンキンなものである。

(藤沢市立村岡小学校)

☆☆☆☆☆ 新しい家庭科を創るために ☆☆☆☆☆

中学校では 熊本県家庭科サークル

# 共学の食物学習Ⅱ

(米・小麦を使つて)

吉田 泰江

## 三、学習展開(続)

### (三)米の学習

これまでに、(一)食物の役割 (二)食事と栄養素について学んできた。前時に、「米について」の学習をさせておいたので、子どもたちに発表させる。百科辞典、科学辞典、植物辞典、国語辞典と……、その内容は米の種類、伝来、食べ方、収量、輸出入など、さまざまであった。

#### 。米づくりと食生活

「なぜ、日本人は米を主食とすようになったのだろうか」について班討議をさせてその内容を板書させる。子どもたちに討議資料として、10アール当たり収量表をみせる(表1)。

子どもたちの発表から……

。氣候があうから。おいしいから。米糞が高いから。保存がきくから。アール当たりのとれ方が多いから。一番早く栽培された植物だから……

表1 10アール当たり収量表

作物	稲	大麦	小麦	大豆	じゃがいも	さつまいも	ピーナッツ
収量	1059	589	627	457	803	1460	710

収量表では、さつまいもが一番多いね。それなのに、稲が主食となつたのは、どうしてだろうね。と問うと、「いもは、すぐくさる」「米も虫がつくぞ」「米はもみにしておく、虫はつかん」「昔の米が、今でも見つかることがある」など、もみで保存すれば数年保存できることに気づく。日本にとっては、収量大なことが、特に重要だったことにはなかなか気づかない。また、人口密度の高い日本では、反当たり労働力を多く必要とする稲作には好都合であつたことに気づかせる。

私たちが毎日食べている白米を、昔の人も食べていたのだろうか。「米の食べ方」を歴史的に調べてみよう(生徒の学習したものにも、米の調理の歴史が含まれていた)。

#### 〈資料〉自主テキストNo.1

##### 〈米を使つて〉

日本人は、米を食べる国民だといわれています。しかし、ずっと歴史をさかのぼってみますと、米を主食としていたのは、身分の高い貴族だけでした。実際に、米を作つた農民は、アワやヒエを主な食べ物にしており、米を食べるにしても、玄米のまま、アワ、ヒエ、ムギなどに混ぜて食べていました。鎌倉時代

の本に、農民は雑穀四合に米三合混ぜて一日の主食として  
と記されています。奈良時代から明治維新まで、領主や政府に  
おさめる税金は米でした。作った米の半分以上は年貢米として  
とりあげられなければなりません。今でこそ、米は毎年  
豊作につぐ豊作で減反さわぎまででていますが、中世では、次  
から次、ききんがおそってきて、人々は食べ物に不自由をして  
いたのです。では、昔の人は米をどんな方法で食べていたの  
しょうか。その例をあげてみましょう。

焼き米……もみを取る技術を知らなかった時代に、東ねたま  
まの稲に火をつけ、こげた穂をもんで、もみを落として食べ  
た。東北地方には現在でも「しらこめ」といって米をいり、粉  
にひいて食べる所がある。

強飯（こわいい）……玄米をこしきで蒸したもの、奈良時代  
では、米を蒸して食べるのが普通であった。当時、稲はつみ取  
った穂のまま倉に貯蔵し、必要なだけ取り出して臼で脱穀した。  
脱穀後、精白することは少なく玄米のまま食べていた。

姫飯（ひめいい）……精白した米を蒸したもの。特に貴族の  
間で用いられた。

雑炊（ぞうすい）……米に雑穀や野草をたき込んだもので、  
庶民の常食にされていた。

粥（かゆ）……今まで煮たもので、柔らかいものと、固いもの  
とがあり、だんだん固粥と呼ばれる固いものが好まれるよう  
になり、今日のご飯に発展してきた。なべ、かまどで米を炊くよ  
うになったのは平安時代の終わりがらです。  
ほしいい……飯を乾燥させたもので、貯蔵用携帯用に用いら

れた。これに湯をかけて湯飯、水をかけて水飯として食用され  
た。

餅……穀物を蒸して、ついて作ったもの。奈良時代には、大  
豆もち、小豆もちなど、いろいろあり、一見おこしのようなも  
ので、菓子として食べた。

（産業教育研究連盟編『男女共学 食物の学習』10～11ページ）

もみを知らない子どもは少ないが、玄米を知らない子どもは七〇  
%もいた。阿蘇・矢部地方の山間部では、今でも「焼き米」がある。  
物産館で入手した焼き米を試食させ、先人の苦労や知恵について考  
えさせる。

#### 。米の精白

各自が準備するもの（前時予告）

①玄米……1kg（玄米のない者は白米一五〇g）

②小ビン……一本（醬油さし又はオロナミンCのビンなど）

③竹の棒……（米つき棒）

一クラス数名の家庭に玄米があるので、白米と交換し、全生徒に  
搗精の体験学習をさせる。この学習で、玄米、ビンの入手は簡単であ  
るが、竹棒を各自が準備することは無理であった。本校では、校庭  
近くに竹山があり、昼休みに子どもらと竹切りをやってそろえた。

#### 。玄米からの搗精

各自のビンに玄米を七分目入れ、竹棒でつきはじめる。床に座り  
こんで搗く者、ビンを股にはさんで搗くもの、机上にビンのをせて  
搗く者、衣服がぬかで汚れぬようにと、新聞紙がひざ上にくるよう  
にして搗く者、どの子も意欲的である。「先生、フケがでてきた」



### 炊飯実験

観察する

状態

色

粒

(米が白くぬる  
米がふくらむ)

(米がおいしく  
米がふくらむ  
米がべた)

(おけさ  
ふくら  
めわすやくがは)

#### 実験

1. 精白した米をたく  
米... ( ) g , 水... 米の重さの1.5倍 ( ) g  
(はがま, 計り, じょう)
2. ビーカで米をたく  
米... 100g 水... 150g (米の1.5倍)  
(ビーカ, 計り, 金あみ, アルミはく)

3. 玄米をたく (教師が実験する)
  - ⑦ 玄米をはがまでたく  
玄米... 300g 水... 500g
  - ⑧ 玄米を圧力鍋でたく  
玄米... 300g 水... 400g

#### 試食後の感想

との発言には、一瞬おどろいたが、ぬかを知らない子どもたちもらしい表現だと思った。自分たちで搗いた米は、次時の炊飯実験で食べるのでどの班も、「おれのが白いぞ」「もっと強くついて」...約三〇分遊ぶことなく搗く。二時間続きの授業の場で完了させるが、休憩時間の10分間も遊ばずに、「先生搗いてよかね」と作業を続けるほどの活気である。

搗き終わった米は、ふるいにかける。我が家の米と比べ、ちがいを調べる。「僕たちの米は黒いよ」「玄米の一部が残っている」つぎに、もみを与え外皮をむかせる。もみの外皮をとったものが、

玄米だということに気づく。玄米の搗き具合によって、もみ→玄米→三分づき→七分づき→白米となることがわかる。

#### 炊飯実験

前時に、おにぎりのおかずとして、梅ぼし、花かつおなどの準備を予告しておく。

実験1、炊き上がった飯はおにぎりにし、準備したのり・うめぼしなどで好みの型にする。

実験2、米から飯になるまでの過程を観察させる。子どもは、吸

水時、沸とう時に米が増えるのに気づく。横に寝ていた米が、おど  
りだし立っていく様子をみて、おどろきの声をあげる。班内で記録  
係を決め、観察結果をまとめる。観察結果は、次時限の導入にする。

実験3、都合で師範とする。たき上がった玄米飯二種類を試食。

普通の炊飯法ではまずい、圧力ナベではねばりもあっておいしく  
食べられることをわからせる。この場合の水加減は、普通飯と異な  
っていることに注意する。昔の人を思い浮かべながら試食する。

。でんぶんの糊化

前時の炊飯実験の感想を聞く。「おいしかった」「腹一杯になっ  
た」「僕たちの飯は黒かった」「白米のごつ揚げとった」「玄米飯は  
じめて食べた」「圧力ナベの玄米飯はねばっておいしかったけど、  
もう一方の玄米飯はポロポロしていた」「米から飯になるのをはじ  
めてみて、感激した。びっくりした」……。

さて、魚・肉・野菜の食べ方と米の食べ方で異なるのは何だろう  
か。と問いかけながら、自主テキストを用いて、でんぶんの糊化学  
習に入る。

自主テキストのこの項は、概略左のような内容である。

#### 〈炭水化物を多く含む食品の調理〉

##### 1、米や魚や肉や野菜のたべ方のちがい

(炊飯実験を導入とする)

##### 2、「でんぶんの糊化」とは

(焼きいもは、糊化といえるか……子どもたちは、イエス  
・ノウの答を出す。その中で、ああ、いもには水分がいっ  
ぱいあったよと成分表を思い出す子どもが出てくる)

### 3、糊化と老化

#### 四小麦粉の学習

##### 1、麦について

当地に栽培されている麦を六月の収穫期に確保しておき、麦の  
種類の学習をする。

##### 2、粉にはどんなものがあるか

粉と名のつくものは、すべて書かせる。この学習も班学習をさ  
せ、代表に板書させてまとめる。子供たちの中できな粉の原料が  
大豆であることを知っているのは、四〇五名にすぎない。そこで、  
粉の実験の導入時に「きな粉」「米粉」を教師がつくってみせる。  
大豆は炒っておき、ミキサーに数分かけると出来上がる。米は、  
くず米か古米を水洗いし乾燥しておき、これをミキサーにかける。  
手づくりきな粉と米粉で「くしだんご」の実習をやった年もある。

##### 3、小麦粉の種類

薄力粉、中力粉、強力粉によってグルテン含量と主な用途がど  
う異なっているか。次時の実験の予習として、家庭学習にする。

##### 4、小麦粉(グルテン)の実験——省略

#### 四調理実習

前時に、我が家のだご汁を調べさせ、班ごとに、材料は決めさせ  
る。作り方の詳細は省略する。食塩水でこねた中力粉に、ぬれぶき  
んをかけ、五十分放置し、厚手のビニール袋に入れる。厚紙にく  
るんで、足でふんで伸ばす。これをそのまま十〜二十五分放置して  
から、めん棒で二ミリ厚さに延ばす。包丁で三〜四ミリ幅にトント  
ン切る。これを具(鶏肉、油揚げ、にんじん、白菜、ねぎ、大根など)

が煮えただし汁の中に入れ、みそ・しょうゆで味をつける。

子供たちは、調理実習の中で、このだご汁が強く印象に残ったようである。班ノートには、この時のうどんつくりの感想がいっぱい書かれていた。また昨年の子供たちは、キャンプの自由献立に「だご汁」が数班あったとか。他教師からは、その時の男子生徒の活躍ぶりをあとできかされた。

（授業を終えて（生徒の感想））

①米の学習のとき、一番印象に残ったのは、昔の人々は玄米をついたり、もみをとったりして食べていたということだ。それに米の食べ方がたくさんあったことをはじめて知った。

私は玄米をはじめて食べました。昔の人は大変だったなあ。

②米を自分たちで精白したのが一番印象的でした。それに、いろいろの食品成分を円グラフに書き話し合ったこと、先生のプリント学習は役に立ちました。

③ビーカーで米をたき、米の動き方をはじめてみました。米がふくらみ、泡がで、出来上がった米は、立って泡はなくなっていた。それにあのぬかで食器を洗うのも、はじめてでした。

④男も女も同じ人間、知っておかなければならない事にそう違いはないと思う。男でも、いざという時に困らないだけの事は知っていなければならぬ。現に、僕たちの身の回りにある食品公害の問題、川を汚している洗剤……などなど、これらの問題には、男女の区別などありません。これは、人間全体の問題です。これらの問題を解決するには、男だけ勉強すれば解決できるというものでは絶対ないと僕は信じています。

もう一つは、男と女は、それぞれの分野を共に勉強し、必要と

きは、助け合い、協力しあって生活していけば、いいんじゃないかと思いました。お互いにたりない所を協力し合いながら生きていくのが本来の姿じゃないかと思います。

（仕終りに）

従来の栄養素からはじまる学習と異なり、体と食べもののかかわりからはじまった今回の学習では、子供たちは受身でなく、活動の場が多く、生き生きとした学習となった。

実習も、理論学習の発展として、米・麦を中心とした内容にし、科学的にとらえさせることができたと思う。

食べる事に対する関心は強く、ややもすると食べる楽しみが先行しがちであるが、思いがけない子供に、思いがけない良さをみつける。男子には、家庭科は不要だと言っていた子供が、実験・実習をやる中で、意欲的に活動し、夏休みに教師にくれた便りの中に、「まだまだ先生の授業を受けたい」と書いてくれるまでになった。

今の子供たちは、何も知らないなどと言でかたづけてきたが、それは、子供たちをとりまく生活・環境すべてに起因していると思う。

生産と消費の場の分離によって生みだされている問題（原料やその製品の過程など知らなくても、「きな粉」「白玉粉」「片くり粉」……がほしければすぐ入手できる生活をしている子供たちに、今こそ、日本の食文化について考えさせ、その歴史の重みを体得させながら、今後のあるべき姿を追求する姿勢を養いたい。

（熊本県菊池郡合志町立合志中学校）

高等学校では

寺島 絃子

性と女性解放  
(2)

## 二、性愛をめぐる現状と歴史

前回は「二、女のからだ、生命誕生の科学」について報告した。

今回は、「人間は性にかかわってどう生きてきたか、今どういう状況にあるのかということと未来への展望を含めて考えさせたい。

①新しい潮流の中で性はどのようにとらえられるようになったか  
性科学の解明や世界観の深まりによって『性の神話』は切り崩されつつある。スウェーデンの性教育を紹介しながら、日本はまだまだ性を秘すべきものとして子どもに隠す、その状況の違いはどこからくるのか注目させる。

② 女の普遍的悲劇

吉武輝子著『闘う女はやさしい女』の中の『私の原点・十三才のレイプ体験』を使って、レイプはなぜ女の普遍的悲劇なのかを考えさせる。著者は自分のレイプ体験と祖父母の性関係を通して知った。夫婦間の合法的な性であっても、男が養い、女は養われるという関係の中にあっては、二人の性のありようは犯し、犯されるという姿でしかあり得ない。レイプはその延長線上にある男文化の所産である。

ると。

レイプは告訴しても犯罪を立証することは困難だ。女は社会的にも三重に裁かれる。男優位の文化とは何か。どうしてそれが作られたのか。男の女への暴力を肯定する土壌は、セックスに限らず、日常的なことひとつをとっても現れていることに気づかせたい。

③ 買春観光とからゆきさん

売春は彼らにとって興味あるテーマだ。「自分はしたくないが」と断って「したい人はすればいい。自分のからだも自分で自由に使う権利がある」と許容する。

売る側の論理を崩すのは簡単ではない。従ってここでは買う方に焦点をあてて、商品としての性のもつ意味を考えさせた。

生徒は買春ツアーの実態を余り知らない。この問題は他国の女性への人権侵害であり、民族差別の問題でもある。『潜行する買春観光』という新聞のルポ記事を彼らに読ませる。私はちょうどそのころ「アジアせつくす最前線」という、タイでの買春ツアーを題材にした映画を見た。日本人男性たちは、ホテルに荷物をおくとまた慌ただしくバスに乗り込み、売春街へと送られる。このように集団で行動するのは日本人だけだという。場面は一変して、貧しい北部タイ。女たちの故郷である。電気も水道もない閑散とした風景がうつし出される。彼女らが家族の生活を支えているのだ。経済の貧しさが売春を余儀なくさせている。国策としての観光産業が国の経済を支えている。

生徒にそういう話をしながら、日本における高校生売春について考えさせる。「好奇心から」「遊ぶ金欲しさ」という動機が物語るように、その状況は海外で買われる女たちとは余りに違う。なぜ売春するのか。好奇心と遊ぶ金欲しさが本当の理由なのか。男優位の文化と女性観をそのまま受け入れ、早くから世の中を諦め切っているから、ではないのか。彼女らは売春の意味するものを知らないだけだ。

生徒は少しずつ、肉体をひさぐとはどういうことを考え始める。「自分とは別世界。どういう風に考えていいかわからない」「送り出す女の方も問題だ」「知らなかった。今までこのような問題を考えることを避けていた」という。

そこでさらに、明治・大正時代に遡って考えさせる。日本の近代化の先兵として、東南アジアへ売られていったからゆきさんの存在である。

国内においても大凶作に見舞われた農村の娘たちが身売りされた。女の性がこのように売買の対象になったのは、いつごろからだろう。日本における公娼制の発生と歴史について、京都府家庭一般資料集の「歴史的にみた性の問題」を読みながら、体制と家族制度維持補完物であったことをおさえる。さらに、戦後の売春防止法の成立経過、売春婦の更正施設「かにた婦人の村」についても触れる。

富を持たない女は性を商品として売る他はなかった。そのような悲しい歴史を知らずして、「売春は自分も楽しめて金が入る。すごくわりのいいバイトですよ」とわり切って考える高校生たちには是非考えさせたいテーマである。

ある生徒Cのことについて触れたい。この生徒は以下の号でも登

場する生徒である。彼女はクラスでただ一人「内職」の参考書を広げていた。一学期より終始、私の授業には批判的だった生徒だ。絶えず私を見下した調子で話す。やりにくい生徒だったが、それだけに反応がある。その生徒が「先生、森崎和江の『第三の性』読みましたか」と授業が終わるなり聞いた。私は「まだ読んでいない」と答えると、「今読んでるけど、とっても難しくて」と言った。Cは最後の意見感想の中で次のように書いてきた。

「からだを商品化する。当然のことではないですか。昔から、それで人間は生活してきたのだから。だってブルーカラーの労働者がそうでしょう？ 女だから保護されるべきだなんていうのは反対に女性を縛っているのでは？」

うーん。私はしばし、考えあぐね次のように返事を書いた。「労働者は労働の対価として賃金を得る。そのことと、自分のからだを商品として売り、その対価として金を得るのは本質的に違うの



生徒が持ってきた『経足』の写真

ではないか。性を労働と考えてよいのだが、セックスは相手とのコミュニケーションの中で成立するきわめて個人的なものであり、人間的・精神的要素が強いものだ。一般の労働の範疇に入れて考えることはできない。性は労働からうみ出された商品でない。しかも、女の性だけが商品となる」。

彼女はおそらく納得できなかっただろう。授業の中で彼女のこのような疑問に答えるようにおさえるべきであったと思う。

#### ④ 性と結婚の歴史

纏足の写真を見せた。教室に「ひどーい」「気持ち悪い」という声が流れた、生徒は、なぜこのように醜く変形させられたかわからない。解放後の中国の成長するにまかせた足と比較しながら、国の政治や女性観の変容が女の地位と関係することをとらえさせる。

纏足を導入としながら、日本における結婚の形の変遷とその中で女性の地位について、概略を説明する。個人的性愛をぬきにした婚姻制度の矛盾についても指摘する。

男と女のいい関係を作ることは、それを保障する基盤を作るという意味で、政治的・社会的改革と結びついていることをわかった。生徒にとっては、性は資本主義社会におけるイメージしかわからない。汚染された性の中にどっぴりっかり込んだ中でしか、性を考えられなくされている。

#### ⑤ 戦争と性

戦争は一瞬にして人類が積み上げてきた歴史も人権も、愛も自由も踏みこじる行為である。軍拡へと状況が一層の傾斜を見せている今日、戦争とは何か、性という角度から見つめさせたい。

戦争前後、不況、失業の嵐の中でエロ・グロ・ナンセンス文化が

横行し、人々の関心を退廃文化に向けながら、戦争へと突入していった。戦争中、従軍慰安婦として「お国のために」と戦地へ向かわされ、日本軍の将校や兵隊の性欲処理に一人が一日数十人の相手をさせられたこと。そして慰安婦の多くは植民地であった朝鮮の一般家庭から強制連行された未婚女性であったこと。大陸で、日本軍が略奪、暴行、虐殺を繰り返した。夫や恋人が戦争で殺されたこと。そして同年代の男たちが戦争に奪われ男女比がアンバランスになり、恋愛や結婚のチャンスに巡り合わなかったたくさんの女たち。そして銃後を守る女たちは国防婦人会の中で戦争に協力するようにと組織されていったこと。敗戦後、今まで敵軍であった米兵相手に売春婦にさせられた女たちがたくさんいたこと。

さらに沖縄の女性からもらった手紙を紹介しながら、戦場と化した沖縄で、子どもを殺され、肉身を殺され、日本兵や米兵に犯され、という屈辱の歴史があったことなどを話した。このあたりで『一億人の昭和史、日本人、三代の女たち』の写真をみせた、何よりも写真が当時の状況を物語る。

彼女らにとっては耳をふさぎたくないような悲惨きわまる話であるが、戦争によって引き裂かれた性について、きちんと見据えなくては、戦争のもつ非人間性がわからない。体験もない私が、教室でこれらを語ると、それらの事実には余りにも安っぽくなる。しかし、同性の痛みに対する共感の心を、できるだけの想像力を働かせて、やはり生徒たちに伝えたいと思う。

生徒は「この人口爆発、汚染された社会は一度、戦争でも起きてこわしてしまえばよい」とか、「流された生き方より愛国心に燃えていた方が、まだましではないか」と守るべき平和そのものがない

状況を憂え、傍觀者的にそういうが、そのような生徒たちこそ、戦争の実像を教えたい。

次は現代における性の諸相に目を向けた。

⑥ アメリカ十代の妊娠の実態

⑦ マスコミは女の性をどのように扱っているか

ここは紙数の関係で省かせていただきたい。

⑧ 性と愛、若干の問題提起

ある都立高校の女子生徒が調査した「男子高校生のセックス観・結婚観」という意識調査を糸口にしたが、現状の所産である男女の意識のズレについて考えさせた。

愛について、宮本百合子、シモーヌ・ヴェイユ、エーリッヒ・フロムなどのことばを紹介しながら考えさせる。

愛とは社会に対して自己を閉ざすものではない。取り引きとしての結婚、愛とは愛することではなく愛されることだという錯覚、「愛さえあれば」が性衝動の免罪符になっていないか、愛とは結果ではなく、発展し生産していくものである。愛は死とならんで、人類が苦悩し考えてきた二大テーマである。ぜひ文学作品などを読み、「愛とは何か」のテーマを自分なりに追求して欲しいとつけ加える。

生徒の意見・感想、私の返信

私は女性差別の根源に女の性への収奪があると考えて、この章を組んだ、女の痛みを個々の問題として自分に返していつてくれるようにと感性に訴える形で授業をした。授業中、生徒はシーンとだまりこくっていた。

授業後の意見・感想には、女としての誇りを傷つけられた怒りがどっと噴き出た。今までにない手応えだった。私は何とか授業に集中させるべく、多少あせりながら授業したのだが、受験体制の中で人間性までも埋没したかのようにみえる彼らの中に、歴史の歯車を逆転させない素地があることがわかってうれしかった。

私はそれらのひとつひとつに、教師というヨロイを脱いで返信をしたためた。これをもって授業の完結としたかった。それぞれ、授業の中で受けとめたことは様々だし、個性がある。私は徹底して、因循で姑息な手段でからめとられた性状況の中にいる彼女らを励ましたかった。

「一学期のはじめごろ、本当は先生のこと嫌いで、家庭っていうのは、調理とかやるのだと思っていました。でも今は本当にうれいんです。私の求めているものです。普通のぬくぬく育った女の子などは、結婚に夢を描いて美化しすぎて、現実の苦勞など考えないんですね。彼女らは、結婚式とか新婚生活の甘い部分しか知らないのではないかな。だからこの学校の女子はこんな授業を受けることができて幸運です。彼女らはやっぱり結婚するだらうけど、無知のままじゃないからね。うまく言えないけど、本当に私の考えていたことが授業でできてうれしいです」。

彼女は纏足を取り上げた時、叔父の家にあったとその写真を持ってきてくれた生徒だ。

また、「私の人生は私のものだ」世間の価値基準にあわせて生きていくのではなく、「私自身の人生を生きたい」と開き直りをみせてくれた生徒もいる。

『『家庭に入るのが女の幸せ』は『男が仕事に専念するための必要

性』であり、『女は愛されるのが一番』は『女の能動的な愛を妨げること』である、と学び、私のような怠慢でやりたい仕事は『絵に関すること』しかない女は邪魔なんでしょう。『生きがい仕事』といえるようにがんばりたい。

女の人権について述べたものも多い。

「全人類の半数の不幸として問題をみたい。女性と男性が一体にならなければこれらの問題は解決されない、自分ひとりでも誇りと信念を持って、不当な行為から女性を守ることを誓います」。

「レイプの話なんかすっごく強烈で、夢の中にまで出てきた。なんか悲しいです。でも泣いてばかりはいられない。女は男に尽くすものというような考えを改めて立ち上がらねば」。

「中学の時、襲われた人がいっぱいいて、私も襲われたことあるけど、学校に連絡すると担任は『気をつけよ。襲われた方も全く悪くないとはいえない』と言ったのだ。きっと女にそういうみだらな気があるというのだろう。しかし、少なくとも私はあの時、不可抗力としかいいようのない状況だった。その担任に対してとてもくやしかったです。その担任は女について話す時『女はかわいいのがいいんだ』と言っていた。先生は痴漢に襲われる女はやっぱり女の方にもスキがあると思いますか？ 私はそれは男の勝手な解釈だと思います」。

私「スキを見せないで毎日毎日気をつけて暮らさなきゃならないなんて、人間不信、これにまさるものないって感じですね。痴漢のために、夜外出できないとか。男を見たら狼と思えとか。ホント世の中逆さまって感じがしてなりません。中学の先生もきつと結婚こそが女の幸せと思っているのでしょうか。男の暴力を肯定した上で、

純潔こそ夫への最高の贈り物だという考えが、世の中を支配しています。本当に大事なことは人間そのもののなにか」。

レイプではないが、小学校から中学校にかけて、ずっとクラスの男子たちに暴行され、いじめられたため強烈な男性不信に陥っている生徒もいる。

私「男はみんなどうかしている、とか、狼だ、なんていうけど、人間的にステキな男性はいっぱいいます。男の性欲処理のために、女のからだを品物のように扱ったりする風潮はとも多いです。だから加害者は男だから、男は敵なのだという単純な論理ではなく、性というものは歴史や、社会や、文化の産物であり、人間がまっとうに生きようとする時、女だけが被害者なのではなく、男性も被害者にならざるを得ない状況にあるのです。互いにやさしさをもった性、それをつくるのは必ず実現可能なことです」。

愛について述べたものも多かった。

「今日、自分でもやっとわかったことだが、男女同権だ、女を性の対象としてしか見ないなど色々思ってきたが、結局そんなことを言っている私自身が、理想に描く愛は『より多く、より深く愛されること』愛されたい』という受身の気持ちでしかなかった。もう一度、自分自身の愛の形についてよく考えたい」。

「愛は与えられるものと思っていた。そのことが自己否定につながっていくのだろう。昔は売春が公然とあったのだが、それらの歴史をふまえてこれからのことを考えたい」。

結婚というテーマに縛られている生徒はやはり多い。

「今まで私は、みんながするから結婚するとか、早めに結婚しなければ親に心配かけるなどという考えで結婚というものを考えていた。



それに私の人生というのは、結婚する相手次第で幸せにもなれば、不幸にもなると考えていた。でもこの考えが大変間違っていることを思い知らされた感じだ。

「自分としては恋愛結婚したいけど、親が捜してきた好条件の相手の方が、将来安心のように思う。」

この意見に対しては、私は自分の見合いで失敗した体験を述べ、自分の主体的な選択をぬぎにした結婚は怖い。たとえ親であっても、その責任はとれない。見合い結婚の場合は、往々にして自分の判断を越えて、まわりで話が進行してしまう危険性があること。決して世間がいうような「条件」で幸・不幸は決まらないことを述べた。

「女は立派な人を選べば、条件のよい人を選べば幸せになれると思っていた。今もそう思うけど、何かひとつ考えてしまう。私は恋愛と結婚とは別問題だと考えてきた。けれど人間は愛があつて幸せになれるような気がしてきた。二人が力をあわせて、生きていくのもいいんじゃないかなあと。」

私「私は恋愛は必ずしも結婚につながる必要はないと思うけど、恋愛と結婚とを分けて考えることに同意できない。恋愛なら燃えて相手の欠点も見抜けないというけど、それ程燃えられることならすばらしいじゃないですか。」

「こういう性の問題に関しては私にはやっぱり逃げているところがあつて、一時間一時間の授業が心にずしんとこたえました。性についての歴史的な女性の立場、なんかすごく情ない感じがして、つらいです。現代でもそれは残っているのではないのでしょうか。私自身の中にもそういう弱い気持ちというものがあるんじゃないかと思ひます。」

このように彼女らは大変ゆれている。この授業によって意識が変わつたという感想はとても多かつた。しかし私は意識はそんなに簡単に変わるものではないとも思う。私はこの年になつても、私の中にある古さというものを払拭しているわけではなく、また自分の中にある娼婦性みたいなものに出会つてとまどつたりもする。

しかし、だからこそ人間の根源的なものである性を通して、自分の中にある古さや固定観念と対峙し、客観視してみることは必要なことではないか。同性だから感じとれる性の痛みに感応し、今も抑圧され続ける女たちに思いを寄せ、そして自分たちの日常の中にある不条理や矛盾に目を向けることは大切なことだと思ふ。

これから愛と性に出会い模索していく彼女らは、きつと新しい価値観を作つていつてくれるだろう。私は若い世代に期待している。

「クラスの男子が『なんで俺たちにも教えてくれがー!!』といつていた」というように、男女で学びたいという感想がとて多かつた。

「この学習はなぜ女だけが学ぶのでしょうか。もっと大勢の人がこの問題を正面から見つめるべきだと思います。恥ずかしさを通り越してとても悲しいことだと思ひます。男子の会話を聞いていると一つの生命が生まれ育つのが、どれほど大変であるか全くわかつていなくて、たわいのない冗談や猥談としてすまされるのが残念です。

しかし『そんな簡単なものじゃない』なんて私から言えません。私がいつたつて『なんて恥知らず』で終わると思ひます。みんなにこのことをよく知つてもらひたいです。」

ある生徒は長時間かけて次のように書いた。

「性について考えると疑問ばかり出てきて頭がいっぱいになります。性というのは本来どうあるべきものか、結婚していいなかつたら性交

してはいけないのか。結婚後、他の男性との性交は許されないのか。愛がないのに性交するのはいけないことなのか。性をおおらかに考えるとは、どこまでおおらかに考えればいいのか……。性の本当の意味が知りたいです。

#### 性は男女で学ばせたい

私が三年前、一年生の担任をしている時、生徒たちとL・Hの間、二カ月間をかけて「愛と性」に取り組んだ。放課後L・H運営委員たちを中心に時間をかけて話し込み、クラス討論やアンケートの中から出た疑問点に自分たち自身で答を出すべく、色んなところへ出かけレポートし、報告し合ったのだった。その中で私が感じとったことはやはり「愛と性」は男女で学習すべきだということだ。互いにホンネをぶつけあう討論の中から異性がみえてくる。その後の彼らはずいぶんと、性に対するこだわりが少なくなり、ふだんの会話の中でボンボンと性の話がとび出す。彼らのそういう姿を見ていて、私は本当に羨ましく思う。

大人や教師は「最近の子はケンカラス」と性の暴走(?)を嘆くが、その前に彼らがもし、貧しい愛の表現しかできないのなら、クラスや行事や部活動の場で、からだを通して豊かに愛をはぐくむことのできる表現力をつけてやるべきだと思うのだ。

家庭でも人間の喜びや悲しみ、怒りに感応できる対応のしかたなど、そのつど教えてやらないと「愛する力」が育たない。

教師として親として自戒の意味をこめて、このことを最後につけ加えたい。愛と性の教育はまさにトータルな場面で設定されねばならないと。

(石川県立金沢桜丘高等学校)

#### 《参考資料》

- 『スウェーデンの性教育と授業革命』ビヤネール多美子 昌平社
- 『闘う女はやさしい女』吉武輝子 攢書房
- 『女エロス』No.2 No.9 No.16
- 『ジュリスト増刊総合特集25 人間の性』有斐閣
- 『男女共修家庭一般資料』京都府立高等学校家庭科研究会
- 『一億人の昭和史日本人3 三代の女たち』毎日新聞社
- 『からゆきさん』森崎和江 朝日新聞社
- 『思想の科学No.127 社会構造としての性差別』思想の科学社
- 『オンナたちの慟哭』千田夏光 沙文社
- 『沖縄のハルモニ』山谷哲夫 晩聲社
- 『いくさ世を生きて』真尾悦子 筑摩書房
- 『淋しいアメリカ人』桐島洋子 文春文庫
- 『愛すること』エーリッヒ・フロム 紀伊国屋書店
- 『労働と人生についての省察』シモース・ヴェイユ 勁草書房

☆☆☆☆

## 新しい家庭科を創るために

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

大学では

吉田 紘子

### エコロジカルな家庭科

ここで私に求められていることは、新しい家庭科を創るために大学ではなにができるか、また、どうしているかということだと思えます。家庭科教育にかかわるのは狭い意味では家庭科教育法になるのでしょうか、カリキュラム総体についてもみる必要があると思います。前号までのおふたりは「家庭科教育法」を教えている立場からでしたが、私は被服学を専門としている立場から、家庭科教育について述べることにしました。

教育学部に就職して、いやおうなく家庭科教育にかかわるようになって十年余りになりますが、「家庭科教育学」について疑問に感じたことがいくつもあります。ひとつは家政学部で被服学を専攻してきた私が、最初にとまどったものです。教育学部では被服、食物、住居、保育、家族などが寄り集まってひとつの学科を形成しています。そのなかの一領域でしかない「被服」に、「被服学」をどう組みこんでいったらよいのかということです。この問題はその後、全国の教員養成系大学の集まりにおいて論議がなされました。そこで

は、教育学部の家政科は「家政学」を縮小したミニ家政学部ではなく、独自の体系を創るべきであるとの合意ができました。具体的にどうするかは、個々の大学、また、教官によって異なるし、難しい問題です。

もうひとつは、狭い意味での家庭科教育学（教育法・教材研究）と食物学・被服学など専門科学とをどうかかわらせていくのかということです。茨城大学では「家庭科教育法」「家庭教材研究」「食物学」「被服学」「住居学」「育児学」「家庭経営学」など各領域ごとに概論、特講と何本かずつの授業が出されて、各領域を総合化させる授業については検討中です。現在のところは、学生が受講した内容を各々に総合化させて、各々に「自分の家庭科」を創るわけです。しかし、今の学生をみていると、各々の授業が別々の引き出しに納められてしまっていて、ひとつの授業には、決まったひとつの引き出ししか使わない、教師の側で示唆しないと、他の引き出しを活用することに気がつかない、そんな気がします。ですから、今の学生にとって「自分の家庭科」を創れというのは難しい注文のようです。田中さんのいわれるように、学生の質が変わってきていて、授業がやり難くなっています。それだけにカリキュラムのくふうがより一層必要なのではないでしょうか。

もうひとつは、家庭科で「食べたか」、「着かた」、「住まいかた」などが教えられているはずなのに、食生活のおかしさ、着せられ、食べさせられている主体性のない生活等々、「生活」にかかわる問

題は一向になくなりません。これは、教える側、教わる側の問題だけではなく、家庭科の基本的な考えかたに問題があるのではないかと考えております。

#### 授業方法についての試みから

茨城大学では、「家庭科教育法（中等科家庭科教育）」は、家庭科教育学を専門とする人が、「家庭教材研究（初等科家庭科教育）」は「専門」領域の人が分担しております。私も赴任して二年後には教材研究を担当しなければならなくなり苦労しましたが、家庭科について、家政学について、家庭科教育について認識を深めることができました。

家庭教材研究は、数年前までは、通年の授業でしたが、カリキュラム改革の一環として半期に短縮しました。教材研究が通年のときは、前期を「家庭科教育法」にあたる内容、後期を被服・食物・住居各領域別に前期で提起したことをさらに具体的に問題にかえて検討しました。二年間、教材研究をひとりで担当して悪戦苦闘したあと、苦肉の策として後期を各専門領域の人が分担するようにしました。これは学生にも評判がよかったようです。

その後、カリキュラム改革によって、前期のみを教材研究にして、家庭科教育学を専門とする人が担当し、後期分をそのまま「小学校課程家庭」として被服・食物・住居学を専門とする人が四人で分担することとしました。現在の私は被服領域のみを担当しております。授業の担当のしかたが変わっただけで、形態は変わっていないのですが、授業感は随分変わったものとなりました。学生の質の変化の影響もありますが、むしろ、授業担当者間のコミュニケーションがう

まく取れていないことの方が大きく影響しているようです。家庭科教育学と専門科学が別々の授業となってしまうため、前のときは相互に働いていた相乗作用が薄れたのではないのでしょうか。

もうひとつの試みとして「家庭教材研究特講」を家庭科教育学・被服学・食物学・住居学・家族学の各領域の教官が分担したことがあります。このときも、教師間の話し合いが充分できず、授業としてのまとまりにはもうひとつ欠けるものがありました。しかし、私にとつては興味深い授業でした。学生が授業を組み立てる過程をみていると、その授業のなかでは、小・中・高までに創りあげてきた「家庭科観」でしか題材を観ていないのです。大学で積みあげたものが、家庭科に関係するものばかりでなく、他のものも含めて、活かされていないのです。そこで、たとえば「洗たく」の授業について、「衣料学」や「被服管理学」がどうかかわっているのか、どうかかわらせなければならないのかを具体的に指摘すると、それが学生にとつては「発見」になり「驚き」になるのです。そのことが、学生の「家庭科観」を変えることに、学習意欲を刺激することに役立ったようです。

「家庭科教育法」担当者が、家庭科にかかわる衣・食・住についてとりあげる。各専門領域の担当者が各々の専門の体系を押えたりえで、各領域をとりあげる。どちらにも長所・短所があつて、どちらがよいとはいえませんが、担当者各々の役割をお互いに活用することが考えられてよいのではないのでしょうか。

私としては、この特講の授業形態はもう少し続けてみたい試みでしたが、現在の教育・研究体制のなかでは、個人の負担が大き過ぎて、続行は無理でした。

「家庭科」と「家政学」、「教育学」をどうかかわらせていくのか、担当者の組織の問題、研究条件も含めて検討しなければならぬ課題だと思っています。

「家庭科」、「家政学」は「よりよい家庭生活」を創るための教育・科学として位置付けられています。しかし、これまでに、「家庭科」「家政学」が担ってきた役割をみると、「生活」をよくすることに就いて、どうかかわってきたのか疑問があります。

#### 〈家政学について〉

私が現在の職について間もなく、一九七〇年代の初めに、「合成洗剤の有害性」を卒業研究のテーマとしてとりあげたことがあります。このころ、既に、合成洗剤についての有害論争が行われていて、婦人団体や消費者団体のなかでこの問題と取り組むところも出始めておりました。しかし、私が学んできた家政学では、合成洗剤の安全性に関する研究は少なく、大半が、その性能について、従来の石けんとの比較検討や適正な使用条件についての研究でした。そこでは少ない時間と労力でより白くすること、「合理的な洗たく」が問題とされているため、合成洗剤の「便利さ」が評価されています。合成洗剤による皮膚障害、河川・地下水などの環境汚染といった、直接「洗たく」と関係しない面については、ほとんどふれていません。この傾向は現在も続いております。

本来の家政学の目的からいうと、先ず、家政学で人間の生活に対する洗剤の影響がチェックされなければならなかったはずです。食品添加物・プラスチックなど生活用品として取り入れてきた合成化学物質についても同様のことがいえます。そのチェックができた

かったのは、日本の家政学が家庭生活を中心として、「よりよい生活」、「合理的な生活」を追求してきたためではないでしょうか。社会の変化によって公害、環境汚染、資源不足、食糧危機、人口問題など家庭生活にかかわる問題は広範囲にわたり、社会や環境に影響を受けることが多くなっています。日本のように家庭を自己完結型のエコシステムととらえている限り、環境との相互作用を考慮したとしても、各々の問題には対処できないと思います。

現代社会の諸矛盾がより早く深刻なものとなったアメリカでは、家政学も変革されています。すなわち従来の家庭という閉ざされた枠内での環境を超えて、人間と生態系（エコ・システム）における自然的・社会的・全体的な環境とのかかわり合いを研究する学問であると考えられ、一部にはヒューマン・エコロジー、ヒューマン・デプロブメントなどと名称を変更した大学もあります。

#### 〈家庭科について〉

家庭科についても同じことがいえると思います。牧野氏も指摘しているように、子どもたちのからだのおかしさ、食生活のおかしさ、家庭生活のもろさ等々、家庭科の必要性を強調する素材には事欠きません。また、「健康な食生活」「健康な衣生活」「民主的な家庭づくり」など、各々の問題を取りあげた授業実践がなされています。そこでは、バランスのとれた食事の必要性↓補食としてのおやつ↓市販おやつとの有害性↓手づくりのおやつ、また衛生的な下着の着かた↓洗たくの必要性↓合成洗剤の有害性↓粉石けんを使うなど、取りあげかたや授業の流れに違いがあるかも知れませんが、多かれ少なかれ、現代の家庭の抱えている矛盾や問題性に気づかせ、それによってどう対処するかの指導がなされているように思います。

しかし、授業のなかで、食品添加物や合成洗剤などの問題性についての認識は深まり、無添加の食品を選び、あるいは作り、粉石けんを使わねばならないとの意識は育てられます。が、現代社会においては、ふつうに暮らしていれば、有害食品や有害な生活用品を使わざるをえないわけです。「便利で安い合成洗剤」から、「不便で高い粉石けん」へ切り換えた生活にするためには、家庭科で追求してきた「よりよい生活」の中身を問い直す必要があるのではないでしようか。

### 「家庭」では

歴史的には家庭生活の形態・内容は産業革命以来、科学・技術の変化に従って、家族数の減少、家庭内の労働が次々と商品やサービスとして、資本による商品化が進められてきました。この家事労働の商品化や縮少の過程は、高度経済成長のもとで、急速に進みました。電気洗たく機、冷蔵庫、インスタント食品、既製服など、「便利な生活」、「豊かな生活」のための商品が次々と開発されました。

「より多く作り、より多く消費する」経済体制のもとでは、市場を拡大するため、次から次へと新商品が開発され、広告を通じて欲望をかきたてます。その結果、私たちの生活のなかに、食品添加物や合成洗剤・プラスチックなど二万数千種もの合成化学物質が入りこんでしまったのです。それらは、私たちの生活を便利にしたけれども、その反面、人体への有害性、生態系の破壊などが問題になってきています。また、生活の大部分を資本にまかせてしまった結果、私たちが使用している生活物資についての知識を得ることも、また、その知識に基づいて「使いたい物」を使うことも、大変なエネルギー

ーを必要とすることになってしまいました。すなわち、生活が巨大技術文明のなかに組みこまれてしまって、自分の生活のスタイルを自分で選び、自分でできることが簡単にはできなくなったわけですから、人間らしい生活をとりもどすために、技術文明を問い直し始めた人たちがいます。

一九七〇年代に入ってから公害運動では、エコロジカルな視点からの生活の問い直しが始められています。七〇年代に入ってから問題となってきた消費過程における公害では、私たちは公害の被害者であると同時に加害者にもなっていて、公害追求の過程で自らの生活をも変えることが求められたわけです。現代社会においては、合成洗剤を使わず、処理困難なゴミを出さずなど、公害の加害者にならないよう生活様式を変えることは大変なことで、政治的な取り組みを必要とするのです。

ヨーロッパにおいても、新しい市民運動としてエコロジー運動が起こっています。これは、やはり、七〇年代に入って、石油・石炭などエネルギー資源の有限性、環境破壊や人間疎外など、経済成長の歪みの部分が現れたため、これまでの「より多くをより早く生産し、より多くをより早く消費する」経済システムを考え直そうとするものです。

経済成長策の問題点を次のようにとらえています。①先進工業国の「豊かさ」は第三世界の人々からの労働力や諸資源の略奪によるものである。②先進工業国における経済成長を支えてきた大量生産の技術は、労働節約型であっても、資源浪費型であり、生態系を破壊する。③近代技術は分業制度をもたらし、技術管理社会を築くものになっている。④この分業制度によって、労働者は生産の場では

「生産の論理」に立って公害をおしすすめ、家庭生活の場合は公害の被害者の側に立たせられる。また労働者と市民の対立、地域社会の人間的分断をもたらししている。

従って、エコロジ運動では、ひとりひとりが生活を築いていくための技術や生産に加わり、管理する「自主管理論」や、巨大化した近代技術に代わる「もうひとつの技術」の開発、各々の地域に応じた生活様式の選択は、あらゆる分業の否定、分権化などが提案され、また慣行によらない多様な生き方を実験証明しようとしている。生活の多様性と、その選択における機会均等を保証することが人類の安全に、さらに人間の解放につながると考えられているのである。

### エコロジカルな家庭科

三月から四月にかけては、卒業生とのお別れ会や新入生の歓迎会など学生たちのコンパが続きます。そこではコーラやジュースやスナック菓子が並びます。「家政科の学生がこんな公害食品食べて良いの?」といいますと、「それはそうですけれど、でも……」。学生たちは食品公害について問題意識はもっているけれども、日常生活においては、手軽な市販食品に頼ることになるのだと思います。家庭科教育の現場でも、食品公害の学習のあと、生徒たちが「これはいけないんだけどなあ……」と気にしながら、あるいは無自覚にコーラやジュースを飲んでいて、がっかりしたという先生の言葉もよく耳にします。

私たち教師の側もたてまえては「安全な食生活」を心掛けていても、スーパーで石油漬けのキュウリやトマト、薬漬けの卵、な

どを買ってしまうことがあるのではないのでしょうか。

合成洗剤の問題にしても、その有害性や環境への影響について教科書でも取り上げられるようになりましたから、家庭科教育を受けた人は、知識としては学んだはずですが、粉石けんに切り換える人はほとんど増えません。

手軽に手に入る、便利で安いものから、不便で高いものへの転換は難しいようです。これは、家庭科で求めてきた「よりよい生活」の内容に問題があるためではないでしょうか。「よりよい生活」のなかでは、「便利さと経済性」がまず求められ、それが、高度経済成長を支え、推進してきたと思います。公害など生活の歪が現れてくると、「便利さ」「経済性」に「安全性」が加わるようになります。しかし、「安全なら認める」ということでは、「便利で安いもの」から「不便で高いもの」への転換はできないことが現実なのです。また、学校教育のなかでは、より早く、より多く、正確にできることが良いこととされているわけですから、矛盾が生じることになります。

「よりよい生活」について、「便利さ」「経済性」を含めての問い直しが必要なのだと思います。経済成長政策のなかで、「便利さ」「豊かさ」を「合理的なよい生活」としてきた文明を考え直さなければならぬのだと思います。このような家庭科をエコロジカルな家庭科と名付けております。

私の授業では、「生活」とは、「合理的な生活」とはを問うことから始めます。エコロジカルな視点で生活をとらえたとき、私たちの生活が非常に広範囲にわたって、環境に影響を与えているか、また、

地域地域で各々の環境に順応しながら、他の生物と共存してきたか、それをどこまで伝えられるのかは、私の力量いかんにかかっているわけですか、学生は、これまでの教育のなかでつくりあげてきた家庭観、これまであたりまえと思ってきた生活を疑ってみるようになります。

授業のなかで、生活に対する考えを柔軟にさせるとともに、自然や技術についての知識を活用して、地域の自然条件に合わせて、主体的な生活を築いていくことの大切さをわかってほしい願っております。

被服に関していえば、糸を紡ぎ、織った自給自足型の衣生活から既製衣料が増えるに従って他給依存型の衣生活へ、さらに最近では衣料が必要に応じて借りる不所持借用型の衣生活や、着すてる衣生活が現れています。衣生活の様式が技術文明の進展によって複雑化・形式化する一方で、取り扱いに手のかからない衣料や、着すてるなど衣生活の簡単化・機能化の方向に進んでいるわけです。そのなかで衣生活にかかわる技術、紡ぐ・織る・染める・縫うなどは企業に任せられ、自立できなくなってしまうわけです。結果として企業に着せられる主体性のない生活しか選べない状況におかれたわけです。

授業では、着るといふことの意味、環境と被服がどうかかわってきたのか、被服にかかわる技術、現代社会における衣生活の問題点、などを取り上げるようにしております。学生が「着る」ということの意味を大きくとらえて、家庭生活に関することに限らず、視野を広げていろいろな衣生活様式を自分で選べる自由と心の豊かさの大

切さに気がついてくれたらと願っております。

後半部分はこのコーナーの主旨からは外れたように思いますが、家庭科について不満に感じていることを述べてみました。

(茨城大学)

#### 参考とした本

柴谷篤弘『あなたにとって科学とは何か』みすず書房(一九七七)  
ディビッド・ディクソン『オルターナティブ・テクノロジー』時事通信社(一九八〇)

#### 原稿募集 (薄謝をお送りします)

##### ① 研究論文・実践報告 (図表を含めて五千字まで)

##### ② 発言

▼ 学習の主人公たち——小・中・高生徒の率直な声を  
▼ 明日の家庭科教師たち(二千八百字まで)——家庭

科教師を志す大学生の希望、疑問、提言など

▼ 市民として(二千八百字まで)

▼ 親も言いたい(千三百字または二千八百字まで)

▼ 教師のつぶやき(千三百字まで)

③ Weに、なんでも言おう、なんでも聞こう(本誌の内容・体裁などについての建設的な意見)

④ わたくしからあなたに(読者・執筆者・編集者の交換室) ③④は、はがきでお気軽に



## その3 共感的理解

## 児玉 すみ子

今、私の眼の前には、「ウイ」の創刊号がある。雑誌は薄い、一ページ一ページから、現在の教育状況の中で、もがき、あがき、疑問をつきつけている、いきいきとした個の叫びが、熱い想いが、ぎっしりとこめられていて、厚みさえ感じられる。その中の一つ、K中に講師として赴任し、「学校を見てしまった」斉藤さんの想いに焦点をあてて、今回の稿を始めてみたいと思う。彼女は、K君の授業妨害に、異常を感じて、他の先生方に訴える。その時受けた反応は、「僕の授業は静かにやっています」「一発二発、ガツンとやれ」「あなたはやさしいから、完全になめられているのよ」であった。どうぞ、自分が、斉藤さんになったつもりで、こういう受け応えをされた時、どのような気持がするか、想像してみていただきたい。

あなたは、自分のいる厳しい状況に立ち向かおう、K君と取り組んでみよう、とする勇気が湧いてきますか。若い女教師で、臨時採用であるというハンディをのろわしく思っ、絶望的になってしまいませんか。K君の力になってやりたい、

自分も又、何とか力をつけたいという、あなたの心からの叫びを、軽くない言葉で、それどころか、あなたの力量を診断され、評価されるだけに終わる時、いったい、どういう気持ちになりますか。こういう言葉で片づけようとする人たちは、自分の立っているところから見下ろし、自分が、がっちり組んだ枠組みから、ものを言っているにすぎない。これでは、困惑している人には何らの助けにならない。否、ますます、混乱させ、防衛させ、閉じ込められ、果ては、絶望させてしまふのである。

しかし、この種の反応を、我々教師は、いともたやすく、次々と、生徒に対して行なっているのである。教師の枠組みから、批判し批評し、評価しようとするが、生徒の世界が、生徒自身の眼にどのように映るかを、知ろうとはしない。従って、生徒の感じ方に近づくことは、到底できないのである。彼が感じている、その感じ方に、近づいていく、それが共感的理解なのである。同情、哀れみ、許し、肯定とは違う。同意を与えたり、かばってやったり、味方するのとも違う。別名、感情移入的理解と言われる程であるから、知的な理解とは、程遠い。それでは、共感するとは、どういうことなのか。適切な、具体例を引用してみよう(注1)。

「仲の良い二人の少年が野原に遊びに行った。その時、少年Aは、足を踏みはずして、かなり深い穴に落ちてしまった。一諸にいた少年Bは、助けを求める人がいないのを知って、穴の上に腹ばいになって、必死の思いで、Aを穴から引き上

げた。家へ帰って、Bは、母親から「どうして、そんなに服をよごしてしまったの」とひどく叱られた。Bは、「Aくんが高い穴に落っこっちゃったんだ」と答えた。それを聞いた母親は、「小学四年にもなつて、変なことを言うわね。穴は、深い、深いのですよ」とたしなめた」。

Bは、穴の底から、助けてくれと手を伸ばして、悲痛な叫びをあげているAの感じ方を自分も実感していたのである。穴の上から眺めた深い穴なのではなく、気持の上では、Aと共に立っていたBにとって、穴は、高かつたのである。Bは、「Aが可哀想だよ」と泣いたのではない。何も手を貸さないで、あてもない、こうでもない、と理くつを言っていたのでもない（それでは、Aは、ますます混乱し、絶望してしまつただろう）。Bは、冷静に、しかし、必死の思いで、その高い穴からAをひっぱりあげたのであつた。

私は、この話を美しいと思う。人間関係はこうあつたら、と思うしかし、こうした共感的理解ができるようになるのは、至難な業である。好悪の情が激しく、批判力を鋭いまでに育くんできていた私は、カウンセリング研修には耐え得ぬ人間ではないかと、何度、断念しようと思つたろう。自分自身の枠組みというのは、自分の欲求不満、不安、自己防衛、先入観などの影響を強く受けているものであるから、それらを排除していくのは、並み大抵のことではない。又、人間は、自分の弱さ、欠陥、外傷経験などには、目をおおいたいもので、それに直面し、受容することは、これ又、難かしい。しかし受容してなければ、相手のそうした点にも、共感し得なくなつてしまふのである。

ところが、私が担当した、M君との一年半にわたるカウンセリングを通して、僅かながら、私は、この共感的理解を体得できたように思う。その過程を披露してみよう。

Mは、頭の良い、弁の立つ、高二男子。発校拒否症と心身症。父は、若いころからの苦勞で叩き上げられたといつた、ある宗教の強力な布教者。Mは幼少のころから、この父の感化を受け、父の説く「人は、こうあるべきもの」をとりいれて成長。しかし、自我がめざめるに従つて、父の説だけでは、「この墮落した」（彼の言葉による）世の中を生きられないことを、交友関係、またそれからの孤立によつて、感じつつある。払いのけるには、あまりにも、若い心に泌みこんでしまつた、正統派の父の人生観・人間観。その葛藤に、疲弊、混乱の状態にあつた。

「お父さんは言います……」を口癖に、毎回滔々（とうとう）と人生論をぶちまくり、友人や世間の人々の弱さ、みにくさを糾弾（きうたん）していた彼が、半年余りを経て、自分の弱さに気づいていく。その時の、激しい錯乱状態の中で、彼は、「父を殺したい！」と絶叫する。それは、新米カウンセラーの私を、たじろがせはしたが、思つた程、動揺はしなかった。彼との数ヶ月のかかり合いが、私の内部で、彼の心の動きを共にすることを可能にしていたのである。父親の、良いにつけ、悪いにつけ、過大な影響に対して、当然、発せられるべくして発せられた叫びであることが、私には、共感できたのであつた。

「あなたは、今、自分自身の力が、はちきれそうに、自分の内部から生まれてきたのね」と、私は、自然に言えた。父親からの独立欲求、自分独自の生き方をしたい——「強くあらねば人ではない」とMの弱さを認めようとしなかつた父の呪文から解き放たれて、

自分の弱さを認めるという強さを、数ヶ月のカウンセリングを通して培ってきたMの必然的な叫びであることが、私には、痛い程わかったのである。現実には父殺しという行動に移ることを肯定したり、是認したのではない。又、実際殺すのではないかと怖れて、世間なみの常識にもどって、「そんなことは、許されません」とあわてふためにも必要もなかった。Mが、自分自身の問題に直面し、自分がなっている重荷を自ら引き受けて、苦しい人格発展の道、独立への道を辿っていることに、深く深く共感したのである。「自分自身の力が湧いてきた時、それが治療力となる」とロロ・メイは述べているが、まさしく、この常識的には恐るべき発言こそ、Mの力が内部から湧きおこってきた証であったのである。

これとは対照的に、前号にも紹介した浜田氏は、一人の患者の、次のような話をしてくれた。父親への攻撃をむき出しにして動揺していた時、信頼していた教師から、「お父さんのいうことは、聞くんだよ」と言われ、がっくりとして混乱に入った分裂病の高校生がいたというのである。表面に現れることだけをとらえて、驚いたりあわてたり、世間なみの常識で判断したりしては、共感的理解は、不可能なのである。だからといって、彼が行動に移すことを、あるいは、やってしまった行動を肯定し是認するのでは、毛頭ない。その行動に先立つ、相手の主観的内面生活、そこから生まれる認知にこそ、光をあて、そこに共感していくのである。

自分の気持が、信頼できる相手に通ずるということを経験するにつれて、自分が心の中に経験しつづけることを、よりはっきり、より十分に感じとり、知ることができるようになり、その問題と対決できるようになる。彼は、今まで恐ろしくて認めることもできなかつた、そして、逃げまわっていた自分の現実を、共感されることによつて、安心して、みつめ、対処していくことができるようになる。その過程で、カウンセラーの嫌悪感、軽蔑、批判、無視などが働く、相手は、もはや、自由にのびのびと、自分を表現できなくなり、もとの穴ぐらの中に、身を固めながら退避してしまい、自分を阻害する現実で巻きこまれたまま、不健全な状態で、安住していく方向をとってしまうのである。

さて、ここまで読むに耐えてこられた読者は、どういうお気持ちでいられるであろうか。「いや、私には、そんなむづかしいつきあいではない。大体、私には、そんな激しい心の葛藤など、経験もないから」と言われるであろうか。実は、日常、平穩無事で、幸せな暮らしをしている方であっても、又、どんなに平凡な、ささやかな経験であっても、目をそらさずに、深く味わうことによつて、あなたは、多くの事象に、多くの人の心の悩みに、共感する資質を育くむことができるのである。「人間とは、生成する過程なのである」というキルケゴールの言葉が真実であるとするならば、一人でも多くの生徒の、ありのままの生きざまに共感的理解を示していく努力は、私共、教師が、人として生長していくためにも必要なことではなからうか。クインという心理学者の言葉によれば「理解するとは、本質的には、理解しようとする態度である」。

（東京都立小金井北高等学校）

注1 『現代のエスプリ』No.172 P.97 坂本昇一氏の引用による  
〈参考文献〉 ロロ・メイ『失われし自我をもとめて』誠信書房  
ロジャーズ全集第16巻『カウンセリングの訓練』岩崎学術出版社  
水島恵一『カウセリング入門』大日本図書



## 〈人間存在としての「自立」〉

長谷川 孝

《澄む空へただ置くだけの手足かな》

この一句にひかれて、この俳句の作者の句集を買い求めた。『本間たかし句集 山谷おんぼの塔』である。本間たかしという人は、三十代後半に妻子、友人知己を捨て、八年間の放浪のあと東京の山谷に住みつき、「日雇い」という不安定な生活のなかから、生きることを探り、生活のあるがままを、俳句に書きつづけた」（同句集の解説）という。一九八一年六月に六十八歳で亡くなった。

「山谷の俳人」といわれたという本間たかしさんに、私は会ったことはない。しかし、その俳句を読みながら、この人に人間としての「自立」を感じてしかたがなかった。いわゆる意味で「経済（収入）的に」も「生活的に」も、「自立」というイメージは、この人になじまないかもしれない。だが私には、「自立」した人間存在が思い浮かぶ。すごい「自立」だという気がする。

この「自立」感が、私自身には乏しい。男も家事をやれといわれてオタオタし、同じ口から妻子を養うのは男の責任だといわれて黙りこくりながらも、衣食住にかくべつ困窮するでもなく、ともかく「家を構え」て暮らしている。低賃金とはいえ、いちおうは「経済的に自立」しているということになるのだろう。「生活的な自立」のほうは、「自立していない男」の典型のようにいわれたりするが、じつはそれほど気にはしていない。「生活的な自立」についての、

私なりの考え方があるからだ。だが、人間存在としての「自立」には、飢餓感に近いものを禁じえない。

本誌創刊号の「男たちよー」で、宮淑子さんが、『「生活的に」ひとり歩きできない男と、『経済的に」ひとり歩きできない女』と構図化し、「ひとり歩きした男と女」は「依存することも依存されることもない」と述べている。私は、人間とはお互いに依存し合って（相依相関）いるもので、相依相関に気づいたときに人間存在として「自立」できるものだ、と思っている。関係の自覚ともいえようが、いまはそのことはさておいて、ここでは世間的な「自立」と「依存」の構造を考えておきたい。

いうところの「生活」とか「経済」とは、一体、どのような世間的現実だろうか。私たちの「生活」も「経済」も、実は近代主義と産業化のくびきの下につながれている、とは、すでに多く指摘されている。さらに、学ぶという行為も「生活」の内実として私はとらえているのだが、〈学び〉もまた近代学校教育制度（と、その産業化した教育―学習システム）に従属させられている。

女も男も、そして子どもたちはなおさら、人間存在としての「自立」を奪われている（だからその世間的体制や常識に「依存」しなければ、経済的にも「生活」的にも自立できなくなっている）、と私は思う。「自立」と「依存」が対立概念になる現実こそ、私たち

の疎外された状況なのではなからうか。

要するに、私たちの世間的な「自立」とは、板子一枚下は地獄なのだ。男が「生活的自立」をできない世の中では、女もまだ本質的に「生活的自立」をできないし、女が「経済的自立」をできない世の中では、男もまた「経済的自立」ができない、といえよう。なぜなら、自前の<sup>オウジナル</sup>へはたらくこととへくらすこととへまなぶことと——つまり、生きることのオリジナリティ——を奪われている、状況をみるからである。生活も経済も学ぶ行為も、他律への「依存」によつてのみ、「自立」したと思える仕組みがあり、そのなかに私たちがいる、ということだ。

私自身のことに話をもとせば、「妻子を養う責任」なるものの「重圧」下で、企業従業員たる立場にぶら下がり、「経済的に自立」しているかのごとき私自身の状況が、「生活的な自立」を欠いているのだ。入社した直後から、企業の従業員であることに、なにかへんだ、と異和感を抱きつつ、生活の根拠をそこにしか見出せない不甲斐なさ、とでもいおうか。

（内山節著『『存在からの哲学』毎日新聞社、『戦後日本労働過程』三一書房』をぜひお読みいただきたい、これまで述べた私の考えの背景がくわしく展開されている）

自らの労働をつくり出す主体としての人間存在を失った教師たちと、〈学び〉の主体としての自己の人間存在を奪われた生徒たち——千葉県の流山中央高校の校長の自殺をめぐる話を聞きながら、私はそう思った。教師の労働も生徒の学習もへくらしから遊離して、学校制度に身を寄せているから教育労働をし学習活動をしている、という擬制が成り立っている、といえるように感じたのだ。

さらに印象で述べれば、どうも、学校制度のなかの「被差別」の位置にこの高校があり、そこにいる教師と生徒は、分断され協働性をつくり出しえず、教師は転勤希望で逃げ出そうとし、生徒は輪切り選別の悲哀のなかに閉塞しているような気がする。生徒たちは「荒れ」、教師たちは管理的な生徒指導にはしり、教育行政は生徒指導（管理）がなまぬるいと断を下す。そして、なんとも乱暴と思える生徒処分（退学）。

差別される者が、差別の構造とたたかかわずに、この高校がかかえる問題は、解決しないのだらうに。人間の本来の行為としての〈労働〉と〈学び〉を奪い返し、自己の人間存在を実現していく、差別とのたたかいである。教育労働もふくめて、労働が産業的な生産にかかわりながら、創造性（モノをつくり、かつ自らをつくる）を失っている。それは、なんのために（なぜ）、なにを、どのように、といった問いを失った行為である。教育労働も、この問いを教育制度—システムに預けてしまい、学ぶものからこの問いを奪ってしまうように機能しているのである。

『野焼して明日へ始動の根を残す』

本間さんの句になぞれば、私たちはいま、なにを野焼したらいいのだらうか。現実にはむしろ、なんだか「根」をふみつぶしているような気がしてならない。

「労働力の消耗」にすぎない労働による「経済的な自立」と、商品の消費を内容とする「生活的自立」——そこには、人間存在の「自立」がない。人間存在の「根」を、へはたらくこととへくらすこととへまなぶことと——生活のなかに養うような「野焼」をした

（教育評論家）



(3)

共修の家庭科を学んだ  
男女の高校生、卒業を前に  
「さよなら、家庭科」の題で  
思い思いのことを残した。  
男子高校生の発言を聞こう。

へ発言を分類すると

①家庭科やってよかった  
楽しかった。特に調理  
実習が

26

②実習以外にもとても役  
立った

24

③男の家庭科について

●肯定

驚き・否定・肯定

31

●まあ、よかった

6

●反発、疑問

12

①Say good by my「家庭科」

もうこれで家庭科などというのはやらない  
でしょう。社会に出ればいろいろあつて……。  
今思えば自由課題であつた「焼うどん」「ぶた  
まん」「三色丼」「ビビンバ」それと昔作つた  
「しゃけ茶づけ」すべてでなつかしい思い出です。  
「なんで高校になつて家庭科があるねん」と  
一年の時思いましたが、いやや、いややと言  
いながら、右手に庖丁、左手にしゃけを持っ  
ていたことは忘れないでしょう。(I・N)

◇

家庭科、それは小学校から始まつた。小学  
校・中学校(市内唯一の共修校)では被服な

どという楽しくないものがあつた。しかし、  
高校になると、調理があつて非常に楽しかつ  
た。僕はおやつがわりに家で作つたりした事  
もある。やっぱり小・中学校で習つたものよ  
りも、高校へ来てから習つたほうが実用性が  
ある。だから大学へ行つて、家庭科というも  
のがなくなつても、家庭で母に聞きながらで  
も少しでも料理をしようと思う。父からは魚  
の料理が聞けるし、家にいろんな資料がある  
ので、これからも続けていきたいと思う。

家庭科バンザイ!!

(N・Y)

◇

家庭科を一年と三年で習つて、最もよかつ

たのは実習だった。みんなで作つた物は、ま  
ずかつたけどとてもおいしかった。これから  
はこんなことはほとんどなくなると言うけど  
とてもいい思い出として残っています。これ  
からも「家庭科」をなくさないで下さい。  
(N・K)

◇

②中学・高校と家庭科を習つたが「家庭科」  
はとても生活に役立っている。料理なんか作  
らなかつた僕でも「家庭科」を習つてから作  
るようになった。卒業してしまえば「家庭  
科」は習わないが、これからも中学・高校の  
時を思い出して作れるだろうと思う。「家庭  
科」がいろんな教科の中で一番生活に役立つ  
と思う。「家庭科」はよい勉強になった。

(I・Y)

◇

調理実習で作つた物は、あまりおいしくな  
かつたけど、日頃いっこもしゃべらん子なん  
かと、一緒になつて作つてたらおもしろかつ  
た。卒業して一人で住んだら、実習で習つた  
ことなどを、思い出して、自分でごはん作る  
わあ。  
(N・K)

◇

さよなら家庭科、いろいろ役に立つと思ひ

ます。楽しかった実習、あんなしとおもしろなかつた授業。自分で作り、食べ、とてもいい授業だった。これからも役立つと思います。この一年、ほんとに男として家庭科の楽しさを味わいました。

さよなら 家庭科 (I・T)

③楽しい授業だった。ノートを大切に残しておこうと思う。いつか家で作ろうと思う。一年・三年と色々勉強になった。他の学校では男子に家庭科はないし、西成高校があるのはちよつと恥ずかしかった。でも今は違う。楽しかった。友達にも胸をはって言える。

Larger by Kateika I (家庭科によって、ひとまわり大きく成長した) (Y・S)

正直いって、あまり家庭科は好きじゃなかつた。それは、家庭科というものは女だけやつとれば良いという考え方をぼく自身が持っていたからだ。しかし、ぼくはこの学校を卒業したら、会社の寮へ入る。すなわち一人ぐらしをしなければならぬわけだが、家庭科が役立つと思う。やはり勉強というものは、やつておいて損はないものだ。 (M・Y)

高校に入つて家庭科があると聞いた時驚きました。中学の時は、女子は家庭科をしていただけで、男子は技術をしていたからです。しかし、先生の授業でもよく言っているように男も女も同じ権利を持っていて、社会でも同等であるべきなのだから、男も女も同じように家庭科を学ぶのは当たり前だと気づきました。この家庭科で習ったことを、これからの生活の中で生かしたいと思います。 (O・H)

西成に入つて家庭科があると聞いて、何という学校だ、と思った。でも、実際やつてみると、色々な事を含めて、男女を問わずどの学校でも家庭科をやるべきだと思った。それは、今の現状では女性が家庭の中をやっている。男性もやつては？ という気持ちになつたからです。調理実習も、やつてみるとおもしろく、特に三年での実習は、一年の頃に比べて数段うまかつた。家庭科を受け入れたのは、この学校に来たからよかつた、と思つている。家庭科を教えていただき、ありがとさんです。 (O・M)

……小学校の時のように、ぞうきんをぬつたり、料理を作らなければならないんだなあ

と思い、少しいやな氣になつた。それが授業に入ると、ぞうきんや料理をすることだけが家庭科の授業じゃなくて、家庭における夫婦の問題、子供の問題、男と女の問題など、今まで私のあまり知らなかつた問題が、授業を聞いていて大変よくわかつた。これからの社会は、男も女も互いに協力し合つて、りつぱな社会にすべきだと思う。 (O・M)

僕は家庭科は男子に必要なと思つていたが、勉強しているうちに、差別とかいろいろな問題が出てきて、やつぱり家庭科は、男女を問わず、勉強するものだと思つた。 (M・A)

小学校の時は、男女共家庭科はあつたが、中学校に入つてからは、男は家庭科なんかやらなかつた。そしてこの学校に入つて「男も家庭科あんねんて」と聞いた時、僕は驚いた。他の学校では男が家庭科やつてるところなんかない。この学校だけ。なんで男が家庭科なんかしやなあかんねんと思つた。 (O・S)

ぼくは家庭科の授業はあまり好きでなかつた。それはなぜかというと、わざわざ授業の

科目までに家庭科を入れる必要はないと思っただからだ。家庭科というのは女の子がやるのが本場で、男は体育でもやったほうがいいと思う。

家庭科の授業でおもしろかったことといえば、実習の時間だけだった。実習以外はなにをやっているのかさっぱりわからなかった。

テストもどこから出るかわからないし、あまり好きでなかった。しかし、もう家庭科の授業をやらなくてすむと思うとほっとする。

とが、ほんとうに役立つのかなと思っていたことがあります。今の消費者の問題についても、ぼくら男にはなんの意味がありません。こういったことは何の価値もないし、男子にどういったこともないんだからやめたほうがいいと思う。

(I・N) (I・K)  
(大阪府立西成高等学校の男子生徒たち)

## 明日の 家庭科教師たち

### 私が受けた家庭科、私がしたい家庭科

真道 佳子

「早く、早く！ 次は家庭科なんだから、早く行かないと良い席とられちゃうよ」。

毎時間が移動教室であつた私の高校生活の一コマ。学生カバンの中に裁縫箱をつめ込み、大テーブルが並ぶ裁縫室へ、席順が決まっていなのを幸いに、何とか先生の目をごまかせる窓ぎわの後ろの席を確保するために走っていく。机の上には、作りかけのジャンパースカートとしつけ糸を出し、ひざの上には英語の教科書を広げる。授業中の私は、ほとんどうつむきかげん。たまに思い出したように、まち針としつけ糸を動かす。隣をみると、布をひざに抱いたままウトウトと……。全くのどかな初夏の昼下がり。

これが私の平均的な家庭科の授業の態度であつた。この他、記憶にあるのは、ワイワイと騒ぎながら行つた調理実習と、保育の単元

で見た幼児の行動に関するスライドだけである。それも、痛烈な印象は全くなく、ただ、そういう授業があつた、という程度のものである。だからもちろん、食物や住居の講義など何一つ覚えていない。私の知識の源となつているのは、理科であり、社会であり、それらの理論によつてテストペーパーの空欄は埋められただけであつた。家庭科本来の生活という基盤などとの相互の結びつきは、私にはとても持てなかつたし、興味もわかなかつた。

その証拠に、私がホームプロジェクトで取り上げた問題は、机のひき出しの中の整理の仕方と、押入れの収納の仕方であり、それも新聞広告に出ているような収納セットを組み合わせただけのものである。まさに、戦前と同じような家事と裁縫しか思い出すことができない家庭科の授業であつた気がする。一年で食物、その実践が調理実習、二年で被服、その実践がジャンパースカートの製作、家族



や家庭生活という最も生活の上で基盤となるものについては学んだ覚えはない。

確かに、私にとって家庭科とは軽視の科目であり、内職と息ぬきの良い時間であった。しかし、一つぐらい痛烈な思い出が残っていても良さそうだと思っている。たとえば、食物や被服や保育などに直接関係したものでなくとも、先生の体験談であっても、冗談であっても、印象深く残っているものがあっても——。それが何もないのである。現国の時間に先生がふと口ずさんだ詩をいまだに覚えていたり、文法や熟語など忘れてしまった今、英語の副読本の写真は覚えていいる。

そういう私の生活の中に入り込んでいる思い出が、家庭科という最も生活と密着したものにないのを、さびしく思う。ましてや、私自身興味少なく家庭科の授業を受けていたから、そうなのかもしれないが、このような生徒がほとんどであるクラスを教えていた教師は、毎時間、生徒のたいした反応もない授業を行っていて、何も感じなかったのだろうか。私は今、高校時代の自分の家庭科に対する態度を省みるとともに、それ以上にこのような授業を平気で行っていた教師に疑問を感じずにいられない。

なぜなら、二週間という短い教育実習期間であったが、私は初めて教師という立場に立って、生徒の反応のすごさを身にしみて感じたからである。教師の至らなさは、すべて生徒の態度として再び教師に返ってくる。ごまかしは決してできない、ということを感じたからだ。そのことでどんなにか私はショックを受けたことか。だからこそ、私の受けてきた家庭科教育をふり返る時、何の印象もない授業にわびしさを感じるのである。

確かに、調理や裁縫は基本的なことであり、人間が生きていくためには必須のものであるから、知識として身につけていなければならない。しかし、それを単に講義していたのでは知育の偏重にしかならないのではないだろうか。いかに生徒に興味づけ、乗り出してくるように行うかが、軽視されがちな家庭科には特に大切であり、かつ、他の学科と内容的に重複せざるを得ない教科なのだから、生徒に家庭科という特殊性・独自性を示すことが必要だと思う。そのためには、単に自己の家庭という中にとらわれずに、社会という広い範囲から生活をとらえ、科学的・社会的なものを総合して生徒に興味づけていくことが必要であり、一つのことを固定せずに、種々の方向から結びつきを考えてこそ、初めて実生活・実社会の中からの問題意識というものが生徒に持たれるのではないだろうか。



私はそれを教育実習先の高校で、最初に参観した家庭科の授業においてはっきりと実感し、また、自ら行った授業においても確かめられたように思われる。

まず、私が参観した授業であるが、教室の雰囲気が何か違っていた。あの家庭科の授業にある独特のシラケというか無関心さといったものがないのである。そして、ところどころで生徒たちがハッと乗り出し、教室中が一つの共通した目で満たされるのである。特別ノートを熱心にとっているのでもなく、私語も少々ある。それなのに生徒たちは何かに引きつけられながら授業を受けている。ハッとさせられるものがあるのである。

その原因に私が気づいたのは、授業も後半になった時であった。教科書とか、個人の生活という範囲にとらわれずに、テレビ、新聞、

新刊書、統計資料といったあらゆる分野から授業の単元が問われているのである。しかも、難しい言葉は使わず、そうかと言ってありきたりなものではなく、常に生きていくために真剣に考えねばならないということを生徒につきつけているのである。だから、生徒たちは、表面的には教科書をベースにしている授業の進行であるが、その中でふと教師が出す話題にのめりこみ、それが生徒自らの中で興味となり、問題意識となっていくらしいのである。

私がそのことをよりはつきりと認識したのは、自分が教師として教壇に立った時であった。食物分野の卵の単元において、栄養、調理科学的特徴をひととおり教科書通りにすませた後、鶏卵産業の現状の写真をみせた。人工的に朝と夜を造るウインドレスの中に、鶏がラッシュアワーのごとくつめこまれ、ベルトコンベアーで流れてくるえさをついばんでいる。これを見た時の生徒のものすごい驚きは、私が予想していた以上のものであった。

「先生、鶏はこんなにもして卵を産まされているんですか？　かわいそう」。そんな言葉があちこちから聞こえてきた。また、魚介類の分野で二〇〇カイリ問題をとりあげ、海図をOHPを使って見せ、魚ころがしの新聞記事を読んだ時も、生徒たちは前へ身を乗り出し、スクリーンを見ていた。

たぶん生徒たちは、卵の特性やレシチン、卵黄係数などという言葉は忘れ、魚にはリジンが多いから、米を主食とする日本人にはパランスがとれる、などと私が講義のために一生懸命覚えた知識は、三日と頭に残ってはいないだろう。しかし、零細な鶏卵産業、鶏の不自然さ、魚が消費者の手に届くまでの悪徳商法ぶりは、かなり痛烈に頭にこびりついているのではないだろうか。少なくとも、私の

最後の授業が終わった時、感想を述べるに教壇へかけよってきてくれた十数人の生徒たちの脳裏には、何か印象に残ったものがあつたと私は確信している。

被服の分野でもそれは言える。個性とデザインの単元で、私は二十枚近くOHPのシートを作った。教科書や資料集のデザイン画は見あきっている。むしろ、生徒たちの方がはるかに流行を追った素敵なデザインを描けるのだ。ただ、それをファッション雑誌化してしまつては、教育にはならない。いかに基礎を生徒に興味深く、関心深く教えるかが問題である。そこで私は幸いにして、OHPの教具が充実していることを利用して、視覚から生徒をひきつけようと、少々幼稚ではあるが、着せかえ人形的なことをやってみた。OHPは黒板と違って、シートを重ねることができるので、思つてもみなかったほど利用効果は上がるものである。確かに生徒は画面にくぎづけにされたままであつた。無駄口を言っている生徒が一人もいなかったということは、少なからず私の努力は報われたのではないだろうか。



ただし、ここで考えなければならないことは、生徒に印象づけ、生徒にうける、授業ばかりを追求しても、それは教育にはなりはしないということである。授業は漫談でもなく、映画観賞でもないのである。少なくとも、生徒に問題意識を持たせる題材を教科書をベースにした上で選択し、教材研究をする必要がある。しかも、教師と生徒の興味が一致すればこそ、それは初めて教材としての価値が出てくるのである。それには教師がより広い視野と知識を持つていなければならぬし、そういう能力を養っていくことによって、社会の

状況と家庭科というものの結びつきが、いつそう明らかに、戦前以来の裁縫や家事中心の家庭科というものは、必然的に改革されていかざるを得なくなるだろうと私は思う。

特に、生産第一主義の高度経済成長の下で生活が軽視されている現在、生活を科学的・社会的にとらえ、家庭生活についての原理や法則を学ぶ意義は大きいと思う。その源となるのが、まさに家庭科である。だから、理論や実践に社会的な問題をプラスしてこそ現代に生きる人間にとって、改めて生活との結びつきが理解できるのではないだろうか。

従って、このような内容を含んだ家庭科というものは、単に家事を行う女子ばかりではなく、男子にも必要な知識であることは当然であり、男女共修が叫ばれていることは、あたり前のことだと思う。すでに家庭科は家庭経営という分野のみに固執するのではなく、社会参加という、もう一步脱出したものを含んだ教育となっていくなくてはならないだろう。そうしてこそ、この複雑な生活構造の中で、家庭が合理的に運営されていくのではないだろうか。

そして、もう一つ私が述べておきたいことは、この広い視野と展望を必要とした家庭科教育が、人間的な教育、例えば、家族愛という精神的なもの、商社と消費者との立場のちがいないといった判断力の養成なども含んでいるということである。社会的に広い範囲から生活をとらえればとらえるほど、すべてが商品化されている資本主義という現代社会においては、物ばかりが先行してきて、それにかかわる人間相互の関係や、人間の感情とか思考・判断力は忘れがちになる。それを指摘するのも、家庭科教育の一つの役割ではないかと思うのである。

今、私は長野県の高校の教員試験の発表待ちである。結果はどうであるかわからないが、もし教師になったら、今まで私が述べてきたような家庭科教育の理想像を貫きたいと思っている。もちろん、現場において、そうスムーズに私の主張が通るはずはないし、種々の意味において、圧力がかかることもあるだろう。しかし、そういったものに流されずに、また、知らない間にのまれていることのないように、私は私なりの考えで努力していきたいと思っている。そして、もし教職につけなくとも、私が学んだ家庭科のあるべき姿というものは、私自身と社会との結びつきの中で生かされるものだと思うし、生かさねばならないと思っている。

教育すべてが知育に偏重しすぎていると言われ、家庭科は技能教科だと見られている現在、物事の本質を的確に理解しているのではなく、知識として多くの事柄を知っているだけでは、学習内容の基礎・基本をしっかり体得し、自ら考え、正しく判断する力を身に付けたことにはならない。ましてや、家庭科教育においては、それが生活、そして社会というものと結びついてこそ、初めて本質が浮き出てくるのである。開拓すればするほど開けていく教科である。それなりに問題は多いが、私はもっともっと開拓していきたいと思っている。そして今、つくづく思うことは、家庭科ほどすばらしい教科はなく、これほど人間本来の教育に接近しているものはない、ということである。

(日本女子大学学生、一九八一年九月記)  
真道さんは、希望通り今春から長野県立高  
校の家庭科教師になりました。(編集部)

親も言いたい

## 学校へいつ行けるの

金井 律子

ご存知の方々もいらっしゃるかもしれませんが、長男、康治（十三歳）の養護学校から地域の普通学校への転校運動は六年越しになってしまいました。なぜ転校させたいの？なぜ実現出来ないの？方法がまずかったんでしょ！障害の程度が軽かったらね！とたくさん質問や意見がありました。私たちの運動の経過や養護学校義務化はさんでの問題点は、報告集及び写真集では非多くの方々に読みいただきたいと願います。

私は、康治がお腹にいる時、子供って五体満足で産まれて、すくすく育つものと思っていました。出産前に、一生懸命育児書を読み、母親になるための予備知識をつめこんでおりました。逆子で育っている子供に一抹の不安を抱きながら……。予定日を過ぎても陣痛はなかなかきません。いざ、出産。赤ん坊は仮死状態で産まれてきました。もしや、あの育児書の「脳性マヒになる危険性あり……」では……。どうやって育てていこうか？なんで私の子供が……。悲しく、とめどもなく涙の出るベッド生活でした。

やがて通園施設や病院へ通い出し、四〇歳の我が子を年老いた母親が背負っている姿を見た時など、胸がつまり、思わず目をそらしてしまいました。他人事でなく、本当にどうやって育てていけばいいのか不安だらけでした。そして、治療や訓練を一生懸命やって、なんとか克服していこうと、私たちの生活費のすべてを治療費にあててきました。

しかし、この考え方が崩れてきました。兄弟、近所の友達と一緒にいる時の康治、家庭の中での子供たち、そして、自分自身を振り返った時、どこか違うなと漠然と気づきました。子供たちを分けないで同じように育ててきたつもりだったのに、康治には、訓練をさせたり、養護学校で特別な教育を受けさせていること。何かが出来ようになるってうれしいと思っていたのは、康治より私の方であったということ。子供が何か出来るようになるには、いろんなことを見たり、聞いたり、試したり、回りの人たちがやってくれることを真似しながら成長していくにもかかわらず、なぜ特別な所で考えたのか？ひとりの子供の日常生活は丸ごとのもので、バラバラには考えられないはずだったのに……。

この運動を起こす時仲間から「これはえらいことになるよ、金井さん。十年戦争だゾ！」「そんなにかる問題ですか」と、話したことがあります。私にしてみれば、学校には、三〇人以上も先生がいれば、誰かひとりぐらいはわかつてもらえるだろう。一週間位学校へ通えば、なんとかなるのではと、軽い気持ちでいました。

教育行政も組合も何もわからず。こわさ知らずで「なんで学校へ入れてくれないのですか？」と私自身の気持ちぶつけていったのです。が、残念ながらというより当然だったのでしょう、幾重にも重なる厚い壁にぶつかりました。康治と同年齢の子供を持つ親との地域での日常会話は全く持てませんでした。養護学校へ通っている

ことで、子供同士の共通話題すら親も奪われていたのです。地域で同じように家庭生活を送っている、家族も別々に見られていたのです。もし、隣り近所と本物の付き合いが出来たのなら、きっと「一緒に学校へ通いましょう！」と声をかけてくれたでしょう。

運動の進め方とか方法ではなく、現に「養護学校へ行けるだけ恵まれている」「康治君は花畑東小の児童ではない」という意見に拍手喝采が起こります。でも、私も康治がいなかったら同じようにしてたのかもしれないと、恐ろしくなります。それが、康治を通して、たくさん障害者の人たちと出会い、その人たちの生きてきた過程を聞くことによって、私の価値感が変わってきました。今でも、康治と一緒に生活をしているからなんとか今の自分が維持されていると思います。自分の弱さを指摘されながらの毎日です。

この原稿は、第三回全国斗争の現場で書いています。全国の仲間と共に闘わなければ行政が動かない悲しい現実。闘いの中でしか一歩ずつの前進もあり得ない差別。どうぶつけていったらよいやら……焦りさえ感じます。それに対して行政は、80年、81年と、庁舎前に黒光りした鉄柵をはりめぐらし、ガードマンと職員で私たちの前に立ちはだかったのです。今年は鉄柵こそないものの、人間鉄柵としてガードマンが体でぶつかってきてます。

学校には「私は、養護学校の子供を知っている。身体障害者が養護学校へ入れるだけでも恵まれているのに、どうして差別なのですか」「金井さんのためにある学校ではないんです。私たちの子供のためにある学校なんですよ」という発言に、拍手とヤジで父親をつるし上げる悲しい現実がありました。これらの発言は、「身体障害者」には学校、教育、労働、なにもかも必要ないと考え、健康な人

間よりも、一段価値が低いと見ているからです。私の価値感が変わったのは子供を通してです。同じ人間として、人々には情熱も涙も感情もある。だからこそ、「別な教育」でなく、「みんなと一緒に、兄弟や近所の友達と共に学びあえる教育や場」が欲しいのです。けれども、反対する人たちからは「親のエゴ」の一言で片付けられてしまいます。

現在の社会状況の中で、ひとりひとりの人間が、制度、管理、常識で心がズタズタに引きさかれ、自分が何をしているかも見えないようにさせられている中では、個人を責めるわけにはいかないでしょう。しかし子供は、教師や大人の動きをよく見えています。教師が、言っていることと、やっつてことの違いに気がつく子供こそ、正直に生きていくと私は思うのです。その現れに対して登校拒否や非行、暴走族とレッテルを貼られていると思うのです。彼らの行動は、教師や親に対する、鋭い突きつけです。私は、むしろ彼らに拍手を送りたいし、仲間の一人になりたいと思っています。

康治を通して、私の生き方も問われながら三人の息子たちとあくせく毎日を送っています。「障害児」がクラスにいることによって、しなやかな子供が育っていくでしょうに、教師は、構えてしまうから疲れるのでしょうか。少しの時間でも、ちょっと付合ってもらえれば、「問題はない」ことがおわかりでしょう。多くの方々に共に考えていただきたいと思います。

#### 〈資料〉

「怒りが鉄柵をつきぬけた」「みんなと一緒に学校へ」（実行委パンフ）『康チャンの空』（写真集）

〈連絡先〉東京都足立区花畑五十八―五四―一〇五、金井律子

市民として

「盲導犬はいや」

北村 小夜

初めて盲導犬と歩く人をみた時、息をのんだ。これが自立した視覚障害者の姿であろうかと思った。ところが私の友人日比野繁子さんは、視覚障害者であるが、盲導犬はいやだという。あんなに犬権を無視したつきあいを犬とするのはいやだからだという。彼女はいくつもの運動に参加しているので、出歩くことも多い。家族のつきそいが無い時、彼女は会議や集会がおわると、隣にいる私（あるいは他の友人）に、「送ってくださる？」ときく。私はその度に思う。犬よりましな隣人でありたい。障害者にとつての自立とは、むしろこのような関係をまわりと持ち得ることではないだろうか。このような迷惑のかけあいを障害者自身が拒んだとき、盲導犬は便利であろう。また私たちが隣人たり得ない時、盲導犬が必要になるのである。

世の中には、その身にならなければわからないことがたくさんある。その身になってもわからないこともたくさんあるが。

私が十数年前、特殊学級の担任になったのは、遅れた子どもたちに、ていねいな教育をしたいと思つてのことであつた。何という思いあがりであつたらうか。なつてみて始めてそこにいる子どもたちが、ほんとうはききたくなかつたのだということを知つた。——考えてみれば、勉強が遅れているからとか、障害があるからといつて地域から排除されてきたのだから当然のことであるが。彼らは普通学

級との交流を、「いっしょがいいんだったら、なぜわけた？」といつて拒んだ。私は「交流」が、普通学級と特殊学級の子どもたちの間の壁を除くものではなく、ハンディを負つた子どもたちに「分際をわきまえることを強要する」ものであることを知らされた。以来私は、統合でも、共同でも、交流でもなく、わけないことをめざしているつもりである。

「かわいそうなぞう」という子どもむけの物語がある。太平洋戦争末期、本土への空襲が広がるにつれて、上野動物園では、おりがこわされ猛獣が街に出ることを怖れて、動物を殺すことになつた。その象を殺す話である。私自身釈然としないものをしながら、戦争を語りたい一心で、読みきかせ教材にとりあげた。全面的に納得していなくても、象が殺される場面になると、私の声はつまってくる。そんな私にその子たちはいった。「動物園につれてきたのはかわいそうじゃないの」と。捕えられて、風土の違うところにつれてこられ、狭いおりの中で飼育されることがかわいそうでないはずはない。ほんとに力の強いものは勝手である。

そんな子どもたちも三年たてば中学を卒業する。彼らもできることならシャバで過ごしたいと願う。私は彼らとつきあい続けているわけだが、就職にしろ、進学にしろ、シャバで生き続けられるかどうかは、本人の仕事ができるかどうか、あるいは勉強についていけるかどうかより、隣に「いいじゃないの、いっしょにやっていこう

よ」という友人をもち得るかどうにかかっていることが多い。それが、彼らの多くがかつて地域の学校でそんな友人をもち得ず特殊学級へ逃避してきて、その後の学校生活を孤立した場所ですべて送っているのだから、非常に困難な場合が多い。しかし、それは本人の

問題というより、むしろ彼らをかこむ人々の問題である。そのことは、ひいては、私が、どんなに能率の悪い人、かわった人ともいっしょにやっていけるかという課題でもある。

## いんちきは！

### 〈むかい風〉

「昨年の国際障害者年でわたしは何をやったのだろう」という思いがくすぶっていた。

「We」支援の話し合いやチラシ発送作業には、常に車イスの栗原さんの姿があり、「自分ができることをやります」と心強い支援をしていただいていた。

79年の車イス全国集会で初めて「女性障害者問題分科会」が設置され、それを受けついで翌年「むかい風」が二人の参加で誕生した。

栗原さんをお願いしてむかい風の例会に参加したのは、そんな思いがあったからだ。

初めて参加した三月例会の帰路、栗原さんがタクシーに乗るといので、タクシーを止めに駆け出していくと、仲間が後から大声で「やたらにとめてはダメ」と叫んだ。車イスを乗せるタクシー会社が限られていることを

知らないわたしは戸惑った。

今日、四月の例会には車イスの人が三人、歩けるが足の少し不自由な二人、介助者三人が出席し、昨年の反省が話し合われた。

サッチャン(車イス)「むかい風で話し合われたことが、生活にもちかえてどれだけ役立っていたか気になる」「わたしは、トイレやお小遣いのことで、一日のお金の使い方にも考えることができた」「地域の中の動きの話し合いが少ない」

モトコさん(同)「地域の中で作っている会には、いい子ぶってる障害者とボランティアで本音が出ていない。本音を言いたいんだけど、本音を言えばボランアィアが離れてしまうとと思うと言えない」「障害者に対し、障害者を持たない人がいかに何も言わないかを感じる」文江さん(同)「結婚にあこがれていた。施設を出たいために結婚したかったのかもしれない。わたしの結婚観で皆にいろいろ言われた時、頭に来て泣きたかったけれど心の

ワンステップになったと思う」

障害者を持つ女たちは、それぞれ本音の部分で語り合えたといっているが、介助の人たちは「自分がどのくらい本音で語っていたか疑問だ」「抑圧・差別を受けているという部分で健常者の女と障害者の女が何かつながるところがあると思ったが、それぞれの生活パターンが強すぎて難しくなっている」という。

時の流れに身をゆだね、ゆったりとした仕種の彼女らと共にいると、まるで一分一秒でも早く、と駆け出していく自分が見えてくる。話をする時も、次の行動に移る時も実にゆっくりと体勢をかえていく。しかし、その何気ない行為にも全神経を集中していた。トイレも、車イス用トイレで前の人が終える時間を入れると三〇分はかかる。

二度の例会に参加した今、駆け出していくわたしを呼びとめる何かを感じる。

(馬場洋子)

## 教師のつぶやき

## 教師をやめた日

武田 秀夫

死んだ武田泰淳に「学士諸君へ」という短文がある。一九六五年五月号の『展望』の「展望欄」に載った文章だが、教師をしている間それを幾度も私は読み返した。

「私は、何ということなしに、『大学』なるものの価値や効用を知らないまま『中退』した」と一見おだやかにじまった文章が、小学一年、まだ泳げないのに連れられて行った佃島の濁った海水にふるえてつかっている泰淳の腹のあたりに「西瓜の皮、かんなくず、紙くず、セルロイド製品、もっと汚い物や流されたオヒナ様まで色あざやかに浮んで」寄りあつまってきて、「おまけに何かの虫がチクタクと脚を刺す。そんな具合にして学士の皮や学士のくずが、私の身のまわりギッシリとりかこんでいるわけではない」というあたりから怪しい気配をはらんできて、とうとう、「お世辞でないが、まあお花畑で花の香がムッとたちこめるようにして、彼らが花咲いている。咲きすぎるくらいに、おっぴらいっている」と、泰淳節朗演のベルが鳴り響く。

と思う間もなく、「野間宏も福田恆存も、学士だなあ」から始まって、「日高六郎も江藤淳も学士だなあ。丸山真男も猪木正道も学士だなあ」と二十数名の名前をあげて行き、「右も左も、学士がしばい居るなあ。よくもよくも、つながってあらわれ出ているなあ。

論ズルにはガクが要るからなあ。学士のアタマにはガクが詰っているだろうからなあ」ということになり、挙句、「みなさまが生きていて下さるおかげで、ほんとに助かりますねえ。みちびいて下さる方々がいらっしゃる。理くつをつけて下さる、叱って下さる、けしかけて下さる、裁いて下さる、沈思黙考して下さる。ああ、ありがたいことです」と毒舌を吐く。

まだまだ続くのだが、いつ読んでも新鮮なクダの巻き方である。その絶妙な呼吸は原文を読んでいただく他はない。

そうした怪気炎がのぼりつめだけのぼりつめた最後、この「学士諸君へ」は、ぐつとドスをきかせて終わる。

「モスクワの冬空に城塞の如くそびえ立つ、あらゆる大寺院より巨大な大モスクワ大学の大建築を仰いだとき、私は一種の疲れを感じた」。

「……だが、そのような疲れを感じさせる、『学の権威』、平等に分配されることのできない学の特権性が少しでも、一センチ一ミリでも存在するかぎり、人間は平等になれそうもない」。

「……しかしながら、もしもガクが人間と人間とをへだてる見えざる壁となるようだったら、そのガクはやがて大いなる、もつと底深い見えざる神秘の『手』によって、かき消えさせてもらわなければならない」。

わずか三ページにも満たないこの文章の奇妙な魅力にひかれ、茶



色に変色した『展望』のページを私は折にふれ繰って来た。  
教師が続いているうちにいつか教育の日常的現実には呪縛され麻痺してしまっているおのれに気づくと、私は、はっとして泰淳の絶対平等、絶対否定の峻烈な精神に触れるべくこれを読み、あるいは長篇『富士』をばらばらとめくり、そこに、現実と対峙し現実の只中に屹立する絶対的な精神の手ごたえを確かめると、ようやくその感触を杖に現場にもどって行ったのである。

しかし、今、教師たち、特に若い教師たちを見ると、この把えどころのない教育現実の只中を、おのがじし如何なる絶対的なものを心に抱き、何を杖として進んで行こうとしているのか、私にはわからなくなつた。

この寂しさも、私が教師をやめようと思つた一因であつた。

## 〈We 武蔵野の会

### 発 足 記 〉

四月十一日(日)午後、東京・武蔵野市吉祥寺の同市コミュニティ・センターにて、初めてのWe 武蔵野の会の集まりがもたれました。今日は準備会ねと言いなから四人で始めましたが、一人二人と読者の方たちが訪れ、ウィ書房のお二人も加えて計十三名(うちガキンチョ二名)に。

何はともあれまず一人ずつ自己紹介、女

が働く上での差別や、子育て、姑の世話をめぐる苦悩などの体験談へと話がどんどん進みます。一通り終わったところで、今度は創刊号の感想・希望を一人ずつ詳しくあげていきました。中嶋里美さんののがとてもよかった、など内容に関するものから、表紙の多色刷りはお金がかかってぜいたくだ等々、いろんな意見が出されました。とくにただ一人の男性、Hさんの指摘はスルドクかつ面白おかしく、一同ううむと唸ったり、ドツと笑ったり。最後に今後の会の進め方、次回の日時を決め、予定の時刻を大幅に過ぎて散会。外はもう夕ぐれの気配でした。

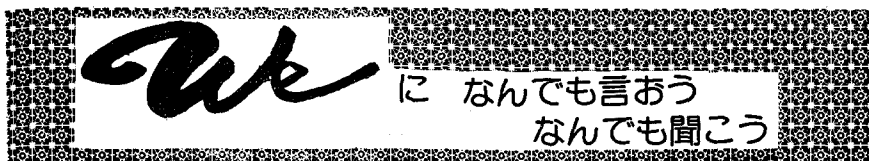
We 武蔵野の会は、今後二、三ヶ月に一回、合評会を開き、その内容を一冊のノートに記録していき、回覧ノートにしたいと考えてい

ます。合評会の進行についても次回からは工夫してゆくつもりです。

ご多忙のなか駆けつけて下さった半田さん、馬場さん、どうもありがとう。We 武蔵野の会、まずまずのスタートでした。「We ……の会」が全国にたくさん生まれて、読者からWeへのフィードバックができればほんとうにすばらしいと思います。

次回は五月三十日(日)一時半より同じく御殿山コミュニティ・センター(吉祥寺駅ロンドン口下車徒歩五分)にて行います。5月号・6月号の合評会です。お近くの方、お誘い合わせてお気軽においで下さい(子連れ歓迎)。お待ちしています!

(We 武蔵野の会 小田亜佐子)



きびしい批判も、注文も  
もちろん、ほめてもらえれば  
元気百倍！ お便り待っています

今月は、創刊号に  
寄せられた  
お便りを

We 創刊号を手にし、感慨一入のものがあります。ほんのちよびりでもWeのいでたちにかかわった者として、一冊の本の重みを身に沁みて感じました。

まず表紙をつくづくと眺めながら、今、この本を手にした実感をしみじみと噛みしめました。それから、おもむろに頁を開く。最初に読んだのは「波」。以前「それから」をまず読んでいたのが習慣になったのでしょうか。それから第一頁から順々に読み、一字も見落とさず読み終えました。その日はもう何もせず、Weの読書に費しました。一字一字、創刊号を執筆なさった諸先生方の情熱が感じられ圧倒されました。

新島先生の論文、家庭科は他教科とここが違うのだということを明快にとらえられていて共感を覚えました。自分で今まで明確に表現できないながら考えていたことを、ずばり代弁して下さったと思います。

中嶋さんの授業風景、同じ思いをした覚えのある身には、一つ一つがビンビンと響いてきます。あの中嶋さんにしてそうだったのかと妙な親近感を覚えました。六年間の養護学校での仕事の後で、時間講師という立場で高校の教壇に立った時の驚きと失望は、まだなまなましく心に残っておりましし、それでも何とか頑張ってきたこの一年は、中嶋先生の心境とあい通ずるものがありましたから。

宮淑子さんの生活、私もそんな形の男と女の生活を夢見たことがありました。仕事も育児も家事も夫婦の生活も、どれも大切で、どれも手を抜けない時、妻子や家庭のことを忘れて仕事に全力投球できる男性と、仕事を持つ女性との立場にあまり差がありすぎうらめしく思いました。私もオクさんがほしいと本音で思いました。心ある男性ならそうした女性の立場を理解できるはずだと思いましたが日本の男の歴史は、女性に対する偏見に対して大変鈍感になっているようです。

女の自立がよく取り上げられますが、私から見れば、男の自立こそ性の解放、新しい家族のあり方のきめ手だと思っています。宮さんの生活、一つのあり方として賛成です。ただし、子どもの問題はどうかかるのか。ここに至ると私はひっかかるのです。

ますの先生の論文、とても新鮮でした。落ちこぼれ派の居直り大賛成。ここから新しい価値観が生まれるかもしれませんね。「自立」について、時に強者の論理になりかねないとの考え方に共鳴しました。退職していろいろの立場にある主婦の生き方に接したとき、ますの先生の言葉の意味を深く味わうことができたように思います。

名取先生の授業風景、子供たちの元気な声が聞こえてきそう。日教組教研全国集会での家庭科実践報告に感じた違和感、ゆで卵やじやがいの話、思わずふき出して

しまいました。

花になったシロの話、小さいものへのいたわり、優しさ、思わず涙が出ました。―書き出したらきりもなく続きます。この辺でペンを置きます。(岩手県 押切 郁)

Weの発刊おめでとうございます。おめでとう！

つねづね、半田さんや馬場さんに劣らず、たくさんの人々の努力と熱意と連帯を感じてきました。その人たちにもおめでとう。喜んでばかりもいられないんでしょうけれど、とりあえずのWeの船出を祝してワインなど傾けましょう。

〈感想〉

。表紙がよかった。何か言いたげな面々(?) ちょっと悲しそうな顔をしていて気になったけれど見方を変えれば、やさしそうでも決定的でもある。初めだけですか? 力強い、訴えるようなようにでもとれるような(従って読む人の想像をかきたてる

ような)表紙、これからも続けて下さい。

。内容はそれぞれおもしろかったが、少し総花的で(初めだからしかたない?) はじめの数編の論文のつながりが欠けた感じ。見出しが何となく細くたよりなげで、もう一つパシッとしらない感じを受けましたが、それは、その意図されたのですか?

(東京都 河野貴代美)

今月は特に外出することが多いので、雑誌を読み切るのは急に出来そうもないので、ちょっと外見を拝見しての感想を書きます。まず、目次が平板であること。

「家庭科教育」の時もそう思ったのですが、目次の活字の使い方に変化がない。これは平等に扱うということだと思えますが、一般の雑誌を見なれたものには魅力がない。活字の大小をつけても、小さい活字のものにも興味をもつものです。工夫が必要と思えます。最

高のゴチソーが並んでいても、ハシをつける気にならない。サシミのいいのも必要ですが、ツマも必要だと思えます。

次に、本文の活字が小さすぎる。

新島さんのようなユニークな人の文も八ポイントでビッシリ組んであると読みづらい。老人だからでしょうか。小さい活字で大量の文を入れようというサービスピ精神とありますが、目次と同様、変化をつけて読ませることが大事ではないでしょうか。

読むことを好まない人にも読ませる。読みたくなるように考えてください。(掛川市 戸塚 廉)

待ちに待った創刊号、今、手にしました。産声をあげたのだという実感で、胸が高鳴りました。ほんとうによくやって下さった。今までのご苦労のほどが先生の「波」の中に書かれている一語一語から伝わってきて私の心をゆさぶりました。「感動」することの絶えて

ない日々に、先ず教師が感動することなしに、生徒に何を感じさせるか、いつも焦りを感じていましたが、Weを読んだ後の心は、感動の渦で一杯でした。

新島先生の「家庭科」とは既知のコトを教え授ける教科ではない。人と人との関係、教師にとっても生徒にとっても未知の世界である……。大いなる示唆を与えられました。味わい深い文章でした。

和田先生、いつものことながら明快に歯に衣をきせずバリと、しかも初めて教壇に立つ教師への暖かい心のにじみ呼びかけに、さすがは、と思いました。

中嶋先生、苦渋と勇気をもって明らかにしていられしやる姿勢には敬服いたしました。

名取先生のこだわらない、生き生きとしたユニークな授業の展開は、いつ読んでもさわやかです。

本年度は先生の何分の一でもいい取り入れていきたいと考えています。(神戸市 入江一恵)

町へ用足しに出かけ、思わぬ時間が空いて立ち寄った図書館の新刊コーナーで、一冊の本の背表紙が目にとまった。淡い色彩の牧歌的な田園風景にさそわれて表紙をあけると、本文ぬきが——「自我の強い、おとなにはだまされないじぶんだけの世界をもっている子ども。ユニークで、そのくせ手荒くさわった人にはチャクリとおかえしをするような、トゲトゲのいっばいある子どもとしてそだっているが……」。ここまで読んで即座に、澤地久枝さんが子どもたちにもむけて書き下されたその本を借りて帰ることにした。

子どもたちが荒れている、と言われる。万引き、盗みなどの「事件」が小学生の息子のまわりにも続出しており、おどろき、ゆらぎつつもしかし、気になることがあった。まわりのおとなたちの子どもへ向ける目、対応、これでいいのだろうか。一方的にすぎはしないか……。思いまどっていたモヤモヤに、くつきり輪郭を与えてくれる力を、その本は持っていた。

澤地さんは、中国大陸ですごした子ども時代の「盗み」「体験を書き、当時の子ども心に即し、ていねいときほぐしながら、まぢがいや無理のありかを率直にさし出し、おとなたちのとがめ方に疑問をつきつけている——盗んでしまった子どもの心理や動機などに目もくれず、自分は一度だってそんなことをしたことはないし、盗みをしようになんて考えたことさえない、という態度でしかり、レットルをはる——おとなたちへ。もし見つかってはずかしめられていたら、どんな結果に……と、胸がヒンヤリする、まのおもいを重ねて。

五年生のそのころまで、日ざしの強い戸外をパンツ一枚でとびはねていた女の子も、やがて胸のしこりを気にし、シュミーズをひっかけ……。女学校に入学する。自分の内面の世界をのぞきこむことをおぼえたそのころはまた、戦争が拡大した時代でもあり、「聖戦」がとなえられ、「天孫降臨」の神話が歴史事実として教室中を覆っていた。

当時の「教育の粹」に「感受性の強いぶんだけみごとに染めあげられ」ていた澤地さんは、「ふりかえりたくない、愚かでみじめな時間」ととらえつつもなお、その「コマ—コマを掘り起こし、「戦後三十六年たったといったって、歴史の時間としてはついきのうのこと。かくされているベールのむこうのことも見る目をも身につけてほしい」と、せつせつと呼びかけている。

さらに、これまでほとんど語ったことがないという自らの引き揚げ行、難民生活や中国残留孤児問題への記述もなされており、「歴史を視る目」で貫かれている。あちこちにあなたか語りかけの口調が生かされ、「あなたたち、しつかりね」のおもいにあふれた文章は平易で読みやすいのだが、著者のまなざしは、りと澄んだまま、ゆるぎがない。

ともすれば目の前のわが子の姿に眩<sup>め</sup>みそうになる私は、「子どもはいないけれど、子どもは好きです」と言いきる澤地さんのすがすがしさに、たじろぐおもいでこの本を読みとおした。

『おとなになる旅』澤地久枝、ポプラ社 九八〇円

ミーハーだと嘲笑されながらも、いわゆるホームドラマ、お茶の間ドラマをよく見る。

漫画半分テレビ半分の小三の息子と、こたつに入ってオセンペイをつまみながら、中年の姉妹がお互いに「おねえちゃま」「おねま」「ミッコ」と呼び合っている（『ちよっといい姉妹』）を見ながら、「わア、キモ悪い」「つまらないことでよく泣くねえ」などと言いつつ、う达尔な気分、時にはいいものだ。

「あの入んなこと言ってるけど、本当はあの男の人のこと好きなんだよ」と息子が言えば、「離婚した子持ち女が、あんなに次々とプロポーズされるわけがないじゃん」と家計簿と格闘中のオバンは心の中で思う。十歳の子供となにがしかの経験を積んできた大人が、それなりに理解できるというわかりやすさ。その上、二、三回見なくてもちゃんと筋がわかる便利さ。それがこの種のドラマの身上だ。ましてそのリアリティのなさが、現実の生活の中でささくれ立っている私にとって精神安定剤となる。が、この精神安定剤、薬にはつきものの副作用があるから、油断できない。この薬だけを長く服用していると、「結婚願望症」とか「自立恐怖症」を起こしてしまふ。離婚歴のある男が、母親と四人姉妹の家庭をきりまわしている次女に求婚する時のセリフはこうだ。「翔んでいるだの何だのといつて外に出たがる女はこりごりだ。今度こそエプロンのよく似合う人と結婚したいんだ」（『結婚』）。

家族の愛の重さ、子育て後の親の生活、もはや「職場の花」の盛

りを通りすぎた働く女のありよう、など現代的テーマをぶちこみながら、このドラマ、母親を含めて五人の女が「結婚」への道をひた走る。

最近では、働く女の華やかな面だけではなく労働者としての側面にも光があてられ始めたように思う。しかし何故か、労働組合は敵役なのだ。組合運動に熱中している女性性は、必ず人間性がなく、カサカサして女性的魅力に乏しい。仕事が出来ないくせに不平不満ばかり言い立て待遇改善を叫ぶ。これと正反対の性格を付与されているヒロインは、組合に批判的だ（『結婚』『横浜物語』）。勇敢な活動家たちは、解雇とか倒産によって実にあつてなく姿を消されてしまふ。例えば『横浜物語』の場合、本の小売店が大型スーパーの進出により土地を買収され、閉店を余儀なくされるのだが、本屋の従業員の組合が利己的に労働条件向上を要求したことが倒産のひきがねになったかのように描かれている。若いステキな社長は「こんどはもつとこじんまりした店を開きたい」とヒロインに囁き、彼女も「私もそこで働きます」でザ・エンド。クビになるしかない他の従業員はどうしてくれるの？ これじゃ偽装倒産じゃないの!? 労働組合がドラマの中で市民権を得られるのはまだ先の話のようだ。

北原優脚本『ちよっといい姉妹』TBSテレビ

橋田寿賀子脚本『結婚』TBSテレビ

五木寛之原作、石松愛弘脚本『横浜物語』NHKテレビ

## テレビ残像

ドラマの描くもの、描かないもの

野村 康子

## 銀輪のうた

こわれた身体

栗原 実抄

つい先日、障害者の友達のOさんが電話で私にこう言った。「自分たちは頭はふつうでも、こわれた身体を持ち主なんだ。だから人々に手伝わってもらわなければ生きていけない。障害者がそういう人たち（ボランティア）にあまり甘えたり、また社会に出て身勝手な行動をとったりするのはおかしい。僕も栗原さんも、一人で誰の手も借りずに外出などできないのだから、もっとお互いに気をつけよう」。

Oさんは、地域の障害者サークルの会長をしている。四〇歳をだいぶ過ぎた重度障害をもった男性で、二年ほど前から電動車いすに乗っている。Oさんは、小さい時に高熱を出

す病気をして、そのために手足が全然きなくなっちゃったのだ。それで口で、手足の代わりをすることを訓練した。今ではお兄さんが経営しているスーパーマーケットの経営を、すべて一人でやっている。口でソロバンをはじき、電話をかけ、集金も電動車いすで出かける。私はこんなOさんの生きざまを、同じ障害者ながら驚異の目で見てしまう。

Oさんは最近まで回りの人に対して、相当強引に自分の意志を通そうとしていた。私もそうなのだが、障害者は社会に甘えてしまうところがある。障害者を持っているからというハンディを逆に武器にしようのだ。

Oさんはサークルで決まったことなども、自分がそれが気に入らないと、何か理屈をつけてむし返すクセがあった。このごろはサークルの皆が心得ていてOさんに注意するようになったので、だんだんに直ってきたようだ。Oさんがそういう強引さに自分で気付いて、直そうとしているのは立派だと思う。でも、障害者は「こわれた身体」だから無理を言っ

てはいけないというのは、障害者を持たない人たちの考えを、そのままのみにして繰り返しているに過ぎないのではないだろうかと思

Oさんだけではなく、重度障害者は小さい時から家族に、自分の意志をストリートに出してはいけない、と耳にタコができるほど、言いさかされてくるのだ。それでも一度外の世界を知ってしまうと、歯止めがきかなくなってしまう。ボランティアはせいぜい五、六人知っていればいい方で、また何十人知っていても、毎日介助が頼めるわけでもないのだ。だから病院の帰りに買い物もしてしまうという無理をすることになる。ボランティアがそのことに対して、私なら私にはつきり抗議してくれば、家の事情や自分の意見も言えるのだ。しかし、たいいていの人はそれを言わず、何かの理由をつけて去って行ってしま

Oさんが私に注意したのは、このことなのだ。何がなんでもボランティアや回りの人に介助してもらおうというのではなく、障害者の置かれてる立場をよく理解して、個々につながりを深めていけるような、そんな関係を私は作っていききたい。障害者ゆえの遠慮を、一社会人としての遠慮に変えていききたいと思





## 子さんチのね子たち

### チー子の大病 (1)

#### さとう けいこ

猫は妊娠二か月余で生まれ、生後二か月までに乳離れし、生後半年でほぼ成人（成猫かな？）に達する。チー子がわが家に来たのは生後すでに半年近くたったいたのではないかと思うが、わが家の主人となって半年近くを経た翌年のはじめころから、しきりに夜遊びに出かけるようになった。

それまでは十二時までには家の中に入り、あけ方までおとなしく寝ていたのに、夜中に外に出たがったり、まだ四時か五時の暗いうちにドアをあけてほしいと啼いたりした。私はそれをチー子の青春の前ぶれ程度に思い、

いうままに外で遊ばせていた。その間に、チー子はすっかり風邪を引き込んでしまっていたらしい。

チー子の食欲がみる間に衰え、好物の煮干しも牛乳も、皮はぎの煮たものも小いわしもすっかり食べなくなった時、私はどうもこれはただごとではないらしいと思い始めた。ほっそりしていた身体がいつそう細くなり、終日元氣なく寝ているようになって、私は思い余って獣医さんに電話をかけてみた。

「そんな状態で二週間も経つなんて、猫が死んでしまえますよ」の返事に驚ろいて、私は猫を箱に入れて近所のお医者さんへ走っていった。チー子は三九度余りの熱があり、早速抗生物質の注射が打たれた。

「注射が効けばよいのですが、そうでないとめんどろなことになるかも知れません」。獣医さんは父おとうさんで、おだやかで見るからに親切そうな父さんと、寡黙で横顔の端正な若い息子さんだった。新米の飼主である私は、ひたすら恐縮してチー子の治療をお願いした。

翌日チー子は注射が効いてか、少し状態が回復した。一安心も束の間、その後は毎日毎

日状態は悪くなるばかりだった。チー子の顔はすでに生気がなく、鼻もノドもつまり、苦し気で、ハク製のように衰弱してゆくのである。

「せめてもう一週間早く連れて来て下されば……」お父さんの獣医さんがおっしゃるには、チー子は猫テンパーという犬のジステンパーに相当する伝染病にかかっており、既に病気が進行しているので、治療には相当な日数と費用がかかり、それでも完治するかどうか危ぶまれるほどの状態にあるというのである。

高熱のため目は目やににただれ、口唇ははれて皮がやぶれ、いっさい食物が食べられず水さえのみにくいチー子を見て、私は哀れでしかたがなかった。こんな目にあわなければならぬほど悪いことをしたこともないのに。私の願いで、チー子は入院し、一日四回の注射と栄養剤の太い注射を受けることになった。

チー子の大病が全快するまでは、到底一回で書き尽くせない。次号に引き続きその経過を記したい。

♥「ママ、すごいんだよ。付き添いのほとんどが父親なのさ。会社を休んで来たんだろね。世の中変わったなア」息子が東京の某私立大を受験した日の感想を聞いて、私しやフクザツ。男にも付き添い時間を、か!?

♥男が子育てにかかわるのは好ましいが、この父親たちは子育てを共に担ってきたのだから。男の子の大学受験が家の重大事だから(費用の点でも!)ここ一番、オヤジが出て来たような気がするネ。

♥それでも男の重大事が「オレは仕事だ」から「子供」に向いたのはいいことだ。受験戦争にのぞむ子供をホテルでかいがいしく世話をすれば、自らそぎ落としたなにかに気づくだろうから——という見方もあるのかなア。

♥ある社会教育主事が珍らしくヤワラカイ男で、お役所で焼芋を食いつつ話しこんだ日。父親学級にも熟を入れているが、どうしてもお母さんが二人いる家庭になってしまう。そういう家庭が増えているんですよ、と。

♥男の未来が見えてしまつて、夢も希望も抱

けなくなつて、生きがいを見出しそうとするのか。それならば母親の発想と同じであり、母親が二人になって当然だ。子供にとつては従来之母一人でさえ迷惑なのに。

♥家事・育児を共に担つた上での、父と母の役割はなんなのだろう。各々の世界を持ちながら、父と母の役割はなんなのだろう。無理

## 丙十舞雅星 ブラード

(3)

に分けることはあるまいとお願いだろうが、やはり父と母は違う。違つたほうがいい。

♥たくましい子供に、子供のからだを鍛えるのが父親の役目、ナンテすぐいう。子供は放つておけば、もともとたくましくできている。いじりすぎるから、相手をしてやらなければ遊べないようになってしまうのだ。

♥吉田ルイ子氏が訪れた日。ビストル二丁を腰に世界を歩き、写真を撮りまくる話を、息子が瞳を輝かして聞いていた。ああ、ロマンだ。これは父親的ロマンだ。この種の夢が現代の家庭に欠けているんだ、と膝を打つ。

♥なにも父親でなければ、とは言わぬ。父親に世界を歩け、とも言わぬ。だが、冒険をしなくなった父親にロマンは語れまい。管理社会へ組みこまれた父と、管理社会へ「社会進出」する母では、子供になんの夢を語る?

♥先の見える管理社会だからこそ、父も母も精神的飛翔が必要ではないのか。自分自身の無限の可能性への挑戦、そのプロセス、ふくらむ夢、他へおよびす影響、変わりえないものが変わる驚き。人生には無限の夢がある。

♥生きることそのものがロマンだと語るには、ちょっと淋しい現代の暮らし。だが、無限の夢に向かつて飛翔すれば、父親的ロマンと母親的ロマンはおのずと違ってくるかも。どちらが「甘い」かは子供が審判してくれる。

(門野晴子)





共に生きる

半田 たつ子

事務室の窓辺で銀木犀の枝が揺れる。見上げると、尾長が木犀の実をついばんでいる。昨日も、今日も。きつと明日も。

木犀の香の漂うころ、私はある雑誌に『家庭科教育』編集部を追われて」と副題をつけた原稿を書いていた。冒頭に「今年は夏があったのだろうか」と書いた。それからもう半年余り。秋も、冬も、意識に上らぬうちに、来たつては去り、気づいた時には桜が咲いて、そして散った――。

いま、木犀の樹を訪なう鳥に目をとめるのは、それだけのゆとりが生まれたということなのか。

三月二十六日夕、Weの創刊を祝う会を開いていただいた。婦選会館の二階にあふれんばかりの方たちに、創刊号の執筆陣が、Weとかかわりや執筆意図を語って下さった。どなたの言葉もうれしかったが、「カウンスリング入門」を連載している児玉すみ子は、妹であるだけに、私の胸に満ちてくるものがあつた。

「七つ下の私にとって、姉はまぶしい存在だった。どんなすてきな結婚をするのだろうと子供心に思っていたのに、雪深い北陸で、私が想像もしなかったような結婚を選んでしまった」と。初めて聞く言葉だった。いま仲間となつた妹が、それこそまぶしかった。

翌二十七日の朝、東京を発ち、昼すぎ福井に着いた。ホームを走り回って私を見つけた伊代子さんは、「先生！」と言っただけで、みるみる瞳がうるむ。在学中、家庭クラブ会長としてオヤブンの愛称を奉られ、クラスメイトの信頼を一身に集めていた人。改札口では札子さんが手を振っている。車を回してくれたのは玉村さん。後で聞けばつわりだったというのに。学年も学校も異なる教え子たち。

Weのレタリングをした由美ちゃんが、新聞社に働きかけ、私のことが記事になった。とたんに教え子だけでなく、教育・生活・女の問題に取り組んでいる人たちが手を結んだ。遂に、由美ちゃんを委員長とする実行委員会が組織され、私の講演会が開催されたのだ。

由美ちゃんの言葉を借りれば「ほんのちょっとした意識をもって、ほんのちょっとした勇氣を出すことの素晴らしさ!」。たくさんの方からの「何か手伝えることは?」の申し出に、彼女は叫んだ。「ワタシごときが実行委員長なんて、みんなに申しわけない気持でいっぱい。二十七日までいい。能力と人格を授けたまえ、神よ!!」。とうとう、その日。労働福祉会館には、なつかしい顔、思いがけぬ顔が続々。それぞれの人が引つ張ってきた男性も混つて。

私は、昨夕の妹の言葉から話した。妹の目に、「雪深い北陸で、姉の上に想像もしなかった結婚」と映じた福井でのくらしは、私にとって財産である。もし、あのくらしを体験しなかったら、多分私は違う人間になっていただろう、と。

婚家先でいかに大切にされても、生まれ育つた家庭との生活感覚の違いは、事ごとに私を苦しめた。しかし、気候・風土・歴史・経済などの背景が見えてきた時、「くらしを問う」ことは、生涯の追求課題となった。

学校や教師に不信を植えつけられた私が、家庭科を教える苦しさ。自らを教材とし、偽りのない自分を生徒の前に晒さなければ、家庭科教育は成立しない。家庭科をどう構築するか、寝ても醒めても考え続ける中で、導かれるように、男女共修運動に飛び込んだ。

生徒の素朴な問いは、常に本質的な命題をつきつけた。いま、大勢の方と再会し、新しい友を得たのも、教え子たちの猛運動のおかげである。教師は、生徒と共にある時、かけがえのない喜びに浸される……語っても、語っても、語り尽くせなかった。

新しい友の一人に橋本チエ子さんがいる。創刊号に、為政者は身分制度の弊なるが故に家庭科女子必修を手離さないのだ、との鋭い指摘を寄せた方だ。電話で「あなたのような方が福井にいらっしやることを、知っていたなら」と言うと、「いいえ、福井のようなところだからこそ、表には出なくとも重いつぶやきを胸に秘めている女性がたくさんいるはずです」と答えられた方だ。

知らなかった。いや、知ろうとしなかった。教える家庭科とわが家庭を、個人の努力で一致させようと躍起になり、頭を、心を、手足をフル回転させていた私には、地域に溶け込み、地域の中に友を見出すことができなかった。いいえ、その必要性に目を開かれていなかった。講演会の後の「囲む会」に残られたあの人の人は、今日の友情をかつて培っていたなら——と口惜しいような方たちだった。

労働福祉会館に泊まるはずだったのに、礼子さんは、それがあたり前という顔で、福井市郊外の礼子さんの家に車を走らせた。礼子さんのお母様が私のために縫って届けられたというはんでんやチャンチャンコを出して、「寒いから着てね」と言う。まるで里帰りの娘に対する実家の母のような労りと心づかいで。礼子さんのおつれ

あいがまたいい方で、「先生を今晚独り占めにできるとは、おまえが一番得をしたな」と喜ばれる。波濤を越えてきたここ何か月。波間にぼっかり浮かんだお囃話の世界に遊んだような夜だった。

由美ちゃんからの手紙

「……昨秋以来、自分でもよくわからないうちに、バタバタとあの日を迎えてしまったという感じが致します。

今とても思うこと……本を出すってすごいことだと……!! 本の中に……!! (中略)

三月二十七日は、結局来るべくして来た日ではあったと今でも思っておりますが、今思いますには、未熟な私は、やはり三月二十七日にむけて全力で走ってしまってたということです。私にとって、いえ、福井の仲間にとって(中略)三月二十七日という日は、始まりの時であったはずですし、事実そうであったのですが、私にとっては、一つ終わってしまった風な感じがして、「エ!?」という思いが、とてもおかしくもこの自分の中にあつたのですよね……。

ところが、今日ハッと気が付いたのです!! 三月十五日のWe 一冊きりじゃないんだゾって。来月の四月十五日も、その次の五月十五日もあるんじゃないかあ……。やっぱり三月二十七日は何かの終わりの日じゃなくって、始まりの日だったんだって……。遅ればせながら心から思うことができました。と同時に、雑誌を作ることのすごいエネルギーを、本当に、ほんとうに感じてしまったことです。

私たちは、「共に生きる」仲間を見つけた。花も鳥も含めて。ここから、何かが始まる。

# WATAKUSHI KARA ANATANI

## ワイド版

▼三月二十六日夕、婦選会館で開かれた「Weの創刊を祝う会」に、参加させていただきました。Weにふさわしいさわやかな力強い出会いのひとときでした。行ってみて、本当によかったと実感しています。おいでになった皆さんのすばらしい人柄に直接ふれることができたことが何よりの喜びでした。そして半田さんはじめ、執筆された方々のお話を聞くことで、文章をもうひとつ理解しきれなかった私の助けになったように思います。

新しい家庭科の雑誌Weが創刊されることを新聞で知ったのは、昨年の秋ごろだったと思います。それからの半年間はとても楽しみにしました。

昨年から今年にかけては、小学校の一年生のようでした。一昨年とその前年、約二年間を生協運動に参加していたのですが、その活動をすればするほど、自分の生き方を考えさせられました。合成洗剤や危険な食品添加物を追放したいと願う活動する時、それができない社会、そしてその構成員の一人である自分を考えずにはいられませんでした。今ひたすら自分の生き方を初めから考え直したい、勉強したいと願い、少しずつですが努力しているところです。

水俣病を生み、それを直接ひき起こしたチッソを許そうとしている社会、反戦やノーモア広島を叫びながらも、ベトナム戦争に間接とはいえ加わったり、アジア・アフリカに化学肥料や農薬を売りつけ、利益を貪るのを支持している社会は何なのでしょう。同じ家庭内に家族の健康を願い、無添加で無農薬の安全な食事づくりに励んでいる妻と、会社にて近くの

田畑に公害をたれ流しながら、自社の拡張に努めている夫が、仲良く同居していることの不思議さは何なのでしょう。

教科書に、原爆や水俣病が小さく小さく、できれば消してしまいう方向にある時、多くの人たちは、これに無関心だったのではないのでしょうか。無関心イコール消極的賛成とみなされ、どんどん危険な方へ進んでしまうのに。直接何かが我身にふりかかって「さて困った」となった時では遅く、自分で自分の首を締めたようなものです。どうしてこの事実に関付かないのか？ 気付いたとしても「ノウ」と意志表示をしないのか？ 行動しないのか？

今まででうつすら考えることができたのは、過去の教育の中で、私たちは余りにも大切なことを学びそなっているということです。教育は、学校の中だけでされるものでないことは明らかですが、影響の大きさから言えば一番だろう

と思います。

こんなことを考えている時に、Weの紹介記事を読んだのです。私は「これだ！」と直感しました。

子供の教育を通して自分も勉強できる、と期待しました。送られてきた創刊号を読んで、祝う会にも参加してみても、自分の期待は正しかったと確信しました。うれしくてたまりません。これから、一生懸命学んでいくつもりです。

(朝霞市 近江谷まつ美)

▼春と幸せと一緒に運んできたWeです。本当に心待ちにしておりました。創刊号を手にして、一瞬フワッと熱いものがこみあげてまいりました。まるで、ラブレターをもらった少女のような心境で、ワクワクと開く頁です。

八〇頁がその倍も倍もあるように内容が充実していて、どこを開いても、もぎたてのりんごのようにみずみずしく、香りに満ちていて、私たちの食欲をそそってくれ

ます。ひとりでに「よかった」「素敵」「うんうん」と言いながら見ています。(仙台市 高橋静子)

▼Weの力強いスタートを心よりうれしくたのもしく思います。管理体制の強化と戦いながら、教育の現場で多くの矛盾に迷い悩む家庭科教師は今、勇気と希望と力を与えてくれる心よりどころとしてWeを求めています。「女も男も、ともに自立し、差別や抑圧のない社会」をめざして、「新しい生活文化の創造」をめざして、新潟の地でもWeの炎を、静かに深く大きく燃え上がらせていきたいと思えます。

Weの炎が、いつか荒野の枯草を焼きつくし、新しい芽が萌え出ることを願い、信じております。

(We呼びかけ人会、矢代・小野塚)

▼三月半ばになったところから、毎日勤め先から帰る時、玄関に近づくにつれ、「今日は？」と創刊号

の配達を心待ちにする思いでありました。私のような者にさえ「自分たちの本」というような昂ぶった思いがするのですから、半田先生馬場さんを中心となさる皆様のお気持はいかばかりかと存じます。一頁ずつ、一文ずつ、ていねいに、心して読ませていただいております。(新潟市 山口久子)

▼本校での創刊号の評判もいようです。こんな経過のある本なら軌道に乗るまで買わなくちゃと言ってくれた数学のK先生。チラシを一目見て「私、こんな内容興味があるの」とすぐ予約購読をして下さった国語の若いH先生は「おもしろく読んだわ」と言ってくれました。司書の人も「すみずみまで読めそうだし、私用に一冊買っておく」と、図書館に入りますのに購読してくれることになっていきます。養護教諭の人もカウンセリング入門に興味を持って読んで下さったし、あと、体育の先生、国

語の先生……みんな私の支援を下さり、Weのおかげで私の方も、職場により強い連帯を、和をもたすことができます。

(埼玉県 柴田栄子)

▼とうとういでしたちましたね。これから本番！まあ、生きること、いつも終始一つですから。わたしも、やっと一いきというところで、二十七日、Weをあらまし読ませてもらいました。第一の強い印象は「やわらかい」ということ。第二は、新島氏の小学四年生以上を対象とする「哲学合宿」に興味をひかれます。それは、わたしがいま、まとめたものが「子どもと学ぶ生きる哲学」宗教」ですから。WeのEDITORS NOTEを読んでいる「そうだ！ そうだ！」もつとOpen heartになれ！ と叫びたいです。ご健闘を！

(川崎市 溝上泰子)

▼三千人の熱い思いがこめられた

Weは、「青鞥」の創刊にも比すべき意義をもちます。人びととともに作りあげる家庭教育に、最初の里程碑がおかれることになりました。(横浜市 村田泰彦)

▼創刊号が具体的に世に送り出され、手に持つてみるとページ数が少ないとはいえ、なにかドッシリと手応えを覚えます。ほんとうにおめでとう(お芽出とう)ございます。去年の夏からの九か月、とても長く短かくて、充実して発散して、というような期間だったと思います。その月日を、ほんのわずかも共にさせてもらえて、私自身がずいぶん励まされました。私としても「いでたん、いざ」の気持を育てている時にぶつかりましたので、なおさらでした。人間と教育への新しいまなざしと理念とが、この誌上でまじわりはじけあいながら、拡がっていくことを願ってやみません。

(相模原市 長谷川孝)

▼郵便受に封筒を見つけてから、封を切るのもどかしい思いで手にしました。すみからすみまで一気に……ああ、やっと誕生しました。すばらしい生命が、私たち(We)の生命がここに。

……短くて長い胎児の時期を終えて、うぶ声をあげた新生児。おめでとうございます。この本のこれからの成長は、私たち(We)の希望となるでしょう。

(横浜 牧野カツコ)

▼読んでいて実に新鮮であり、ショックでもありました。全国の読者の皆さんがそう思われたことでしょう。友達、知り合いに回して読者をふやしていきたいと思えます。宮さんが書かれたK男さん、いい男ですね。一度お会いしてみたい。「相手の人とステキな……」というセリフ。ややキザですが、胸にキュッときました。でもやっぱり、別居結婚でないと、風通しのいいやさしい関係をつくりにく

いのかな？(藤沢市 中村美和子)

▼長谷川孝さんの「視点、学ぶとは」を読んで、ぼくと似たようなことを思ってるんだなあ、と感じた。ぼくの書いたものを三送お送りします。

(横浜 鈴木正美)

▼Weの字が、何とも心強く未来を志向しているようです。すばらしいですね。このWeをデザインなさったのが、半田さまの教え子でいられる由。Weのすべてが半田さまを支援し、半田さまが大好きといった人たちが埋まっている感じが致します。

(横浜 皆川鎮枝)

▼創刊号読みました。郵便受から取り出してドキドキ(どうしてか?)。子供たちに昼寝を半ば強制して封を切りました。ワート、何ともいえない感激。ゆつくりと一ページを開き、没頭。さあ、私も頑張ろうと力が湧いてきました。不思議。(船橋市 門野レイコ)

▼草創期の苦しみは大変でも、創り出す喜びには換え難いものがあると思います。支持する層が、自発的・自主的であるのが一番すばらしいと思えました。この世のすべてが、義務感とか押しつけとか体裁とか、利用とかで動いている中で、稀有な尊いことと思えます。

(東京都 児玉すみ子)

▼興味深く読んだのは「男たちよ」と、大学の家庭科教育法です。貴誌が世論という名の男論を展開しているのも一つのジャンルかと思っています。この切り込みの深さが、男女共修問題につながっていくと思います。大学の教科教育法は、他の教科誌でも、もっともって掲載すべきだと痛感しました。家庭科の授業は、蛇口の部分から刷新していくべきだー全くその通りだと思います。(東京都 本多公栄)

▼春の息吹きをたしかに膚で感じることが出来る季節に、一つの本

が創刊された喜び。ばあっと春が来た！と思いました。三月に入ってから、毎日まだか、まだかと郵便ポストをのぞき込んでいました。新しい家庭科―We、大変素敵です。内容も充実して盛り沢山の創刊になり、表紙はしゃれていますし、お喜び申し上げます。おめでとうございます。

(八王子市 太田立子)

▼思っていた通り充実した内容でどのページにも熱い思いがこもっているのが感じられます。中でも私には、和田典子先生の「初めて教壇に立つあなたに」を拝見することで、今の学校における家庭科の位置づけがよくわかり、ありがたいものでした。恐らくこの図式は、そのまま社会における男女の役割といったものにも通じるのでしょう。Weがなっているもの大きさや重さを考えさせられました。(東京都 竹見智恵子)

▼「いでたちぬ、いま」という言葉が、この新しい家庭科への思いを尽くしている、という感じがいたしました。持続が力である、とだれかが言いました。その持続の意志を確かにするものは目標の明確さでしょう。日常の家庭の生活そこにあるすべてが人間を創ってゆくのではないかと私は思います。Weが多くなると共にそのことを考える場でありますようにと願います。(東京都 宮下喜代)

(長野県 湯沢静江)

▼「よりっぱな内容で「よくぞこれまで……」と感服いたしました。「大変だからこそ楽しい」がある限りWeは続くことでしょう。

▼Weを何度も何度も読んでいます。名取先生や宮さん、ますのさんがまた好きになりました。K子さんのね子に涙があふれます。本当におめでとうございます。方向性があるというのは、とても力強いのですね。(東京都 岩井由紀子)

▼志ある人々の力が寄せ集められてとにかく船出したことを、心からお祝い申し上げます。「いまいでたつWeに贈る」言葉に、胸が高

鳴りました。この感動を大切に、私もできる限り販路を広げるお手伝いをさせていただくつもりです。春のおそい信濃路にも、クロッカスの花が咲きました。オオイヌノフグリがコバルトブルーのすがすがしい色を見せてくれました。

(須坂市 引場 進)

▼私は今春、産休期間の家庭科教

師として、ほんの軽い気持ちから申し込みました。でも、今回Weの創刊号を読んで、大いに考えさせられ、又教えられました。家庭科教師の多くが、技術や技能の習得に力を入れるあまり、人間生活の本質的なものを教える態度に欠けていること。受験一辺倒の教育状況のもとでは、家庭科教師は差別と偏見に出会うだろうこと。ましてや、私のように産休の短期間教師では、なにほどもまとまった授業ができないということ……授業に興味をなくした受験戦争中の生徒たちの心のオアシス的な存在にしかたないだろう。でも、そこから出発していこう。人間的なふれ合いを求めて……。

(大阪府 山内稀優子)

▼通勤の途中、行きがちが先輩・同輩と「おはようございます」の挨拶のあと、いつも「今晚サークルでね」とか「昨日の集会お疲れさま」とか声を交わしながら、そ

れぞれの学校に向かうのですが、Weの届いた翌朝は「昨日、Weがやつ、届いたよ」「私にも」という言葉を交わしました。Weを待っていて下さったんだと思うと、とてもうれしい気持ちでした。微力ながら私もこの本のどこかを支える人間であるよう努めなければならぬのだと思いを新たにしました。色々な月刊誌や季刊誌を手にかけていますが、かつてこのような気持ちで本を手にしたことはなく、それだけWeを身近なものに感じているのだ、という気がします。

(熊本市 松島赫子)

▼先生の新しい家庭科教育―男女を差別しない人間教育への視点が薄い本に厚みを加えていることを感じ改めてうれしく思います。前の雑誌から先生のお考えがはじき出されたことは教育反動の一つの現象ですし、そこを転機とするWeの誕生は、家庭科の歴史的発展を意味するのだとも考えます。

(熊本市 中山ソミ)

# ア ン テ ナ

## ☆第二次家永教科書訴訟

—最高裁が破棄、差し戻し

高校用日本史教科書の部分改訂をめぐり家永三郎・元東京教育大学教授（現中央大学教授）が文部大臣を相手に3件6カ所の検定不合格処分取り消しを求め、一、二審で勝訴した「第二次家永教科書訴訟」の上告審判決が4月8日、最高裁第一小法廷（中村治朗裁判長）で言い渡された。

争点は①検定を申請したのが発行元の三省堂だった場合でも執筆者の家永教授に原告適格が認められるか②部分改訂（四分の一未満）と全面改訂で審査基準が異なり、合否判定で違った処分が出たとしても、法的に許されるか③検定を申請した当時の学習指導要領が失効したあとも、訴えの利益はあるのか。

同法廷は「旧学習指導要領の下で合格した教科書を、同要領が変わったあとで、部分改訂検定することは原則としてできない」と、同教授の「訴えの利益」を否定的に解釈。ただし「例外的に部分改訂が許される場合もあり得る」とし、検定審査基準の運用、学習指導要領改正が教科書の記述に与える影響などを審理したうえで「訴えの利益」の有無を判断するよう求め、二審を破棄、改めて東京高裁に裁判のやり直しを命じた。

提訴以来15年、家永教授（68）は「文部省は門前払いの判決を求めることによって裁判を終了させようとしたが、差し戻し判決によってそのもくろみは破れた。これはひとつの成果である。しかし、7年もかかった上告審なのに、差し戻したことは誠に遺憾。今後とも全面的闘いを続ける」。又、同日夜、東京日比谷野外音楽堂で開催の「4・8教科書裁判抗議・教科書の反動化に反撃する国民大集会」に8000人が参集した。（4・9付）

## ☆政策決定の場への婦人の参加

政策決定の場からの婦人の締め出しは改まったか、をテーマに日本婦人有権者同盟（紀平弟子会長）が、昨年11月30日の時点で、東京23区、26市と都道府県、10政令指定都市を調査。調査項目は、婦人議員、選挙管理委員、教育委員、人権擁護委員、民

生委員、公害監視委員、職場（公務員）の管理職、婦人問題窓口の有無など。

〈婦人議員〉東京23区、26市一区議73人、市議60人、男性議員の7.2%（前回'80年調査比0.2%増）。婦人議員が10%上回っているのは、4区12市の都道府県—33人、男性議員の1.2%（前回調査と同じ）。政令都市—30人、4.1%（同0.1%減）。婦人議員が10%を超えるのは都道府県でなし、政令都市では京都だけで8人、11.1%。

婦人の政策決定の場からの締め出しはまだ改まっていない。（3・20付）

## ☆職場の女性差別—新日本婦人の会調査

新日本婦人の会中央本部（石井あや子会長）は昨年11月～12月末まで「職場で働く5000人の男女差別証言」を会員が調査、差別の実態を洗い出した。

〈採用・就職〉「女子は親元から通うことが条件」（秋田・損保、千葉・製造業、愛知・商社）。「男子は本社採用、女子は地元採用」（愛知・商社）。「門がまえのある家の女子を採用。以前は入社希望者の履歴書に親の財産、不動産まで書かされていた」（京都・損保）。〈仕事、地位など〉「新入女子社員にお茶くみの研修」（福岡・製造業）。「小学教師の場合、低学年は女教師、高学年は男教師」（ほとんどの県）。〈賃金、手当など〉「女性の定年時と男性の30歳の本給と同じ」（栃木・金融）。「皆勤手当は男性の半分」（長野・製造業）。「成人病検診が男子とその妻にはあるが、女子社員にはない」（愛知・商社）。（4・9付）

## ☆核戦争アニメに抗議のアピール

「核戦争アニメ『198×年』に反対する会」（代表世話人・山本薩夫監督ら7人）は4月9日、東映、東映動画が製作中のアニメ映画「FUTURE WAR・198×年」について、映画人、教育者、児童文学者ら約230人の署名を集め、反対アピールを発表。また東映作品「大日本帝国」（今夏封切り予定）への「動員作戦」が中・高校の視聴覚担当教師を通じ展開されていることに対しても抗議を表明。「核戦争に反対する願いを行動にあらわす一つとして、製作と上映をやめさせる良心の声をともにあげたい」と訴えている。（4・10付）

# 十字路

北海道

○アイヌ語保育を

失われつつあるアイヌ語を幼児に教えるために保育所を造らうと三年前、日高支庁平取町二風谷で地元アイヌ有志が始めた運動は、全国から約五百万円のカンパが集まり、保育所が一月にオープン。しかし、「特定教育は好ましくない」との役所の指導で、アイヌ語教育が締め出された。又、問題が国会で取り上げられそうになるや、国や道は「地域の特徴に応じた保育内容なら妥当だ」と姿勢を変更。

運動を進めてきた二風谷アイヌ資料館長の萱野茂さん(55)は、あくまでも「小さくても自分たちでアイヌ語の学べる寺子屋を作る」と、行政指導に不信をつのらせ、既定方針通り、年内に自分たち独自の寺小屋を作る努力を続けている。

(朝日、3・6、17、山口里子)

岩手

○岩手大付属小学校長に鷹野氏

二月二十三日、岩手大学付属小学校長選挙で、同大教育学部教授(食物学専攻)の鷹野テルさん(60)が当選。同付属小としては初

の女性校長となる。

○初の女性次長誕生

県の年度末人事異動で、大橋瑠璃子福祉部参事兼児童家庭課長が福祉部次長に抜てきされ、初の女性次長が誕生。(押切 郁)

千葉

○農作業で再出発―茗荷舎

船橋市芝山共同福祉作業所「茗荷舎」(竹内登美枝代表)は、市内五つの中学校の特殊学級卒業生を対象に「障害者の自立」をめざし二年前に作られた障害者と健常者の共同生活の場。布団乾燥車運転やお中元配達、農家の手伝いなどで収入をあげていたが、指導員が病気になる活動は一時中断していた。

中学校特殊学級の卒業時を迎えても、思う

ような就職先がないのが現状で、障害者の生活保障と自立を考えた時、共同福祉作業所の再出発が必要に迫られていたが、新しい指導員がみつかり、四月から再スタートする。その第一歩として四街道市の農地所有者から借りた約十平方メートルの畑でジャガイモの苗植えが行われた。

同作業所は「ものを作る」ことを基本活動

にし、当面、今までの活動のほか、車のエンジンオイルなどの廃油を回収し「粉せっけん」を作ることになっている。このため、「粉せっ

けん」製造の作業小屋を市内に求めている。

(毎日、3・17、奥田暁子)

神奈川

○金森トシエさん 県参事に

長洲知事は三月二十六日、江の島に建設中の県婦人総合センター開設準備担当に金森トシエさん(56)を県参事として四月一日付で起用すると発表。初の女性参事誕生。

同センターは今秋開設予定で、金森さんは初代館長職に就任する。

(神奈川新聞、3・27、皆川鎮校)

新潟

○新潟市内中学生の読書調査

新潟市中学校教育研究協議会図書館部が、同市の全中学校二八校の全生徒二万三百人を対象に、昨年十一月、読書生活調査を実施、「中学生読書白書」をまとめた。

本を「よく読む」27%、「あまり読まない」72%。読まない理由は「面倒」「なんとなく」が高率。よく読む生徒の読書の動機は「だれの影響も受けない」と答え、教師による影響は3%。

読書量―一般書物は約半数の生徒が「月一〜二冊」。漫画・雑誌は「月四〜七冊」。蔵書冊数も「一十冊以下」が一番多く32%。

一週間の読書時間は「三〇分以内」が最も多く30〜40%。一日平均三〇分以上読む生徒



8%。テレビ視聴は約30%が一日二〜三時間。読む場所は、男子32%、女子23%が「布団に入ってから」。学校図書館に対しては「娯楽のため」43%、「学習のため利用」12%弱。利用度も一週間に「一〜二回」が45%、「全然利用しない」が33%。

調査をまとめ「学校図書館が利用されていない実態にショック。これからの読書指導では、電波文化を積極的に利用していく視点も考えていかなければ」と話している。

(新潟日報、3・1、山口久子)

石川

○女性管理職、初の二ケタに

三月二十四日、県教委が発表した教職員異動で、女性管理職がこれまでの七人に加え三人の教頭と主事一人が誕生、初めて二ケタに。今年度から女性教職員の勤奨年齢五五歳が男性と同じ一律六〇歳となり、五十代の女性を管理職として登用しやすくなったことが挙げられ、今後さらに増えるとみられる。

(北国新聞、3・24、三石久江)

広島

○県政モニターの青少年問題調査

県政モニターの青少年問題についての調査結果が発表された。調査は県政モニター一五〇人を対象に実施。一二七人(八四・七%)が回答した。青少年の非行については、八六

・四%の人が最近増加していると感じている。非行の原因としては「物質的豊かさによる甘やかしなど家庭生活の厳しさの欠如」(六八・五%)とし、中学校に多い校内暴力では「生徒と教師の信頼感の欠如」(三九・四)「教師の暴力に対するき然とした態度の欠如」(三三・一)など教師に対する不満が現れている。親として子供の意識や生活が理解し難くなるのは、中学二年と高校入学以降が多い。

非行をなくすために、大半の人が「人間性を育てるゆとりのある教育」「教師が生徒の気持ちをもっとよくつかむよう努める」ことを望み、家庭でも「親と子の対話」「親自身」が家庭生活を大事にする」ことが必要としていた。

(朝日、3・18、国重美恵子)

長崎

○夫の教頭昇格、妻退職が条件

夫婦がともに教師の場合、夫が教頭に昇格する際には妻が退職する、という慣行が九州の大半の県で続いているが、長崎県婦人問題懇話会(座長・山口康子長崎大助教授、三四人)は「女性だけに犠牲を強いる悪習」と、近く高田勇知事に是正を提言する。

同県教組の調査によると、この慣行のために退職を余儀なくされた婦人教師は五年間で三百人を越える。最も多かったのは、五十二

年、離島と都市間の教育格差をなくすことを目的とした広域人事実施の際で「御勇退の願」が県教委から出され、二〇四人が退職。「お願い」は県教組などの強い反発と、文部省からの是正指導で翌年撤回されたが、昨年の県教組実施の調査では、二六人が「夫の昇格のためやめた」。

(長崎新聞、3・12、中村美佐子)

沖縄

○嘉手納爆音公害で住民提訴

極東最大の米空軍嘉手納基地の航空騒音に悩む周辺住民六〇一人(団長・照屋明さん)が二月二十六日、国を相手取って米軍機の夜間飛行の禁止、爆音被害の損害賠償などを求める訴えを那覇地裁沖縄支部に起こした。これまで抗議、撤去という運動を核にして嘉手納基地から発生する爆音公害を糾弾して来たが、復帰十年目を迎えてついに国を相手にした行政訴訟に踏み切ったもの。

前日の住民決起大会では「三四年にわたり爆音に悩まされてきた。子々孫々、地域住民のためにも勝利しよう」と決意表明、北谷町長も「痛い時には痛いと言おう。爆音問題は地域住民だけではどうしようもなくなった」と裁判の必然性を語った。

(琉球新報、2・25、26、吉浜ヒロ子)

◆78歳の溝上泰子さんから、5月号の若い人たちがすばらしい。いったい幾つですか、と尋ねられました。ほんと、年齢を記すべきだったと思いました。門野智子(15)、井田朋子(18)、遠藤由紀(19)、木本綾子(17)一敬称略一。みんなすてきなティーンです。  
◆5月号の発送はウイ書房から徒歩1分の中原公会堂で行いました。ドシャブリの雨の中7人の方のご協力で約3時間で終えました。今回、強力な協力者が現れました。徒歩5分の郵便局の局長さん。車を横付け、ずぶぬれになりながら運んで下さいました。翌朝郵便局へ行くと、局じゅう「We」の山ノありがとう。

地域の中で働くて、すごい力になるな、大切なことだなと思いました。

「むかい風」で車イスの市瀬さんが「わたしたちにとって、生きるために『地域』が必要なんです」と話されたこと、胸に響きました。

◆おかげ様で創刊号は品切れとなりました。創刊号からそろえたいのに、とのご希望も多いので、いま増刷を検討中です。決定しましたら、次号でお知らせします。つつましすぎる予想だったようで、ご迷惑をおかけしました。(馬場)

▼創刊号で、ますのさんが「自立」は「共

に生きる」と補い合わねば強者の論理になりかねないと指摘下さいました。本号のテーマは、ますのさんの原稿をいただく前に決まっていたのですが、共感を持ち、創刊号を追いかけるように世に送ります。

▼創刊号の好意的な報道の中で、読売3・22「しゅっぱん」欄は創刊ラッシュの中の「野の花」と。これは、私にとって最高の賛辞でした。Weに書く人、Weを読む人、Weを支える人、みんな「野の花」です。

▼3・26のWe創刊を祝う会に、毎日新聞の富田記者が沖縄から寄せて下さった電文。ウイ」タンジョウオオメデトウゴザイマス ハンダサンババサンノオヒトガラガソノマ マニココロアタタマルタクサンノキコウデ ウマツタザツシヲテニシテ、アアヤツトセイカツシヤトシテノボクタチノノゾンデイ タザツシガスタートシタ」トオモイマシタ ハンニンマエニスギナイボクワコノザツシ ヲカコンデミジカナヒトタチトタクサン ロンギヲシナケレバナラナクナリソウデス ソレワソレデチヨツトシンドイコトデスガ マタタノシミデモアリマスコレカラモスバ ランイザツシニセイチヨウシテイキマスヨ ウニアイドクシヤノヒトリトシテコロカラ キタイシテオリマス」……ありがとう、  
▼次号は「新しい家庭科とは」です。(半田)

▼Weの読者会が各地に生まれています。創刊前に開かれたのが神奈川の会。本号で紹介した武蔵野の会、続いて中野、北区でも。各地に読者会が生まれ、Weの誌面について、批評・感想を述べ合い、おしゃべりを楽しみ、勉強も、という場になったから——ワクワクします。

▼各地の読者会とともに、Weを支えて下さる方たちの会(いい名前をつけて下さい)の準備も進んでいます。まずはWeとWeをめぐるニュースをお届けするところから。会費は通信費として年千円。(切手可)

地域にお仲間のない方ぜひご入会を。全国の仲間との連帯があなたを支えるでしょう。ご入会希望の方、ウイ書房へどうぞ。

Vol. 1 No. 3 1982年5月20日発行

新しい家庭科— ek ¥500

(年間予約購読料 ¥5,000)

編集兼 半田たつ子

発行人

発行所/(有)ウイ書房

〒181 東京都三鷹市中原4-4-22

☎0422(46)3608 振替東京6-59867

印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

## Weの仲間になって下さい

雑誌の購入には、①直接予約購読②書店  
予約購読③書店での販売の三方法がありま  
すが、本誌は、当初①の方を募り、核にな  
っていただきます。②③については、現在  
下記書店で、便宜を計って下さいます。

誰でもいつでも書店でWeを購入できる  
ようにするには、何よりもWeの仲間をふ  
やし、実績を作ることが肝要です。あなた  
のお力添えをお願いします。

## Weの仲間をふやして下さい

予約購読料1年間5,000円(送料含む、1部  
500円)ご送金は、郵便振替が最も好都合で  
す(東京6-59867)。又は、平和相互銀  
行つつじが丘支店・普通預金0698412  
(有)ウイ書房。

(書店各位へ地方・小出版流通センター)  
に窓口を開いておりますので、ご注文の  
時はご利用下さい。

## ——Weの取り扱い店一覧—— お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい

(4月20日現在)

仙 台	こどもの本のみせ・ブーの家	0222(25)4762
	八重洲書店	0222(22)9809
	ポラン	0222(65)1936
泉	ホビット館	0222(72)2894
秋 田	加賀屋書店	0188(33)3111
福 島	岩瀬書店	0245(48)5141
結 城	太陽堂	02963(2)3711
浦 和	須原屋	0488(22)5321
東 京	ピッピ	03(295)2580
	渡辺書店	0423(81)9651
	国府書店	0423(63)8145
	鈴木書店	03(811)3323
	模索舎	03(352)3557
	くまざわ南口	0426(24)3248
	マルオカ書店	0424(71)5228
	書肆アクセス	03(291)8474
川 崎	北野書店	044(511)5492
相模原	ブックス上溝	0427(63)0906

鎌 倉	たらば書店	0467(22)2492
名古屋	ユニタ書店	052(731)1380
江 南	青雲堂	05875(4)1055
新 潟	栗山書店	
金 沢	白山書店	0762(44)4017
福 井	ひまわり書店	0776(22)5540
	じっぶじっぶ	0776(25)0516
岐 阜	仲野書店	0582(71)4408
奈 良	海老山書店	07436(2)0106
大 阪	旭屋書店本店	06(313)1191
	紀伊國屋書店	06(372)5821
	ユーゴー書店	06(623)2341
京 都	松香堂書店	075(441)6905
米 子	今井MC本店	0859(22)5158
山 口	白藤書店	0839(25)1212
大学生協		

福島大学、愛知教育大学  
金沢大学、宮崎大学、日本女子大学